

仕上がり見本の作成ありがとうございます

仕上がり見本をご確認ください

本は仕上がり見本通りに印刷されます。
誤字脱字や文章、画像の抜けもそのまま印刷されますのでよくご確認ください。

背表紙を忘れずにご確認ください

背表紙の文字は、半角英数字以外は縦書きで表記されるため、背表紙と表紙のタイトルで見え方が異なる場合があります。よくご確認ください。
背表紙のタイトルを別途指定したい場合、「本の設定」にて、背表紙用のタイトルを別途入力することが出来ます。
※半角英数字と全角文字が混じっている場合は特にご注意ください。
※ページ数が少ない場合は、背表紙に文字は入りません。

ご注意

印刷・製本のご注文は、最新の仕上がり見本のみが対象となります。
この仕上がり見本をご確認後に「編集し直す」で編集中に戻すとこの仕上がり見本で印刷・製本をおこなうことはできません。
再編集後に、新たに仕上がり見本の作成をお願いします。
※編集内容は、保存されていますので、消える事はありません。

※このページと背表紙の確認ページ、4 ページ目の白ページは、印刷されません。

(この仕上がり見本の印刷コード番号：108459-20140916121513-CPK)

作成した仕上がり見本の設定内容

本のタイトル：諏わっ子散華
著者名：伊藤正房
本のサイズ：標準サイズ(B6)
文字の方向：たて書き
書体：明朝
目次：巻頭に入れる
記事の並び：「古い日付」を先頭にする
改ページ：日付ごと
本文中の日付印刷：印刷しない
PDFにする日付範囲（開始）：2014.02.01
PDFにする日付範囲（終了）：2014.02.28
コメント：印刷しない
表紙に日付範囲の印刷：印刷しない
表紙にブログURLの印刷：印刷しない

英数字が90度回転しないようにするには、全角文字で入力してください。

<英数字を半角で入力した場合>

子育て日記 VOL. 2

▼
子育て日記 VOL. 2


<英数字を全角で入力した場合>

子育て日記 VOL. 2


▼
子育て日記 VOL. 2

諏わっ子散華

伊藤正房



背表紙は左のようになります。
半角英数字を使用している場合は**半角英数字だけ90度回転**した状態になります。
なお製本サービスをご利用の場合、このPDFの総ページ数が一定のページ数（モノクロは121ページ、カラーは142ページ）に達しない場合は背表紙に文字は入りません。ご承知おきください。



諏

わ

つ

子

散

華

伊藤正房

誦わっ子散華

伊藤正房

目次

浮雲のゆくえ	1
・	2
・	45
硫黄島の怨歌	94
・	95
光るかせ	128
・	129
・	178
・	221
誼わっ子散華	254
・	255
・	270
・	271
伊藤正房の本	272
伊藤正房の本	273
パウダーガイド社の本	274

浮雲のゆくえ



オーストラリア
パースの牧場とシドニー港

ほら、ここは地球の果てだよ。むかし映画があつたでしょう。「渚にて。」世界中が核戦争で消滅したとき、地球の果てのオーストラリアだけはしばらく生き残れた。地球で最後まで生き残るのはゆく子 という名の私です。

ゆく子のめざめ

朝からアブラセミの声がこだまする夏の青空だつた。色模様が美しい春の季節はすでにうつろい終わっていた。

色濃い花が咲き乱れる夏草に彩られた通学路から、隣の男子高の学園祭に訪れたゆく子は、文学部の芥川龍之介研究の展示場で部長の岩田に、作家の芥川の作品の文学的価値や、自殺に至る個人の態様などの説明を受けた。

要すれば、芥川龍之介は大正期の市民文学を代表する作家であり、夏目漱石に師事した秀才であつた。明治後の自殺した多くの作家の一人である。

芥川の自殺に文学的意味はない。打ちひしがれて倒れた作家である。原因は母の発狂が自分にも起こるのではないかとの脅迫観念からである。「ほんやりした不安」が芥川の生涯を規定した。芥川文学の「銀のスプーンで人生をもて遊ぶ」ような作風はその象徴である。

それは、精緻な工芸細工を思わせるもので、芸術至上の境地を確立した。

この男子校のモルタル2階建校舎は、霧ヶ峰に続く山際の丘の斜面を造成した階段型の地形にいくつか建てられていた。そこにはいつも青い北アルプスの峰々を逆さまに写す諏訪湖が見え、朝霧がたゆとう美景があった。

ちよūdō昼過ぎにかかり、開放された木枠の窓ガラスを通して、セミがやかましかた。

岩田はニヒルな感じの生徒だった。まるで説明されている芥川龍之介が、そこに再現したような面持ちにみえた。ほかに数人の説明役の部員がいた。文学部の展示場へ来る他校生は、ほとんどがそれぞれの高校ではおなじ文学愛好者である。

高校生のクラブ活動では、スポーツを含めて、もつと華やかな分野が多数あるにもかかわらず、あえて地味な文学部とか文芸部とかに所属する生徒はマイナーな存在であろう。

「帰りにもう少し話そう。」

岩田は、ゆく子にそう誘った。

非体育系では、科学部、地学部、地歴部、天文部、物理部、社会学部、新聞部など仰々しいエリート志向のクラブ活動が、伝統的に先輩が残っていた遺産をうけていた。

この高校の先輩たちは、明治の昔から一高、三高などに進学して大成した人も多数いる。

琵琶湖周航の歌 は、三高の寮歌だが世でポピュラーに歌われている。この学校の諏訪湖をホーム

にするボート部の小口が、三高へ進学して作ったものである。小口は後に物理学者として大成した。しかし中学生のガキのころは皆おなじドングリで、学園祭などを謳歌したのであろう。

岩田は高校生離れしていた。考え方にかたくななところもあったが、ゆく子には優しくかった。

「高校生という枠のなかで、行動が定型的に制限されるのは不満だ。」

と、岩田は言ったが、ゆく子にはちっとも分からない不満だった。

1963年ころの世相は、60年安保の波がひいて、大学ではベトナムに平和をなどのスローガンが目立ってきたころであった。世界のレベルではケネディ大統領の暗殺が衝撃を与えた。

セミ時雨のころ、ゆく子は岩田と知り合い親しい関係が始まっていた。ゆく子には兄のような岩田と付き合えるそこはかとなない喜びがあったし、岩田には二ヒルで孤立がちな高校生活に花を添える出来事だった。

岩田は、本人が二ヒルを自認していたし、哲学にのめりこむような次元で話をするので、級友は近寄りがない雰囲気を感じていたのである。

ゆく子は強い子だった。周囲で起こるすべてに平気だった。それは自分の育ってきた環境にくらべれば、かなり古いものの見方をするこの田舎の人々との接点を、常に家族全員で戦わず治めてきたその家族が共有する強さである。

ゆく子の実母はゆく子連れ子にして、戦後、諏訪へ嫁した。

その後、2人の弟妹を持つことになった。だから現在の父は義父である。この義父にもさらに大き

い男子一人いたので、名目の兄弟は4人で、血縁関係はややこしかったのだ。

氏（うじ）より育ち と言うのは正しい。ゆく子の家族は、血筋が入り組んでいても家族としては全員仲が良かった。家庭経営上の齟齬もなかったが、周囲の目は家族の思いと同化しがたい他家への興味本位の目もあった。

今日知り合った岩田のニヒルな社会観など、ゆく子には関心の埒外のものであったのである。ゆく子には、今そばに岩田がいることがうれしかったのであり、岩田の屈折した話を聞いても、それはそれほど胸を打つものではなかった。

だから、ゆく子は岩田にしゃべらせ、それを笑って聞いていられる時間を楽しんでいたのである。夏の終わり、蛍が飛ぶ真夏の夜に、二人は野合同然に愛を交わした。といってもゆく子は、岩田のするしぐさに抵抗しなかっただけである。土手の夏草に寝かされ手を入れられた。何をするのだろうかかと思っていると、指で盛んに芽のあたりを不器用にふれてきた。自分以外の人がそこに触れるのは初めての経験だった。

「ごじくらないで。」

と言うと、岩田はさわるのをやめて、全身でかぶさってきた。ひざで開脚させられ、なにか暖かい大きいものが前後したが間をおいて入ってきたようだった。

ゆく子は抵抗しなかった。成り行きを岩田に任せる一方に母の叱責の顔も浮かんで見えた。やがていま男女のことをしているのだと理解したが、抱かれた陶酔感と、下の痛みは別々に押し寄せてい

た。

まもなく岩田は、ゆく子の体の上からずれて横に添い寝のように寄り添うのだった。

「びっくりした。？」

岩田はゆく子を横から抱いて優しく聞いた。ゆく子には川の瀬音と、仰向けに見上げている空の暗闇を飛ぶ蛍火がこのときの記憶として永く残った。

ゆく子、高校二年生が、はじめてめざめた真夏の夜の夢だった。

ゆく子のゆくえ

岩田は、翌年3月には卒業となるのである。季節は秋の収穫期だった。農村部にすむ高校生は、農家の主要な労働力である。

岩田をはじめ農家の子は、もう小学校3年生くらいから収穫期は当然のように、担任の先生へおひまを申し出るよう家人にいわれて学校を休むのだった。いねかり休みとか、いねこき休みも設定されていたがそれだけでは間に合わなかった。

岩田も稲刈り、稲こきにかり出されて、汗にまみれた稲ほこりが、顔肌の色まで艶のない老人肌に変えて、その日の岩田の顔はモノクロ写真に見えた。

ゆく子は、自転車で岩田に会いに来ていた。

「もう少しで終わるから、ちょっと待ってくれ。」

そのおかしな顔で岩田はゆく子を引きとめた。

「オレは、卒業後、東京へ行く予定だが、東京にこだわってはいない。地元へ残ってもいいと思つてもいるのだよ。」

「卒業したら私は、東京へ出ます。だから、迷っているなら東京へ行つて待つて。」

と、背中を押すゆく子だった。

高校生同士だったが、すでに大人の男女関係になっていたし、情にそざられては訪れる岩田のもとでは、その都度愛の営みが定例化していた。

「気をつけてお帰り。」

岩田は、そのせいで上気してのぼせた顔で自転車のゆく子を送り出した。

この生活になれ、男のする行為がすべてわかったころ、ゆく子は岩田に言った。

「岩田さん。私を好きなように抱いてください。だけどこれで遊ばないで。私は純潔なんて信じないけど。遊ばれるのはいやよ。」

岩田はうなずいた。それからも二人の行為は断続的に継続していった。

そのフィールドは、寒風吹きすさぶ雪の日の諏訪大社もあつたし、凍つついた前宮神原もあり、雪の細道を転倒しないよう、横抱きに支えあつて歩く真夜中のこともあつた。

翌年の3月、岩田は色もないモノクロ模様の殺風景な季節の諏訪を離れ、中央線の蒸気機関車の一

声の汽笛とともにゆく子を残して東京へ去っていった。

ゆく子は高校3年生になった。悩みは進学か家事専念かの選択であった。大学なら早稲田と決めていたが、いまいち調子が乗らないゆく子であった。

去った岩田を思ってみたりしたが、岩田を頼ってもせん無いと思った。彼自身が何かできるわけではない。

自分のことで精一杯であろう。とても故郷を振り返る余裕はないはずである。それに岩田の考えは独自主義である。自分と情は通じたが、別に夫婦になつたわけではない。

あるいは一過性の付き合いになるかもしれない。

そんなこんなで今年も秋風立つシーズンに至つた。秋はゆく子にとって年々歳を経るごとに人生の盛衰を意識させる。それは華やかな紅葉と、霜枯れた老木との対比があざやかに際立つシーズンだからであろう。

昨年は、岩田との出会いに導かれこの時期には夢のような胸躍る日があつたと思うゆく子だつた。「諏訪から怒りをこめて〜」

と、岩田に手紙を出してみた。このころ風靡した映画007のテーマソング、「ロシアより愛をこめて」をもじつたものである。

岩田は返事をくれたが、ゆく子が予想したとおり自分のことで精一杯の様子だつた。

ゆく子は、早稲田大学を目指して浪人でがんばってみることにした。高校卒業後、甲府の親戚に寄

留して半年基礎学力をつけ、後半は東京へ出る計画だった。

10月には東京オリピックが開催され、それに先立って諏訪でも聖火リレーが行なわれた。蟬噪な「世界の祭り」は滞りなく終わったようであった。

松本の手前の塩尻峠から湖水を渡って来る風を、塩嶺（えんれい）おろし というが、この寒風の中から、が湖水を凍らせる12月になると諏訪は色が消えてしまう。

ただ、湖畔の「かりん」というマルメロの黄色い実と、穫りもれたりんご、そして必ず柿の木に一つ残す柿の柿色だけが点々と霜枯れている冬景色があった。

卒業式の3週間くらい前、岩田が突然帰郷してきた。岩田はかなり疲れた顔をしていた。1月に祖母がなくなり、今回は四十九日の法要だという。

東京は、今、アパートの周旋のアルバイトをしているということだった。4月からは公務員で勤める予定だとも添えた。

ゆく子には、岩田にかける言葉もみあたらず、岩田を憐憫まじりで見守るほかなかった。

再び三月、ゆく子の卒業の日が来た。春秋三年（みとせ）通った女子高校を卒（お）え、友人と女同士の友情も汲み交った思い出を胸にして、再会も誓いあいながら校門を離れたゆく子は、受験勉強のため甲府の親戚宅へ寄留する準備にかかっていた。

その前に一度東京へ出て岩田に会いたいと思ひ、意を決して東京の岩田の居所を訪ねてみた。

岩田は喜んだが、ゆく子にかまけているわけにいかない様子も見えた。しばらくぶりの再会だったが、話が弾むようなこともなく、淡々として近況のはなしで交流した。

甲府はあたり一面が、桃色に覆われる桃源郷の4月であった。残雪豊かな南アルプスの、すき透るようなたおやかな峰々に抱かれた甲府盆地は春うららだった。

ゆく子の今は、毎日が日曜日の感覚だった。ただ受験参考書をながめたり、庭の桃の実をながめ、桃の成長の速さには驚く日々が続いた。桃は、わずかに与えられた季節を超特急で生育しているのだった。

それを見るとゆく子も、わずかに与えられたこの期間で、受験準備の成果を桃のように促成させねばと焦った。

東京から岩田が一度訪れた。すでに違った生活を別々に進行している二人に当面の接点は見当たらず、顔を見せただけでその日は別れることとなった。

東京から甲府へ来るのにも交通費がかかる。往復で千円は必要だろう。ゆく子は、岩田にその半分を渡した。

「無理して来なくてもいいよ、」

その日ゆく子も、後を追いたいような感情にはならず、岩田は単なる訪問客だった。見送りのもなく、岩田は家から駅に向かって一人で帰っていった。

すでに二人が愛を交わした夜から1年と数ヶ月を経て、時と場所の異なる生活が、二人の人生の端

緒から一致した方向は見え、ゆがんだ時空が不連続に並んでいるのだった。

ゆく子の生活は、早稲田大学への受験へ続いているように見えたが、しかしその年度の受験はなかった。後半からやる予定の東京での特訓が挫折したからである。

甲府をひき払って上京したゆく子だったが、その後もいまいち調子に乗れないのだった。

ゆく子は私鉄沿線にアパートを借り一応東京での生活の足場を定めた。ここには通勤途上の叔父が時々寄って状況をみてくれたりしたが、一度離れたゆく子の受験熱は再び燃え上がる兆しはなかった。

アパートには、岩田が一度来てくれた。岩田はすでに社会人だったので、受験の話は興味がないようだった。

その一夜の展開は、五反田の銀行からの帰路寄った叔父が気をきかせて早々に去った後にみた。諏訪からの愛の続きは、少しも変わらなかった。しっかりと抱かれ、しっかりと受け止めた。しかしすこしずつ二人の心のすわりが、わずかにずれた位置に落ち着いてきているような気がするのだった。

「ね、私が、あなたにのめりこまないほうが、あなたはいいでしょ。」

岩田に何もかも投げ出すがつたら、岩田は困惑するだろうと思うゆく子だった。

そして出口のない愛が飛び飛びで続くだろうとも思うのだった。

ゆく子は、この言葉をもって、岩田へ過去のような心の依存は打ち切ることを宣言したつもりであった。

このアパートでの逢瀬は一回で終わった。岩田は、2回ほど来てみたらしいが、すでにゆく子は仕事を探して外泊が多い身だった。

この年、ゆく子の弟が高校の卒業となり、S大学へ進学した。母が居所の心配をしたらしく、岩田にアパートの斡旋を依頼してきた。

ゆく子が海外旅行に出てか不在だったからである。

ゆく子の弟は、地元の工業高校に通っていた。母が岩田に愚痴ったことがある。高校の脇にマルキという蕎麦屋があり、普通は生徒は弁当持参か、購買部でパンを買うが、3年生くらいになると、親子ともに面倒だから親からの金で、この30円のマルキ蕎麦を食べるのである。

しかし食べ盛りだから、さらにパンを買うなど物入りだというのであった。あまつさえ内緒でタバコを買い、コンパでは酒を買うのである。

タバコの禁止は高校では定番だが、両切りピースが40円、いこいが50円、しんせいが40円、新発売のハイライトが70円だった。

弟は、さらにこのタバコを購入したので、いつも金に不自由していた。

ゆく子の感（カン）では、その後岩田の身の上にも何らかの展開があつたようである。それは異性にかかわることだろうと察したがゆく子は、岩田の身の回りのことを必要以上の詮索はしないと決めていた。

あるとき岩田は、ゆく子を居酒屋へ誘い、その後自分の新しいアパートへ連れて行った。

ゆく子は何ヶ月ぶりの岩田の愛を受けたが、翌朝出勤時にはわかれた。このような逢瀬は数回あり、ホテルの枕辺で近況を語り合う機会があった。

岩田は、以前の燃えるような二ヒルを秘めた魅力は消えていた。諏訪にいた親友を交通事故死で失ったショックが大きかったようで、人生無常の枯れた思いが作用しているようだった。

ゆく子は、岩田を大切な自分の心に残る愛人として、自分のエリアに祀りあげていたが、自分の生の方向が見えるにつれ、徐々にその必要も感じなくなってきた。

今は自分が現実を扱う大人になったのだと自覚するのだった。そうは思ってみてもゆく子にとっては、どこかに居てほしい岩田であった。

2年後、ゆく子は、麻布のアパートに住むことになった。都心の一等地で、あの堤（つつみ）財閥一族の本宅の裏という豪華な場所であった。

ゆく子が、このような高級アパートに住居するに至った理由には、時間の重みをもつしがらみが、幾重にもかからんだ過去からの事情があった。

ゆく子の父

ゆく子の身の上には、実母の過去が作用してくることになる。昭和21年にゆく子は生まれた。

したがって父の實在の証拠は、ほぼ1年前の昭和20年の終戦の年ということになる。

ゆく子の実父は、戦後の混乱期に軍のかかわる縫製工場で知り合った娘にゆく子を産ませた。

父は軍属で当時40歳、母は20歳だった。

しかし父には、終戦にあたり帰りを待つ家族がいた。妻と子である。思い余った父は、ゆく子の母に生まれた子連れ去るよう頼んだのである。

戦時の明日をも知れぬ状況のなかで、よるべない愛をはぐくんだ二人だったが、国家の戦争という束縛から解放された後には、従来の秩序が回復し、厳然とした従来の倫理は改めて有効に復活したのである。

事情を察した母は、ゆく子を抱えて身を引かざるを得ないことになった次第である。

以来母は、艱難辛苦の子育てとなった。以下は、母が子つれで嫁した諏訪でのストーリーに連続し、現在まで続いてくる話である。

それから20年後のいま、ゆく子の母は過去のしがらみを訪ね、ゆく子の父を探して不定形で暮らすゆく子への何らかの援助を依頼した。

「あなたは、自分の子のゆく子に何をしてくれるのでしょうか。あのときの結果が、いまこうなっているのですよ。」

父は、身につまされる思いで、母の依頼に同意したのである。そして今、父は還暦を迎える歳であった。

「すまなかつた。ゆく子はそんなに成長したのか。分かつた。できるだけのことでしょう。」

父は、住む場所をゆく子の希望する勤務場所に近い麻布にアパートに決め、ゆく子に提供した。そして衣類も好きなように調達するよう応えたのであつた。

ゆく子は幼児から、実の父の存在を聞いてはいたが、いまになってそのような形で実父が出現するとは夢にも思つていなかった。

幼時は戸籍上、ゆく子だけ苗字が異なつていた。それはその歴史の隠せない証拠でもあつた。しかし、高校時に養子縁組の手続をしたらしく、その後は兄弟とおなじ苗字に変えられてきている。

ゆく子は複雑な思いであつたが、これらは一義的には母と父の間のことである。ゆく子はその運命の子として、どれだけの発言権があるのかということであろう。

結局、火種をつくるリスクを避けて、ゆく子自身は現在の実父には面会することは避けたのであつた。

実父は母を経由して当面の利を供給してくれた。

ゆく子は、借家の提供という限定した範囲ではあつたが恩恵を得たものである。

足場が固まつたゆく子は、職を考えていた。自分に何ができるだろうか。また、物欲もおしゃれの欲も、自由な時間への希求も、すべて並以上に兼ね備えた自分には、あらゆる社会の制限を受け、打ちひしがれて勤務するような勤め人には向かないと自認した。

岩田の生き方をみると、男性だからやむを得ないが、不本意ながらすべての自由を制限され、すま

じき宮つかえに憂き身をやつしているではないか。

「そんなのいやだ。自由な仕事をしたい。」

ゆく子はそう思うのだった。

ゆく子の母は諏訪にいた。ゆく子は母に会いたくなるたびに帰郷した。諏訪女子高の友達も半分以上郷里に残っていたので、多くの友人に道でめぐりあうこともあり、随時旧交をあたためることができた。

ゆく子のいでたちの、流行のアパレル雑誌のような豹皮模様のミニスカートは諏訪の田舎では異常に目立つものだった。湖畔を一人で歩いているとき、同年輩の若者が近づいて声をかけた。

「お茶でも飲まないか。」

という陳腐なナンパであった。ゆく子の性格は強い。やわらかく断る柔軟さに欠ける22歳であった。

早々にトラブルとなつて、これを誘発したのはゆく子だったが、彼の若者はこれをきつかけに恐喝容疑で逮捕されることになり、後に示談で解決する騒ぎであった。

ゆく子には、やさしい男が好ましかった。目に浮かぶ男は岩田とか、その先輩の面々であったが、それらはすでに20代の中盤や後半の、多忙なみなさんであった。

ふと、諏訪駅前の喫茶店エッセンで、高校生の岩田と待ち合わせたことを脈絡なく思い出した。あのときの岩田は、時間にかたくなだった。ゆく子が2分遅れたら帰ってしまったのである。

あのころの岩田には、そのような杓子定規のかたくなな一面があった。でも、岩田は歳を経るにしたがって徐々に丸くなったのだ。しかし今の彼の融通無碍は丸くなりすぎではないか。すこし昔に帰したほうがいいのではと心配になった。

ゆく子が恐喝をうけた事件に当たった担当の警察官は、

「あなたみたいな方が、婦人警官になってくれたら良いんですね。」

と、ほめたのか、そうではなかったのか不明だが、ゆく子のセキュリティの資質を評価した。

このようなトラブルは新宿駅でも起こった。ゆく子は、こんなとき納まらない自分の性格の評価に困ったのであった。

「私は、岩田さんたちがつて、ぜんぜん進歩していない。」

その話を聞いた母は、防犯用の缶詰めを送ってきた。缶を叩くと、恐ろしい音が出るアイデア商品であった。ゆく子は、親心がありがたかったが、ちよつと的外れな母に苦笑した。

海外志向

ゆく子は、余裕で海外旅行に出た。日本の景気は上向きで、農協の団体などが東南アジアやヨーロッパ観光の良客としてターゲットになっているところであった。

まずはタイランドで、小乗仏教の鮮やかな僧院の色彩に魅せられ、見たこともない果物に感激し

た。海外にいと人生観が変わる思いだった。

多くの初めて海外に触れた日本人が書き残す、最初の共通した他国旅行の印象らしい。
アメリカのサンディエゴでは、岩田へ絵葉書を送った。

また、為替レートが刻々変わる実態も体験できた。タイランドで買ったドルを、マレーシアで売ったら差益が出た。このスリルも魅力だった。

岩田が同伴していたら、この旅行は一段と楽しかっただろうと思っただけのものである。

しかしそれは永久にないだろうとも思った。

航空機で移動する暇な時間は退屈だった。岩田が私の旦那だったら、うまくいっていたらどうかとの視点で見ると、なかなか難しいこともありそうだと思うのだった。

知りすぎた人であり、同郷のおなじ池の鯉である。

歳こそ2〜3歳違いだが、学んだのはおなじ諏訪のエリアの学校である。小中学校では、「諏訪郡歌」を歌い、「信濃の国」を歌ったのだ。冬はおなじ寒気をあじわい、おなじ水源の川の流れを見た。原体験が同じで、互いに分かりきった会話しかかないのだったら二人の進歩はない。

しかし母は、娘のゆく子の想像上の伴侶として岩田もそのターゲットに加えていたが、と、思いふと苦笑したものである。

時折、乱気流が航空機を大きく上下させ、機体がギシギシしむとゆく子は思わずひざを絞めた。

海外旅行から帰国したゆく子は、しばらく呆然自失の間を経て、自分がすこし翔んだほうが良いのではないかと思つた。

家に閉じこもつて、テレビを見たり、アパレル雑誌をみる生活にも飽きていた。岩田もいそがしくてよりそつてくれない。

この間は、岩田は父母の離婚問題で悩んでいるといつていた。ちようど自分の母が東京へ来ているから、経験者としての母に話を聞いてもらつたどうかしらとも思つた。

いや、岩田は、私だから打ち明けたのであり、まったくの他人の母には話さないだろう。

お互いに、自分に専属することには、乗りあわないほうが関係は永続するだろう。岩田に電話したら、明日お邪魔するとの返事であつた。

ゆく子は、岩田のために何か作ろうと、渋谷へ買い物に出してみた。

「複雑なことになつてしまつたねえ。」

ゆく子の母は、自分の父母が離婚に至つたと話す岩田に同情した。

「岩田さん。だれかと結婚話があるのですか。」

母親は、岩田を探るように見た。

「先日ありましたが、どうも尻にしかれそうなタイプだったのでやめました。」

岩田は、ゆく子の顔を見ながら応えた。ゆく子は、岩田に自分のことを言われたように感じられ

た。

「私は、妻子ある人でもいいわ。」

と、ゆく子が言う。

「だめです。それは絶対にだめ。秩序が乱れて迷惑がかかります。」

母は、激しく言った。すこし間をおいた母は、岩田をみて、

「私は、平気で主人をしいていますよ。」

ゆく子の母親は、こともなげに言い、食事の準備にかかった。

ホステス業

ゆく子は、買い物などに同伴する女友達の紹介で、六本木のクラブの夜の蝶に挑戦することにした。

夜の蝶、すなわちホステス業の道は、多くが生活苦などの事情から踏み込む水商売の世界で、一般にはゆく子のように、リクルートとして考える余地のある人は少ない。

世間体も良くない風評が感じられる業種であるし、厚化粧の汚れた女を連想する業界である。

ゆく子の場合、積極的な挑戦ととらえるのが至当であろう。

半年後、ゆく子は岩田を麻布の自宅へ招いた。

「ねえ。ゆく子のところへ来て。」

と、以前に比べればかなりスレたやり方かなと自分でも思うくらいだった。

岩田は、数人の男女が同席したゆく子宅に違和感をおぼえたようだった。それでも彼が持ち前の如才ない対応で接してくれたのは、ゆく子に恥をかかせない配慮からであろう。

みんな麻布の夜の蝶だった。ひとりの男はいずれかの旦那の風体だった。つまり同業者とヒモの懇談会のようなであった。

この業界では、店という社交場は虚栄の場で仕事場である。ホステスの会話も行為も本音はなくすべて偽善のパフォーマンスの世界である。

だからホステスという個人は、職場での没個人の抑制のウサをこのような場で発散し、仲間同士のわずかな本音の交流として語り合うのである。ゆく子はすでにこの半年の仕事から、このような私的な時間のもち方を普通にしていた。

しかし岩田のような普通のサラリーマンの時間の配分は違う。岩田の世界では、数人の人がおなじ時空にいれば、数人の共有するものを共通の話題にしようと考えるであろう。

ゆく子は、それは違うと岩田を制した。ここにいる数人は、それぞれ別のことを話してよいのである。意見の共有はいらないし同意も不要である。この夜の人々の娑婆には太陽はなく、場は閉ざされたところなのだ。

それが、生き馬の目をぬかねばならないホステスの世界だった。

客の要望があつて気が乗れば、朝までサービスも厭わないのである。ゆく子も、数人のなじみ客をつかんだ。その数がこの世界の人事考課であり、業務の優劣が評価される基準である。

ゆく子は、岩田を自分のベッドルームに招いた。

「一緒に寝てちょうだい。」

「みんなまだいるよ。」

「いいの。」

仲間の前で平気で同衾の姿をさらしても、なんら珍しくもなく、差し支えないのが互いの仁義なのだ。

「はじめてあなたが私を女にしてくれたとき、あとから私、あなたに純潔なんか欺瞞だつて言つたわね。」

岩田は、覚えていた。

「私を使って遊ばないで、おもちゃと思わないで。とも言つたね。」

「今、分かった。ホステスの業界では、あれはたいしたことではないんです。」

「そのようだね。」

「汚いと思うでしょうけど、共同トイレといっているわ。それで客を引き止めて置かれるならいくらでもココをお貸しするんです。だつてそんなところに私の純潔はないんですもの。」

岩田は応えなかった。ここは返事をしないほうがいいと判断したのであろう。

「岩田さん、やりたければどうぞ。わたし何もはいていないから。」

「いや。今日はいいよ。つかれていそうだ。」

ゆく子は笑って、起き上がり岩田の前を握り締めた。

「私、あなたがきつと、そう言うと思っていた。」

ゆく子は、岩田の上に女の騎乗型で乗り、磐田の立ち上がりを自分の子宮口に押し込んだ。

ゆく子が入れた岩田のそれを中腰で上下してしごく最中に、先ほどの女が「予備のお布団を貸して」と入室してきた。

驚いた岩田が、ゆく子を押しどけようとしたが、ゆく子は結合したまま上から岩田を押さえつけた。

「いいの。そのまま。」

どこにも羞恥心は見当たらなかった。

脇を通り過ぎたその女も、二人のセクスになんの興味も示さず布団を抱えて出て行った。

下から見上げるゆく子の顔は、化粧やけているようで、まぶたの整形のあとも見えた。上下させる腰の下の子宮口のヘアーは以前より濃くなっていた。

ベトナム帰還兵

「気が向いたらいつでも来て。」

ゆく子は、朝、岩田が出勤するとき声をかけた。岩田は急いでいるようだった。数カ月後、ゆく子は岩田に電話した。

「いま、TBSテレビにいるの。私が出演する作品のビデオ撮りなの。」

ゆく子は、時間待ちの間をもてあまして、岩田に電話したのである。岩田は、異質な、いつもと違う話の内容に違和感を覚えたようだった。

「放映は、7月11日の19時です。見てね。」

「まさかポルノじゃないだろうね。」

「この間のことを言ってるの。違うわよ。私たちの仕事の真髄をわかってほしかったのよ。あなたとの関係は別次元よ。」

「分かった。驚かないよ。君は仕事と僕を分けている。」

ゆく子が岩田にさらしたあの夜の娼婦まがいの行為は、ホステス業の側にある営業行為を、岩田に理解させようとしたものである。しかし岩田がゆく子の本心を理解し、受容してくれたのかどうかはわからなかった。

ゆく子はその反応を見たい気持ちもあった。さぞ岩田は驚いたであろう。あのとときゆく子が岩田を自分の子宮口に入れて腰でしごいても、岩田は硬直したままで果てなかった。

岩田にはわかってほしい。私が求めるのは、アレではない。あんなことは誰でもできる。男女の体

の構造がそうなっているのだから。

懐かしい「純潔」という言葉は、岩田に2回言った。最初ははじめて岩田が女にしてくれたとき、そして同僚のホステスが出入りする部屋で、あたりかまわず岩田の体を、上から責めたときである。いずれもゆく子は純潔を欺瞞だと決め付けた。肉体的な純潔など純潔ではない。

「私の純潔は、そんなところはないのよ。」

ゆく子は、岩田に対する、ぶれない自分の心こそ純潔だと信じていた。

仮にこのまま永久に逢うことがなくなっても、その純潔はその時点から凍結されたままで守られるだろう。

ゆく子は放映の日、出勤時刻をすこしずらしてそれをみた。期待した割には駄作だった。

やらせのドキュメンで、ベトナム帰りの数人の帰休兵が、日本の娘とつかの間の交流をし、数日後に惜しまれて再び戦場へ帰っていく30分のものであった。

娘たちとの交流シーンは「慰安婦」を連想し、別れのシーンは数人の兵とおなじ数の娘が互いに抱きあつた惜別に浸るシーンで終わった。

安上がりのドラマもどきの番組だから、局は、俳優などでなく、場末のホステスをにわか俳優に仕立ててテレビに出したに違いない。

「見たよ。」

岩田から電話があった。

「あまりピンとこないドキユメだった。」

「私も怒っているわ。局の説明と違う内容だったわ。」

ベトナム帰休兵への同情が情緒過多に過ぎ、社会性がボケた駄作だった。岩田は、それを高田馬場の小料理屋のテレビで同僚と一杯飲みながら、女将を含めて3人で評価しあつたのである。

「出演料は入ったから、なにか食べましょう。ウチへ来て。」

岩田は、3日後に来た。先日のホステスがヒモの旦那と同席していた。岩田はことさら話すこともなかった。

「邦ちゃん、県立高校出ているんだって。」

旦那役が、ゆく子に質問していた。ゆく子は源氏名を邦子と言うらしい。

「ジョージは店に通っているかい。」

「先週来たわ。」

六本木には当然外国人も来る。ベトナム派遣の合間の休暇兵も多いのだ。日本はいわずと知れた米軍の、ベトナム戦争の補給基地なのである。

「ベトナムで戦っている人は、若いのに自分の人生をよく考えているわ。」

ゆく子は、ベトナム派遣兵を評価した。

「その点、日本の若者は切迫感がなくてダメネー。考えが甘いよ。」

ゆく子の目は真剣だった。海外旅行を通じて、いわば外国かぶれの気(け)が感じられていた。ゆく子に言われるまでもなく、日本の巷の若者が平和ボケして、何事にも役立たずであるのは岩田も同感だった。

ゆく子は今、ライフワークとして英語の家庭教師と、ピアノの家庭教師を呼んで、定期的なレッスンを受けていた。特に英語にはこだわっていた。

「岩田さん。私、ホームステイで英語を勉強してきたい。」

「それは英語をマスターする早道だね。」

ゆく子は、翌月早速オーストラリアへ旅立つと岩田に連絡した。

「10日後には出国するわ、それまでここでいて私を慰めて。」

岩田は、ゆく子の出国前の心細い気持ちも分かるが、そんなに家を空けるわけにはいかない。2、3日は同居しても良いとの返事だった。

ホームステイ

ゆく子は、出国した。行き先はオーストラリアのベトナム兵ハットの留守宅であった。勤務先の六本木クラブの客だった、ベトナム帰休兵ハットの誘いによるものだった。

オーストラリアは広大な国である。南回歸線が大陸の中央部を走っているので、それより南に並ぶ

大都会は、いつも北から太陽がさす。日本と同じ経度だから時刻は同じで時差がない。位置が南半球だから、当然日本とは夏冬が逆の国だが四季はある。

ここはパースという町で、オーストラリア大陸の西側である。ここから日本人が良く知る、シドニー、キャンベラ、メルボルンは3千km以上も東にある。

ゆく子のホームステイは、ベトナム派遣の兵士ハットの留守家族の世話を受けるものだった。

プールもある広い敷地の家で、ゆく子は、メイドと間違われない程度のお手伝いをした。

家族と離れていては、会話ができないからできるだけ家族に混じって暮らす必要があった。

家族との会話では、日本の風土の説明もし、自分の親兄弟のことも話した。兵士の父母、弟、妹が相手の生活だった。

夕食後の団欒は好ましい融和な雰囲気であった。ゆく子のアパートにホステスが集まって猥談をする雰囲気とは異なっていた。

ゆく子も知りうる限りの英語の単語を並べて身振り手振りで加わった。母と妹が聞いたがった話題はラバー、恋人の話であった。この国では、恋人かどうかは別としても、男女がペアを組んで行動するのは当たり前で、男女別に孤立する人はいない。

ボーイフレンドが「いない」などといえは、社会人失格のように言われるし、「いる」といえは、根掘り尋ねられるのである。

そのような場面では、「日本の習慣では、親の許可が必要だ。」くらいで逃げるのが良い。クリス

マスには、真夏のプールサイドでパーティーが行なわれた。

ベトナム派遣兵のハットの父は牧場を持っていて、競走馬の調教もしていた。父は、日本のダービーの騎手とおなじ格好で馬を乗り回す毎日だった。そして父は、この調教した競走馬へ出資を募って、勝ち馬の分配金のコミッションをこの家の生計に充てていた。

もともとイギリスからの移民たちであり、英国人はギャンブルが好きで狩猟が好きな民族である。

イギリスからは、最初はキャップテンクックが現地人を駆逐して覇権を制したと歴史に書かれていた。これらオーストラリア人は、元祖がイギリスの紳士淑女だから、上品で教養があり公徳心も高い。

ゆく子は、高校生のころ故郷諏訪の蓼科高原で観光馬に乗った記憶があり、この牧場の馬を見て、ほぼ10年前の自分に思いをはせた。

この家の主人の名は、チェイフとあった。CHAFFEである。なぜFがダブっているかという質問に、父は、Fがダブる綴り方はフランス語からきていると説明した。古い時代、イギリスはフランスだった。とも言ったが、ゆく子にはよく理解できない話だった。

よくしたもので一月後には、ゆく子は不自由なく日常の会話がこなせるようになっていた。受験英語を中学生から6年も学校でやったが、モノにならなかつたのは、日本人がいつも英語を必要とする環境にないからである。窮すれば通じるというが、切羽詰った場所に身をおけば、いやおうなく英語も上達し得るのである。

「日本人の発音は押しなべて強い、もつとリラックスしていいのよ。」

そう忠告した妹は、ゆく子より2歳下だったが、上背はゆく子が見上げるほどだった。妹は週に何回か町で物資の調達を行なった。

下着がほしかったので、便乗しスーパーマーケットで物色したが、下着はいずれも、巨大で、とてもゆく子のボデーサイズにはあわないものばかりだった。

妹の体型を見て分かっていたが、見たせえばこの国の人々はいずれも巨大人であった。

上背もあるし、女の胸やお尻は際限なく巨大である。ただ、父親が小型なのは不思議だが、騎手業を適職としている。

天賦の体つきか、騎手業に体型を合わせた努力によるものか分からないが、父にとって騎手は天職といえた。

岩田への手紙を書いてみたが、帰国の日も迫っていたので投函するのはやめた。外出のついでに、ワラビの毛皮を土産に買ってみた。

広い通りには、交通のサインがあり、カンガルーの出現を警告していた。日本では奈良で、鹿を自動車で跳ね飛ばさないよう注意書きが掲げられていたのを思い出した。

インド洋に続く西の海には高い積乱雲の裏側まで青空が続いて、真夏の海は心地よかった。

ゆく子の転機

帰国したゆく子は、すぐ母のいる諏訪へ戻った。オーストラリアの夏から、真冬の諏訪では体が順応できず、すぐに体調を崩すことになった。ゆく子はここで2週間ほど静養した。

凍てついた外気に身をさらす不安から、通院以外は外出しなかった。諏訪湖は凍結し、近日、湖の水が不安定をきたして盛り上がる自然現象の、おみわたりが予想されていた。

諏訪大社上社のタケミナカタさまが、下社のヤサカトメ妃のところへお渡りになる神事のゆえんである。例年この神事は同じ諏訪の八剣（やつるぎ）神社が司っている。

めずらしく暖かい日があった。ゆく子の実家のすぐ裏手が諏訪大社上社である。ゆく子は、諏訪大社の境内まで行ってみた。

山の北斜面にあるお宮は、夏でも寒く、花崗岩の白っぽい鳥居は氷柱にも見えるのだ。まして冬は陽もささず極寒地獄の様装であった。

この地続きに法華寺がある。古くは織田信長がしばらく滞在にしたというゆかりの寺で、ここには忠臣蔵の赤穂浪士に殺害された、いじわるな吉良上野義央（よしなか）のあと取り息子の吉良義周（きらよしちか）の墓がある。

吉良没後、家は断絶し、義周は諏訪へ流されたのである。

ゆく子が高校の夏休みに、友人と法華寺の本堂を借りて日々勉強に励んだ懐かしい寺だった。

ここにいるとゆく子の原点が見えた。生を受け、もの心ついて育くまれ、恋人まで作って人生の悩みも萌芽も与えられた原点である。

厳冬のここ諏訪大社の布橋という通路を、岩田と手を取り合つて渡つたこともあつた。寒さに耐え切れず、脇の木陰で抱き合つたこともあつた。

しかし、今は恋人の岩田は岩田の独自の道を確実に進んでいたし、ゆく子をいとしく思つてくれてるが、私は甘えられない。

ゆく子の胸には、岩田とは違う道を歩く構図が浮かんでいた。それはオーストラリアの大地だった。パースを離れるとき、父母が言つた。

「次は、ベトナム帰りの息子のハットと一緒に来てくれ。待つている。」

ゆく子は、日本へ向かつて飛び立つ飛行機から、遠ざかるオーストラリアの広大な砂漠の大地をみた。

「私のふるさと。」

ふと、口から出た言葉に自分でもびつくりした。心騒ぐゆく子であつた。

東京麻布のアパートは閉めてあつた。

数日を清掃にあて、ぼんやりと過ごしたが、オーストラリアの輝く夏の風情の、一片もここには見あたらなかつた。ただ、冬の薄日が霜げた数本の冬の木立をかすめて、アパートの窓際にやつとどく程度の低調なものだった。

ゆく子の生活とはまったく違う世界で、人類の歴史と運命は動いていた。

ベトナム戦争が終末期を迎えていたのである。守勢に立たされた米国は、世界的規模の反戦運動の圧力に押され、68年に北爆全面停止を宣言、翌年から撤兵を開始した。

米軍の援助を失った南ベトナム軍はやがて瓦解し、ホー・チ・ミン政権の誕生となった。

ゆく子が、ホームステイから帰った年であった。これでベトナム派遣兵のハットも帰国できるであろう。

ゆく子は、ハットを媒介に羽ばたきたいと思った。海外移住はゆく子には数年来の夢だった。

日本には、別れがたい母も兄弟もいるし、培った友人も恋人の岩田もいる。しかし、地球は狭い。明日と言うわけにいかなくともいつかは逢える。みなさんは場所が遠くなるだけである。

ゆく子にとって、ベトナムから帰国してくるハットは、メディアつまり媒体である。移住には、婚姻ビザを取得するのが至便である。

このビザの源泉は婚姻という証明書によるものだから、そこに愛があるうがなかるうが、形骸的な夫婦であってもよい。その場合でも男女関係はついて回るが、そのような夫婦の契りのことは、ゆく子には俗世の末節のことであった。

「やりたければやりなさい、いつでも私の女はお貸しします。」

いつぞや恋人の岩田に宣言した、ゆく子の純潔意識にかかわるセリフだった。

岩田は考え深い人である。瞬時にゆく子の心底を見透かした。だからこそゆく子の娼婦まがいの責めに岩田の男は、意図的な反応を返してはくれたが、射精陶醉はしなかったのだ。

「岩田は、分かってくれている。私の純潔は、岩田が受け止めてくれた。」
 今、ゆく子が見据える先は、広大な大地に立つ自分であった。

三つの鐘

ゆく子とベトナム帰りのハットの婚儀は、和式で青山会館で挙行された。

ホステス仲間とハットのベトナム仲間、ゆく子の親兄弟による披露宴であった。

岩田も参加するとは言っていたが、数日前、仕事を理由にドタキャンしてきた。

「なにか含むところがあるのかしら。また、吹っ切れない。」

ゆく子は、考え深い岩田が、いまだその心境で迷っていると判断した。そして自分の純潔はそのま
 ま岩田に託しておくことにした。

いずれ会える機会もある。ゆく子はアパートを引き払った。

それまで自分の生活を陰ながら支援してくれた、まだ見ぬ実父に感謝の手紙を書いた。

後に、実父はゆく子が海外へ去った7年の後、ひっそり亡くなったということであった。

実父も戦争の犠牲だったのだろう。当時の乳飲み子だったゆく子の泣き声の思い出だけを形見に抱
 いて逝った実父であった。

パースの空港は、ベトナム敗戦とはいえ、ベトナム帰りの元兵士を関係者は、熱狂的に歓迎した。ゆく子は、ハット牧場の経営者妻で新婚生活を始めた。毎朝、牧場には三つの鐘が響いた。

生誕、婚姻、逝去の人生の節目も、この三つのベルで折られるのである。それはこの家の祖先からの伝統であった。

23歳のゆく子の出発は輝かしく、自分でも夢のような気分であった。

パースでのゆく子の3年が経過したころ、ゆく子は娘を一人抱えていた。その後もう一人が生まれ、5年後には2人の娘の母だった。

茫茫とした大陸の大地は繊細な自然はなく、雨風の規模も雄大であった。気温は日本の九州程度で温暖だった。

ゆく子とハットの夫婦仲は良かったが、時を経るにつれて徐々に出自差が目立つことになる。日本人にとっての外国人は、感情優位型が多い。ゆく子は、あまり感情の起伏はなく淡々とした女性である。その点では純和風であった。

この差は、夫を誤解させるものにもなり、その感情の接点がずれ始めていった。ゆく子は夫との感情の機微を調整しようと努力はしたものの効果は薄かった。この外国人のハットが心を屈折させ始めると、ゆく子には対応の方途がなかった。

ハットは酒におぼれた。ベトナムで人殺しに明け暮れたハットには、慰めがほしかった。ハットの

胸にはあのときこのときと、戦闘の心の傷あとが時々開くのである。

もともとゆく子は、「外国人の妻」という「紙」が欲しかったのであり、それは婚姻ビザによる永住許可のためであった。

以前はハットもやさしいメディア役で無風だったが、荒れ始めた。ゆく子には心の中までハットに提供し、捧げる予定はなかったのである。妻として、この身は好きなようにお貸しします。現に二人も娘を身をきって提供したではないか。

しかしハットは、妻に心のすべてを差し出せとの強要だった。

思いがけずも日本の岩田から電話があった。

「しばらくだね。日本へ帰る予定は？」

岩田は懐かしそうだった。目の前にいれば抱擁も辞さなかつたであろう。

ここでは日本語は、誰も理解できない秘密語である。ゆく子は久しぶりに遠慮なく思う存分岩田と話ができた。

「そうだ、私は奴隷ではない。いくらでもよるべはある。」

夫は近頃、牧場の向こうの女と懇意になつていようである。同じ人種だから気心を通じるのも早い。

ゆく子は二人の子を抱いていた。この子たちは私が産んだ子に間違いないけれど、夫にハラを貸し

ただだけだ。子はかわいいけれど夫や子の奴隷にはならない。

離婚には三つの鐘は鳴らない。

砂漠の向こうに夕日が沈んでいく、雄大ながら殺風景な大陸の景色は、人間の手の届かない深遠な自然が人々をあざ笑っているかのようだった。

ゆく子は、パースを去った。ゆく子には子にも夫にも未練はなかった。

シドニー

シドニーは南半球最大の都市で、特に金融業が発達した国際都市である。18世紀後半に最初の入植者がやってきた。港湾や交通が整備されて以後オーストラリアの中心となった。

日本人としては、恥ずかしい話もある。日本軍が特殊潜航艇でシドニー湾の船舶を攻撃した、歴史にのこる「シドニー港攻撃」である。

これらの戦跡はしっかりシドニーの博物館に残され今でも日本は断罪されている。

ゆく子にとって、なぜシドニーかといえば、夫ハットの妹がこの町にいたからである。ホームステイをしていたころ、よく二人で買い物に出かけたものである。そこでは下着を探したが小さいゆく子にフィットするモノはなかったのだった。

シドニーはこの国最大の中心都市で、450万人以上の人口を抱えている。ビジネスの町で日本人

も多い。

オーストラリアへ渡つてすでに6年、この国の会話に不自由はなく何でもできそうな気がした。夫の妹アナの主人が、日本人を紹介してくれた。おなじ会社の現地駐在員の奥さんだった。

「アナちゃんから聞きました。シドニーのことは任せて。」

彼女は、まずは居所からといって、手ごろなアパートを紹介した。海の見えるいいところだった。

6年ぶりに孤りになった気分は複雑だった。一度帰国して仕切り直しをしようかとも思ったゆく子だったが、アパートも借りてしまったので、資金のこともあり日本の妹のアケミを観光旅行で呼ぶことにした。

母もゆく子の現在を心配していた。母は、

「アケミに当面のお金と、下着を持たせるから」

と、おかしなとり合わせを電話で伝えてきた。

ゆく子は、この町に邦人が多いのに驚いた。日本人相手の何か商売をやるかという獮とした思ひも浮かんだ。

そういえば、岩田が就職して数年後のこと、ゆく子は、岩田に共同で居酒屋でもやらないかと持ちかけたことがあった。

岩田は商売の向きではなく、まったく乗らなかつたのであった。あのときその方向に二人が進んでいたら、成功したか失敗したかは分からないが、現在のような外国暮らしはなかつただろう。あるいは

は岩田と所帯をもつていたかもしれない。もつとも資金もないときだから居酒屋ではなく、屋台がいいとこだったかもしれない。

ゆく子はとり留めなく思った。

ハーバーにクルーズ船が入港してきた。白い波を蹴立っているのが印象的だった。

妹アケミは、それから1週間あとに入国した。

「どうしたの。みんな心配してるよ。」

空港のカウンター越しにアケミが呼びかけた。

「私は大丈夫よ。みんな元気。」

姉妹のあらたまつたようにみえるあいさつは、それだけだった。あとはすぐに昔に戻つた姉妹であつた。

ゆく子はシドニーで暮らすうちに、海外の邦人の仲間意識とふるさと志向を強く感じた。パースで結婚していたころは、周囲に邦人もいないしそのような場もなく、農場生活はそれでも家族だけのブロックだったので、そのような志向は思いも浮かばなかつたものである。

ビジネスの都会のシドニーには、日本人クラブもあつた。そして、そこで在留邦人のオアシスになるような料亭の創業を思い描いたゆく子だった。

妹のアケミは、2週間の滞在を終えて帰国した。久しぶりの身内の訪れは、夫と子との離縁と、心の落ち込みで愁傷のゆく子を癒してくれた。

滞在中、パスを離れたいきさつや、心情をメンメンと訴えたから、それらの状況はアケミによって日本の家族へこと細かに伝えられるだろう。

アケミが帰ると、ゆく子は料亭の開設準備を開始した。

日本でも同じだが、料亭の創設には、資金、場所、スタッフ、仕入れ、が必要である。海外の場合には、邦人スタッフの在留資格も問われる。

基本は、労働ビザなしの就労はできない。また、その組織の営業規模で労働ビザ発給件数が制限され、外国企業等の組織活動に按配を加えているのである。

それは個人企業も同様で、就労ビザの手配は雇い主の責任と負担に課せられるのである。

料亭ともなれば、板前の確保と食材の仕入れが欠かせない。まずは、板前だが、腕の良い板前がそういるわけではないし、海外では絶望的に獲得が困難である。

ゆく子の料亭開設は、板前の招聘のことがネックとなった。

しかし、日本人クラブの伝で、廃業して帰国する和風レストランのコックが職を探していた。わたしに船である。

一応スタッフはそろい、この板前の主導で仕入れのルートも確保できた。

しかし、くせツ気のある板前は、高額の給与に加え仕事上の条件を羅列した。

「おかみさん、メニューと料理は私がやりますが、食材の仕入れは自分でやってください。それから、皿への盛り付けやビールや酒の出し入れと在庫管理、テーブルやテーブル上への配膳と下げ、洗

い方、客の注文、ごみの処理、清掃、は、別のスタッフにやらせてください。」
ゆく子は、このベテランのコックの言われるとおり、助手とボーイ数名を臨時雇いして開店に備えた。

大型冷蔵庫、冷凍庫、製氷機、什器類、店の電飾や看板、厨房用品等の初期投資は膨大なものだった。前のレストランの残っている設備は、できるものは転用して極力出費を抑えたのである。そして開店までこぎつけた。

日本人クラブのおしらせにも開店広告が掲載されたので、邦人客はひっきりなしに来た。

食材の仕入れのため、ゆく子は早朝河岸へタクシーで往復した。

ゆく子がかつてこのような現業の経験がなかった。いつも用意され提供されたものを食べ、着、住むことで済んできた人生だったのだ。

宵からは、玄関の敷石に盛塩を置き、和服で客を迎え、ボーイを監視し、注文に注目し、お銚子の加減をみる女将の仕事があった。

レジの仕事も込み合うときは手を出した。

邦人客には、板前がつくる おつくり より、さんまの塩焼き や 焼き鳥のほうが人気があったし、肉うどん、や そば は、邦人の郷愁をさそうらしく好評だった。

ゆく子の 料亭 は3年続いたが、最大の問題は 板前 だった。

足元をみるこの尊大な板前は、半年もたなかった。ここでも日本人クラブの情報は役にたち、ゆく

子の懇願に、次の板前を紹介してくれた。

彼は、無口だったが主人に忠実だった。

「女将さんも、すこし料理をやってみたら。」

と、言われたが料理に不得手なゆく子は遠慮した。

「小さい居酒屋は、板前なんかいませんよ。みんな自前です。」

新しい板さんは、暗に女将も手を汚すことを勧めた。料理の味もみられない女将では心細いこの老婆心であろうし、店の規模が大きいと負担も大きいから、素人の女将には、店もそれなりの適正規模にして、身の丈の経営が必要、たと言いたいようだった。

板前の世界は、徒弟制度で培われた江戸の昔からの世界である。その技術は繊細な懐石料理からカツ井にいたるまでプロの世界である。

プライドある気位が高い尊大な板前は、食材の吟味も厳しく、はしりの材を使いたがったり、気に入らない食材には手も触れないなど、「現代の名工」気取りが多い。皿への盛りつけも助手にやらせるのである。

営業時には、厨房内は板さんに任せるが、店内では疲れてすぐ椅子にかけたがる従業員に、

「水商売と看護婦は立ちっぱなしだよ。」

と、ハツパをかけ、洗い方には、器を丁寧に扱うように、注文には英語もあるからアルバイトが間違えないよう耳をそばだてた。

板前職人を、ゆく子が使いこなすのは至難のことであった。板前は、プライドもあって食材へのこだわりも強いが、しかし、現実には粹客がいるわけでもなし、酒でオダをあげる日本の駐在員には、普通の料理と酒があれば十分なのである。ハシリの食材とか旬の高級食材など不必要である。酔客には、「あんたたち、シドニーへワンウェイチケット（片道きつぷ）で送られて来てるんじゃないでしょうね。」

日本商社の社員が、シドニーへ左遷され、帰りのチケットは保証されていない。というオチこぼれ社員を揶揄した、ゆく子の冗談めいたからかいであるが、もともと無口なゆく子もここでは冗舌であった。

「おかみさん勘弁してよ。」
などと如才ないタイプはかわいしいし立派である。不器用で口下手なゆく子も、この世界に慣れれば冗談もいえるようになっていった。

経営上の問題で、ゆく子はいつもとまどっていた。アドバイザーがいなかったのである。ゆく子の過去は、高校をでてから親や、身内の庇護のもとに身を立ててきた歴史である。本格的に押し出したのはこのシドニーの料亭が最初であった。これも親の援助で展開した作戦だが、くたびれ儲けの感があった。

さいわい倒産するほどの赤字は出ていないが、日本人だけを対象の料亭だから、対象客のキャパシティ、つまり客のひろがりには限定的である。

ゆく子は、料亭の仕事に大きな傷が出ないうちに、次の仕事の方向を考えていた。その折、母が渡航してきた。母とは、唯一、ゆく子があまえられる存在である。

「しばらくいるよ。」

母は、相変わらずであった。

再びの転機

「お母さんのいる間に、パースの娘のところへ行って来たいの。誕生日に来てくれて言ってきたいるので。」

「日帰りにしなさいね。」

「うまく飛行機があればいいけど。」

パースは、国内線だが三千キロもあるし、空港からも1時間みなければならぬ。料亭の定休日の日曜日の往復日帰りであった。

もう6歳になる娘から、「お母さん、私の誕生日に来てくれないの。」と電話があつたのである。

元夫は、いまのところ再婚の兆しはないようであり、別離の交渉も中途だが復縁を望む様子もない。

その日、ゆく子は母を残していそいそとパースへ出発した。母は、滞っているゆく子の洗濯物などをし、持参した日用品を収納する作業に追われた。

ゆく子が帰宅したのは、やはり翌日だった。

「娘二人に、毎年来てくれるように頼まれたわ。」

ゆく子は、まんざらでもない感想を述べた。

翌日、日本の岩田が、日本画のかけ軸を送ってくれた。水墨画には文人画家が好む四つの題材があり、これを四君子（しくんし）といっている。

竹、梅、松、蘭である。岩田のくれた水墨画はゆく子の好きな蘭であった。そう簡単に手に入らない逸品である。

コメントでは、以前にもらったワラビーの毛皮のお礼だという。自宅の壁にでもと書いてあった。母も岩田を覚えていた。

「岩田さんは妻帯したのかえ。」

岩田は、ゆく子が海外へ移住した後、結婚したと告げてきていた。

母の帰国予定の前日、母がひっそり言った。ゆく子の実父が、先月亡くなったという話だった。

戦後、母と同棲して子を成したその子がゆく子だった。しかしすぐ終戦になり、自棄の時代が終わって秩序が回復したため、二人に愛は続かなかった。

父には故郷で待つ妻子が別にいたのである。

母は、ゆく子を抱え信州へかえり、ゆく子連れで再婚したのであった。

ゆく子が大学受験の浪人をしていたころ、母が心窮して探し出した父は、長じたゆく子が大学へ進学するならと援助も考え、挫折のゆく子に、麻布の高級アパートを提供してくれたのであった。

その援助によってゆく子は、海外へホームステイもできたし海外旅行もできた。

しかしゆく子は、それぞれの生活を阻害する火種とならぬよう、父には会わなかったのである。父は、ゆく子の幼児の泣き声の思い出だけを形見に抱いて黄泉へ旅だった。その運命は誰が差配して仕組んだものだろうか。母は、運命の人であった。

帰国際、母は、

「世の中、何が突然起こるかわからないよ。十分注意してね。」
と、脅迫めいたこわい声でいった。

「ここは、地球の果てだよ。むかし映画で、あつたでしょう。渚にて。世界中が核戦争で消滅したとき、オーストラリアだけしばらくは生き残れた。地球に最後に生き残るのはゆく子です。」

母が告げたもう一つの身の上ばなしは、諏訪を離れたことであつた。

母は、義父と結婚した昭和20年代から、諏訪の地で義父の長男と同居してきた。

数年前に義父が没した後も、長男夫妻と同居してきたのであるが、血縁の次男夫妻が警察寮から自宅を調達した機会に、諏訪を離れる決心をしたとのことであつた。

「あなたが次に帰国するときの行く先はもう諏訪ではありません。小岩の弟宅へ寄留することになるからね。」

と、言つて母は、渚にてのテーマのヨースングマチルダを歌い、笑つて帰国していった。

母が帰国して1ヶ月、相変わらずゆく子は日々河岸で仕入れをし、夕刻から女将として店にたつ現業の毎日だった。

その日、日本人客数人を引き連れた不動産屋の社長が来店した。

シドニーも不動産ブームで、海外資産を物色する日本人が多かったのである。乱開発が続ぎ、かつてのハワイ島がそうであったように、欲ボケの成金により土地が蚕食されていた。

この社長は、シドニーに根ついていて昔からの不動産屋で吉田と言った。賃貸も扱っていて、ゆく子が3年前この店を始めるとき、前テナントから権利譲渡を受けるその手続にかかわった斡旋人だった。

客を送り出した不動産屋の吉田は、ヤレヤレとカウンターへ着座し、ゆく子に話しかけた。

「おかみさん。どうだね。景気は。」

吉田は、取引がうまくいったよう上で上機嫌だった。吉田は、見たところゆく子より3〜4歳年かさだった。

「このしぐとは、うまみが薄いよ。」

ゆく子は本音を告げた。

「おれと組んで、不動産をやらないか。」

吉田は、比較的真面目な顔でそういった。

「考えてみるよ。ま、いっぱい飲みましよう。」

ゆく子は、客席に目をくばりながら、吉田に注いだ。吉田が、ゆく子をターゲットにしたのは、海外で仕事を展開するゆく子の度胸をかったからであった。

後に、吉田は、しつかりしたパートナーがほしかったのだ。と言うのだった。

「考えてみる。」

と、ゆく子は言ったが、それは料亭の継続が困難だといっているのとおなじことを言ったのであった。

「解散のつもりがあるなら手伝うよ。」

吉田は、ゆく子の心の動きを見ているようだった。

数ヶ月の後、ゆく子の料亭は閉じられた。店の権利や、設備、備品は、吉田の手によりさばかれ、その分だけが手元に残った。

「不動産のいいところは、店も、設備もいらないうところにあるのだよ。物件だけ持っていれば商売になる。」

吉田は合理的な商売をやっているようだった。店構えは、日本なら法令で必須の要件である。また宅地建物取引主任の資格とか、面倒な資格を掲げなければならない。

ここでは、おなじ日本人を相手にしても日本の法令は適用されない。

「冬でも暖かい、シドニーの別荘は至福の世界」

などのキャッチフレーズで、金に余裕を持つ日本人に不動産を提供するのである。それはかつてハワイで行なわれ、中東のドバイで行なわれた。

日本のバブル期も同様であった。しかし過剰マネーの揺れ動きだから、一旦方向が変わると高額で購入した土地が二束三文になるのも普通である。

ある意味では、あぶない仕事である。斡旋、仲介に徹することだ。自分で所有してはならない。それが吉田のやり方だった。

ゆく子は、料亭の解散が一段落した折、帰国を考えた。

「吉田さん。ありがとう。一時帰国して仕切りなおすわ。」

「いつ戻る。？」

「そうね。アパートも借りっぱなしだし、留守を見てくれるならゆっくりだけど。」

「わかりました。アパートはご心配なく。管理しておくよ。」

ゆく子はいがたい話しだと思った。ゆく子の立場は落城である。このアパートと保有する家具料など、最後の砦を手放して帰国してもやむなしと覚悟を決めていたゆく子だったのだ。

しかし7年もオーストラリアで、私は何をしてきたのだろうか。パースのハットフィールド牧場の3年の生活、そしてシドニーの4年、この間、残したものはひとつもない。

ただ残したといえるのは、二人の娘だが、娘は元夫の親権、監護下にあり、私の出る幕は閉ざされているのである。

このアパートがゆく子のものである事実は、ゆく子がシドニーへ戻る最後のよりどころであろう。

幸い借金は無いが、金もない。ゆく子は、日本で仕切り直しをしようと思った。

仕切りなおし

江戸川を渡った先の小岩に、弟の新居はあった。もすこし千葉方向へ進めば、農村風景も見られるが、ここは大川の土手と総武線の高架が目立つ家ばかりの町だった。

それでも小岩公園の菖蒲園は心休まるオアシスであった。

弟が、早速くぎを刺した。

「おれは、警視庁の捜査課にいる人間だから、お前たち、オレが困ることをするなよ。」

それは、ゆく子が妹アケミの健康保険証を使って、病院で治療を受けようとヒソヒソ話をしていたときだった。

ゆく子は弟がむかし岡谷の工業高校で、禁制のタバコをすっていたガキであったことに触れたが、弟は、いやな顔をするのだった。

すでに岩田と過ごした昔の諏訪はなかった。育ててくれた義父には死に目にも会えなかったし、実父もいつぞや没したと承知していたが、いずれの墓参もするすがなかった。

「私は、いずれのお父さんにも、よい娘ではなかった。お二人とも私にはとてもよいお父さんだったことを忘れません。」

ゆく子は二人の父に詫びるのだった。

翌日、ゆく子は岩田宅に電話した。岩田の奥さんらしい女が出て、本人に伝えますといって切った。自分の名を伝えたが反応がなかったところを見ると、岩田は妻には何も聞かせてないようだった。

岩田は、私が預けた「純潔」をいまだ保存してくれているだろうか。

ゆく子は、岩田に会える日を待った。

その日の新宿西口は混雑していた。ポリスボックスの陰で岩田は待っていた。岩田はうれしそうに手を伸ばした。

「いつ日本へ帰ったの。近況は？」

岩田は、身の上はなしを聞きたがった。

「いいことだけ、聞かせてくれ。」

ゆく子は、帰国後1週間のことだけ話し、料亭のことは触れなかった。

「たいへんだねえ。」

岩田は、ゆく子の話の組み立てから、シドニーでの不調を察知したようだった。

「また、シドニーへいくのかい。」

「すこし休養したら行くわ。」

それは、ゆく子にも予想外に飛び出した自身の言葉だった。自分でも半分はあきらめていたシド
二一行きだったからである。

「日本にも生活の道はあるよ。」

とまどったように岩田が言った。

「(でも、もうあなたは私に寄り添う立場ではない。)」

それは、何年かぶりに会って分かった、今日の岩田への無言の別れだった。

「(あなたに預けた純潔を返してちょうだい)。」

「おしあわせに。」

ゆく子は、別れ際に声に出して言った。

「君も、ずいぶん気をつけて。無理はだめだよ。」

それは岩田の本音のようだった。

あの信州の真夏の夜の太田川で、岩田のからだの下にあお向けにされ、女にされたゆく子のちょうど
上を飛び交った蛍火と、飛んだひそかな流れ星は、ゆく子の上にかぶさって下向きだった岩田は見
ていなかった。

もし、岩田と結ばれるチャンスがあつたとすれば、あのときが唯一の機会だったかもしれない。し
かしふたりともうっかり見すごしてしまったのである。

翌月、ゆく子は再びシドニーにいた。

「ゆく子さん、日本で充電してきたか。」

パートナーの吉田が言った。

「心だけね、お金は調達できなかった」

「お金は要らない。君の度胸だけ貸してくれ。」

「来週、キャンペーンで誘った客が日本から2、3人来るよ。海岸のマンションを売る。コミッションは10%で300〜500万円入る。折半しよう。」

吉田は、こともなげに言った。物件は3千万円の4LDK、プール付で管理費が月2万円、管理費は1年前払いでいただき、持ち主は随時、日本からレジャーで来る。この滞在中のお世話も引き受けるのである。

1週間後、それはその通りになった。しかも2戸売れたので600万円のコミッションであった。労せず入ってきた折半の300万円を前に、ゆく子はため息をついた。料亭をやっていたときは、一日中間断なく働いても採算がとれなかった。しかし、これはなんだ。ゆく子は、世の業種格差に驚いた。しかしこれも浮き沈みがあるのだろう。

「あしたから、押さえている物件を紹介するよ。」

しかし、ゆく子には、この不動産業という分野はなじみにくい印象を持った。自分が住むのでもない住宅を、住んだ気持ちになって評価し客に紹介するなど、仕事とはいえ面白くもなんともない。

「私に向いた仕事ではない。」

と、思ったが、かといって何をするという思いつきもないのである。30歳も半ばになると、熱き思いは、順次冷えていくのだろうか。

「私は、ただの浮雲だ。」

と思うゆく子だった。

目前の危機

販売の委託を受けた3戸のマンションは海に近かった。リゾートのロケーションは、海か山の高原に決まっている。

ここはヨットハーバーと海辺から至近の位置にある最適のマンションであった。すでにいくつかの部屋は売却され、国内国外を問わずオーナーによる活用が始まっていた。

吉田が委託された販売戸数は全戸数20のうち半数の10戸である。吉田は、海側から該当する部屋を見たほうがゆく子にも分かりやすいと思い浜辺へ迂回した。

海水浴客はいなかったが、かがやく太陽の下に微風が吹き、海に入りたい雰囲気だった。そのとき吉田が不思議そうな顔で、3階をみあげた。

「あれ、へんだなあ、だれか部屋へ入っているのかな。」

売主は別にいるのだが、販売委託した後に勝手に入ることは普通はない。その窓辺には、ないはずのカーテンがゆれていたのである。4LDKだから、南側には掃きだしを含めて3つのガラス部分がある。シドニーは常時太陽は北からさすので、北側の窓には黒の簡易ビニールカバーをつるしてあるが、南側にはいずれの部屋も遮光はしていないのであった。

二人は、問題の3階の部屋へ急いだ。3階部分はほとんど空室である。

中央のエレベーターであがってみると、南側には輝く海原の向こうのシドニー港にいくつかの船舶の錨泊がみえ、近くのリーフにはリーフに添って波が砕け、砕けた白波が蛇のようにうねって右方向へ連続して移動する風景だった。

その部屋の前で鍵を差込みドアを開けたとき、二人が見たのは信じられない光景だった。

二つの黒い銃と、二つの銃口が至近に並んでこちらへむけられていた。

二人の男が、拳銃をこちらに向け、空いた手で中に入るよう招いていたのである。

二人の男は無言のまま表情もなく凍りついたように動かなかった。

吉田とゆく子はホールドアップの姿勢で、指示を受けた位置まで進んだ。その後ろから、三人目がゆく子の後ろへ回って、開いているドアを閉じ施錠した。

しばらく沈黙の見合いが続いてから、中央の男が拳銃を構えたま奥の部屋へ移動するよう手で合図した。

その顔は、アメリカインディアンの酋長のようで、色は黒褐色で鼻は高かった。

吉田とゆく子は、4寝室の一番奥の部屋へ閉じ込められた。

そのまま何時間も放置されたが、この部屋は腰高の位置上に窓があるだけでベランダもない。遮光用の黒いビニールがつるしてあり、そのままでは外は見えない。

そつと窓を開けてみたが、手がかりもなく降りるのは無理のようだった。ザイルでもあれば夜陰にまぎれて下降できるかもしれない。

やがて町の見える側の山に夕日がおちた。山端の夕焼け空が宵に溶け込んでいったらしく、黒の遮光ビニールの隙間には徐々に町の明かりが見えはじめた。

「大変なことになったねえ。」

「こんなことになるとは。」

二人は絶句した。

「こうなったら、一蓮托生だわ。」

ゆく子は、母親の顔を思い浮かべた。あの日、母は帰国際に言ったのだった。

「世の中、何が突然起こるかわからないよ。十分注意してね。」

「ここは、地球の果てだよ。むかし映画で、あつたでしょう。渚にて。世界中が核戦争で消滅したとき、オーストラリアだけしばらくは、生き残れた。地球に最後に生き残るのは私です。」

相手は3人。拳銃も持っている。とても抵抗はできないだろう。

部屋の向かいにトイレ兼用のバスルームがある。ドアを開けると、気がついた男が見える位置で拳銃をちらつかせたが、トイレの使用は制限しなかった。

イスラム過激派などは顔を覆っているが、彼らは素顔だったし、リゾート向きの衣服をまとっていたが目立たないような配慮をしているようだった。

宵の7時ごろ、一人がパンと牛乳を持ってきた。それは黒目がちの女だった。驚いたことに三人目は女だったのである。まったく無言で後ずさりして戻っていくのだった。

夜の9時ごろ、中央にいたインデアン男がドアを開け、廊下から初めて言葉を発した。

これが、リーダーらしかった。

「二ーハオ」

男は、二人を中国人と思っているらしかった。欧米人には区別がつきにくい顔である。「犬の肉を食べるか。」

と聞かれることもある。吉田は、

「われわれはこのマンシヨンの管理者であり、今日は空き室の点検に来た。ここに留め置かれては仕事に差し支えるので、すぐに出してもらいたい。あなたがたも、不法に占拠せず退出されたい。」

吉田の流暢な英語に男は驚いたようだった。

「故あってわれわれの素性は明かせない。ここをもう1日、明日の夜半まで貸してもらおう。その後、安全を確認してあなたがたはお帰りいただく。あなた方に危害を加えるつもりはない。」

「それならば、私たちも外部であなた方のことは言わない。女性もいるから、私だけ拘束して、この女性は解放してもらいたい。病弱である。」

「取引は禁止されている。」

と、相手は二歩もなく却下した。

「あいつらは何をもくろんでいるのだろうか。」

吉田は、聞き耳をたてた。彼らは、トランシーバーか携帯で外と連絡を取っている様子だった。

「船のことを話しているようだ。見えるとか見えないとか言っている。」

多分、見通しのよいここから、いずれかと連絡を取りながら船舶を探しているのだろうか。3時間後、吉田は、ゆく子の解放をもう一度交渉した。ゆく子をベッドに伏して、

「心臓の発作が起こりそうだ。起こる前に解放しないと死ぬかもしれない。」

リーダーは、

「ジャストモメント。」

と、下がった。三人は協議したようだった。

「協議した。取引は禁止されている。ただし、考慮の余地はある。女性は今から解放しよう。ただし明日の7時、12時、17時の3回、必ず本人がここへ来ること。代理は認めない。4人分の食料と水を持参せよ。5分でも遅れたらこの男を処刑する。また、警察などの治安機関へ通告すれば即時処刑する。」

ゆく子の解放が決まったが、限定的なものだった。

「私も残るよ。」

ゆく子は、このまま吉田を残してはいかれないと思った。

「せっかく交渉が成立したんだから外へ出てくれ。そして言われたとおりにしてくれ。」

吉田が、必死の面持ちで言った。日本語の分からない相手方は、

「スピーク イングリッシュ。」

と制した。吉田は、

「わかった。時間通り食料を運ばせる。そして、司直への通告は絶対しない。」

と、言い直したのである。

犯人側の女が、吉田の車を運転し、ゆく子を助手席に乗せた。拳銃はいつでも使える位置にあつた。

「サンキュウ。」

マンション前で降ろされたが、相手は無言のままだった。

ゆく子は明朝7時に食料を持参しなければならぬ。なにか策はないかと思つたが、吉田を人質にとられ、処刑、処刑と、日本では聞いたこともない異質な単語が飛び交う状況では、どうにもできないのであつた。

誰かに相談できたら。とフト思ったのが、日本の警視庁の刑事の弟だった。しかし危険な賭けではある。弟に変な動きをされると、吉田は即時処刑されてしまうかもしれない。

時差のない日本も夜12時だった。

「テロリスト。？」

弟は、突拍子もない声を返した。

「それで、吉田さんが、人質に。処刑。」

弟のテンションが徐々に上がっていった。

「分かった。姉さんは、いま、一時的に解放されているのだね。この国際電話は盗聴されている恐れがある。これ以上言うな。こちらからつなぐ。」

弟は電話を切った。日本の警視庁から、シドニーの治安当局へつなぎがあるのだろうか。

騒ぐ心とは裏腹にシドニーの夜は不気味な静寂を保っていた。ゆく子はベッドに腰掛けたが、眠る状況でもなかった。

掃討作戦

3S（スリーエス）と言うのは、世界の安全三都市を言う。シドニー、サンフランシスコ、シンガポールという説もあれば、シャンハイだという説もある。

ただ、シドニーが安全都市と評されているのは間違いない。

その安全で定評あるシドニーで事件が発生した。それはゆく子とパートナーの吉田にかかわる人質拘禁から始まっていた。

ここは外国である。隣人は敵ではないが心を許してはならない。日本とは宗教道徳に違いがあり、社会の倫理感が異なる実態を理解しなければならぬ。諸外国では、自らの生命維持のためには、他人を犠牲にすることも善とされる場合もあるのである。

国境がない日本人は、歴史的に外敵に対するセキュリティが欠如し、人心もおおらかである。一言で言えば、おひとよし の倫理である。

日本国内ではそれでいいかもしれないが、海外へ出たら意識を変えねばならない。

翌早朝、ゆく子は近所のスーパーで4人分の食料を調達した。6時半にクラクションとともにテロリストの女が来た。

7時には現場に到着し、食料をマンション占領者のリーダーに渡すことができた。吉田は憔悴した様子だった。ゆく子が、

「大丈夫。？」

と、声をかけると、手をふって、

「大丈夫。大丈夫。」

と、返した。

「なにか昨夜、通信があわただしかった。なにかあったのかな。」

そこへ占領者のリーダーが来た。

「われわれは、今から引き揚げる。あなた方は自由だ。」

そういつて、電子機器を担いで逃げるように去っていった。三人いずれの顔も、無表情で能面のようであった。

後には、食料の残滓が床を汚していた。

そのときヘリが海上から接近し、マンシオンへ機首をむけたままホバリングし50mほどまで来ると、拡声器で叫んでいる声が聞こえた。警備当局のヘリらしかった。

潮騒と風とヘリの爆音の隙間から辛うじて聞こえたのは、

「回避しろ。このマンシオンは海上から攻撃される恐れがある。」

と、いうものだった。

ゆく子と吉田は手を握り合って転がるように階段をおり、海と反対側に回って身を伏せた。何人かの入居者も同様にころがり落ちてきた。

「なにが起こったのだろう。」

二人は、顔を見合わせ、他の居住者は避難訓練かと言いつついた。そのうちに海のほうから、パチパチと火花のようなはじける音が聞こえてきた。ときどきドンドンという太鼓の音も聞こえた。

た。

この事態は、一般には貨物船の衝突事故と思われたが、問題は深刻だった。

南極海への出航準備の船舶に砲弾が撃ち込まれ、一隻の船舶が破壊され炎上したのである。

そこにいたのはすべて調査捕鯨の船舶だった。環境保護を標榜する急進的な団体が、錨泊している調査捕鯨の準備中の船舶に仕掛けた攻撃であった。

あのマンシヨンをのつとつた三人の男女は、見通しのよいマンシヨンの3階から無線か携帯で、海上のいずれかへ目標を連絡していたのであろう。

国際捕鯨委員会は商業捕鯨を禁止しているが、一部で調査捕鯨を限定的に認めているのである。

過激な環境保護団体が、捕鯨船をおいかけたり、いやがらせをする事例が多い。今回の事件もその一環であった。

彼らの作戦では、その夜半に捕鯨船舶をすべて沈める作戦だった。しかしほぼ1日まえに計画が露見した。

彼らにはあわてて作戦を繰り上げて、数隻の捕鯨船の攻撃にかかったが、ときすでに遅く、わずかに一隻を攻撃しただけで、巡視艇に抑えられたのである。捕鯨船舶の被害は一隻にとどまった。

近年、環境保護団体の持つ船舶は、性能も抜群で、武器の装備も駆逐艦並みである。無防備の捕鯨船など、撃たれたらイチコロである。

今回の事件では、1日まえに謀議が露見した。それはゆく子が迷いながら連絡した日本の警視庁の

弟の才覚だった。

弟は、戦場は海上だと判断し、日本の海上保安庁へつないだのである。日本の海上保安庁はオーストラリアのコーストガードに緊急連絡し、テロの発生を予告した。

これをうけて、すぐにシドニーの海域のコーストガードの巡視艇が出動できたのであった。

陸上では、日本の警視庁からシドニーの治安当局にテロ情報がもたらされた。

当局は、人質の安全を第一に、一旦放されたゆく子の動きを中心に監視した。場合によっては、救出のためのレインジャー出動もスタンバイしながら、現場の監視を続けていたのである。

人質の吉田とゆく子は、当局の救出を待つことなく、自らの逃亡を優先した犯人によって解放された次第であった。

そうではあるが、テロリストの船の次の攻撃目標は、テロリストが逃亡したあとのこの海辺のマンションだった。

逃亡したあと、人質を解放したとの連絡を受けたテロリストの司令官は、改めて2人の人質の処刑を厳命するとともに、船からもマンションにいるであろうゆく子と吉田に向けて攻撃をもくろんだ。

この執拗な攻撃は、人質を解放してはならない規律に反したその失敗を戒め、現に起こった、ありの穴からもれて失敗したこの作戦を少しでも取り繕うとのこだわりであった。あまつさえ人質二人に顔知られてしまった以上、人質の処刑は必須であった。

しかしこの攻撃はテロ側が逆に追われるという形勢逆転により行なうことができなかった。ゆく子

と吉田はとりあえずは命をながらえたのである。

二人はシドニーの海上と陸上での大作戦のいきさつは、あとから日本総領事館の領事から聞かされたのであった。

事件の早期解決のきっかけは、ゆく子を途中で解放した犯人の判断のミスだった。

あのとときゆく子を解放もどきに放さなかったら、日本の警視庁の刑事であるゆく子の弟は、その事件を知る由もなかった。そして捕鯨船への攻撃は作戦どおりに進行し、多数の船舶が甚大な被害を受けたであろう。

環境保護団体というセミプロ組織のテロ行為だから、イスラム過激派と違った倫理が混在し、鉄の規律が守れなかったため、中途半端な人質の管理に流れてしまったのであろう。

相手がイスラム過激派だったら絶対に解放はなく、顔を見られたテロリストは仮に逃亡するにしても、逃げ際に吉田もゆく子は解放ではなく処刑されていたはずである。

そのテロリスト組織内の規律の混乱は、ゆく子と吉田にとってラッキーであった。

翌日、シドニーの治安当局による二人への事情聴取が、領事立会いのもとに行なわれたのであった。

疑惑

日本の商業捕鯨船もここに待機していたこともあり、日本のメディアもこのテロ事件を知るところとなった。

翌日の日本の全国ニュースでこのことが報道された。立役者だった警視庁の刑事の弟も取材のターゲットにされたと、弟は電話で報告してきたのだった。

シドニーの数社のメディアが取材に来た。警察からは犯人が未検挙だから顔写真を公表しないよう注意を受けていたし、カメラマンは来なかった。新聞、テレビは海上の惨状と、押収されたテロリストの高速船を写真つきで報道していた。

弟は、姉の無事を喜ぶとともに、自分が警視庁刑事として、初動捜査の判断が適切だったという自負をもてたのは、自らへの喜びであったようである。

二人はメディアによる、一時的なセレブな扱いに困惑した。

ゆく子は、ひとつ間違えば逆の結果で泣きをみたかもしれない、この自分の危うい判断に、背筋が寒くなる思いだった。しかもそのテロリストは壊滅したわけではない。むしろ二人の危険は拡散しているのではないか。

驚いた岩田からも国際電話があった。

「すごい冒険だったね。無事でよかった。」

その声は昔と変わらなかった。

この事件の後、ゆく子と吉田は結婚の約束に踏み切るようになった。

吉田はこの危機に際し、身を挺してゆく子の解放をテロリストと交渉した。それは、ゆく子にとって身に余るものだった。言葉やまやかしでない目の前のこの事実は否定できない愛としてゆく子の心に響いたのであった。

「おれたちは、試されたパートナーだ。」

吉田が、何気なく言った言葉は、最大の危機を乗り越え獲得した、二人の栄光の言葉に聞こえるゆく子だった。

ゆく子は、アパートを引き払い吉田の居所へ移動転居した。結婚という人生の方向が決まれば、不経済に別居している理由はなかった。それは高速道路のように直線で、あつという間の決断だった。

初夜の朝、めざめると吉田は、

「仕事を覚えてくれ、」

と、部屋へ入り、本棚に並んだ書類の説明をした。

「仕事を覚えるには、オレはいないものと思つて取り組まないとだめだ。いま6箇所のマンションに50戸の販売委託を受けている。この書類で分る。コミッションのパーセンテージは委託契約書にある。これだ。宣伝のメディア契約はこれ。時々日本の不動産ツワーの連絡もはいる。滞在するホテルを聞いて、空港への送迎もする。」

と、仕事の流れを説明し、最後に、

「君は、銀行の口座を持つているか。前の商売のでよい。」

と、聞いた。ゆく子がうなずくと、吉田は、机の下の箱を指し「おれは、現金主義だから、預金はしていない。ここにお金がある。ここに全財産があるのだよ。君に口座があるなら、今から入金にこう5千万円ほどある。今日から君が会計係だ。」

吉田は事業に積極的だった。この業に天職といえるほど執念を持っていた。客へのサービスも行き届き、贈答用の小物をいつも店に準備して、これはと見込んだ客に贈って心をつかむ商売上のノウハウも持ち合わせていた。

ゆく子が、岩田から以前にプレゼントされた四君子の水墨画の掛け軸を見ると、

「これは贈答品にいいな。」

と、言ったが、それだけはゆく子の許すところではなかった。

いまだゆく子の純潔は、岩田に預けてあったし、この四君子の絵はその象徴である。その純潔はいつゆく子のもとに帰ってくるのだろうか。

その日ゆく子は、己が心の浮雲のゆくえを遠くから眺めていた。

シドニーの捕鯨船舶への襲撃事件から数ヶ月後、地元や商業捕鯨の各国のマスコミをにぎわせた騒ぎもやや下火になっていったが、犯人のテロリストは逃亡したままだった。

それは当事者には不気味なことだった。

そんなある日ゆく子は、東京の警視庁にいる刑事の弟から電話を受けた。

「吉田さんとツーショットの正面を向いた写真を送ってくれ。」

というものだった。弟は、母が夫となる男を見たいといっているかと添えた。郵便で送る準備のさなか、ゆく子はわずかだが違和感を覚えた。

「なぜ、弟なのか。どうして妹のアケミではないのか。」

気になって、アケミに電話してみると、アケミは、

「そんな話はいま初めて聞いた。」

と、応えるのだった。しかし、些細なことだったし、それ以上のこともなかった。

その話を吉田も怪訝な面持ちで聞き、

「その写真はもう送ったの。」

「まだよ。ここにあるわよ。」

「あとからオレが郵便局で出しておいてやる。」

と、吉田はその封書をゆく子から受け取ると、自分の部屋へ引きこもり、1時間ほど何かしているようだったが、出てくると行き先も告げず外出して行った。

午後の太陽は北側から厳しかった。

シドニーの気温は、冬で18度から19度、夏は、26度から19度と過ごしやすい。

シドニー港のオペラハウスは世界的に有名な観光スポットである。貝の幾重にも重なるデザインが、夕暮れの海に色を添える景色である。

それはシドニーの象徴でもあり、ニューヨークの自由の女神に並ぶ美景である。

しかし吉田のアパートは、地味な裏町にあり、これらの景観は直接見るができない。

吉田は、元来暮らしも、その性格も地味で、日本人クラブの名刺交換会とか、忘年会に出席することとはなく、日本の提携不動産屋ともパソコン通信だけで情報を交換していた。

ハレがましいことは好まない性格のようであった。そして、日本にいる人々との個人的なつながりはみえなかった。

吉田は、夕刻になっても帰宅しなかった。すでの同居というか同棲して2週間になるが、自分のことは全く話題にしなかった。

結婚ばなしでも、親兄弟の認知など身内との関係についてもあいまいに終始した。

「君は、親族を呼んで披露宴をやりたいか。」

と、ゆく子に問うたが、それだけで話は途絶えた。ゆく子も、パースの子たちとか、日本の母をはじめとする身内など、改めていまさら呼ぶのもわずらわしかった。

「私は、所詮、浮雲だわ。」

と、ゆく子は自虐したのであった。

日がとつぶり暮れても、吉田は帰らなかつた。

ゆく子は、1階の車寄せに見慣れない車が止まったのを見た。やがて廊下を歩いてくる数人の靴音が響くと、ドアがノックされた。

「警察です。あけてください。」

吉田は、以前から誰が来ても身元を確認できるまでは、絶対開けてはいけないといっていた。いつものテロリストの復讐があるかもしれないのだ。

今、まさに、数人の足音とは、状況はピンチである。開けたとたんにあの拳銃で撃たれるかもしれない。

ゆく子は身を硬くした。

「警察です。このIDをご覧ください。」

のぞいてみると、目の前に写真つきの身分証明書が掲げられていた。

「ミスター吉田は。？」

「数時間前に外出しています。」

「どこへ。？」

「分かりません。」

「ミスター吉田の部屋を見たいが。」

「NO。だめです。本人がいない。何の用事ですか。」

「ちよつと聞きたいことがある。それでは、もう一度令状をもって伺います。」

警察は、3人だった。車の発車する音がした後も、一人がドア前にかんばっているようだった。

ゆく子は、その隙に吉田の部屋へ入ってみた。机の上に走り書きがあった。

「ゆえあつて帰れない。仕事を頼みます。マンリー商会からコミッションを君の口座へ振り込むよう手配した。」

吉田の走り書きには、そのような文字がならば、さらに漢数字がいくつか並んでいたが、意味は分らなかった。ゆく子は、振込金額を、委託契約書で確認した。

吉田は銀行口座ももたず、多額の現金を机下に置く神経の人である。いまだき現金だけのやり取りで商売をする神経にゆく子は違和感を持った。

ゆく子は、今日の昼からのハプニングを振り返った。

今日ゆく子は、日本の警視庁に勤める刑事である弟の電話を受けた。それは吉田とゆく子の顔写真を送ってほしいというものだった。しかも正面を向いたものという注文であった。弟が添えたその理由は、母が吉田の顔を見たいからというものだった。

一方、ゆく子が折り返し確認した先の妹のアケミは、そのような話題はない。と否認したのであった。

吉田は、ゆく子が写真を封入した郵便封を郵便局へ出すと行って持ち去ったが、そのまま今もって帰宅していない。

そしてシドニー警察の刑事が3人来た。彼らは吉田を探しており、あまつさえ吉田の部屋を見たいというのだった。

まもなく令状をもった刑事が再来して、家宅搜索するに違いない。今、ヤバイものが家にあつたと

しても、外には残った刑事ががんばっているのだから、持ち出すすべはなく、これから始まる家宅捜索を懸念しても、なにも隠しようもないのである。幸い多額の現金は、ゆく子名義の口座に入金してしまっていたのでここにはない。

何はともあれ、吉田の走り書きだけは隠さねばならない。

再来した刑事たちの捜索は、1時間ほどだったが、商売上の書類には全く手をつけず、いくつかの写真アルバムを押収していった。

令状には、住所氏名年齢職業のほか、理由欄には「捜索保護依頼」とあるだけだった。

ゆく子の荷も見られたが、移転してきたばかりで何も無い。

「奥さん、アルバム3冊を押収します。これにサインを。」

「何の容疑ですか。」

「日本のポリスからの保護依頼です。ミスター吉田から連絡があったら、シドニー警察のピーター警部に電話を。」

と、名刺をわたし、元の経路で階段を下りていった。多分、別の張り込み班がどこかでここを見張るのであろう。

ゆく子は、いまだ狐に包まれた思いだった。まさか先を誓った吉田が追われる身だったとは。

思えば商売用のマンシヨンの点検に来た二人が、環境保護団体のテロに巻き込まれたときから不穩

な場面が連続した。

あの事件で、ゆく子の平穏は脅かされ、表に出なくてもよい二人がメディアにクローズアップされた。それは一過性だが、テロという猟奇性から全世界に広まったニュースだった。

その結果、当事者の善悪すべてがさらけ出された。ゆく子には世に公表されて困ることはひとつもない。

しかし、そうでない人もいるだろう。日本では、妻殺しの三浦和義の事件もあった。「プライベートの尊重」の概念が発達していなかったマスコミによつて、三浦本人のプライベートが著しく侵害されただけでなく、マスコミによる住居不法侵入や私信の無断開封などの行為が公然と行われていた。この三浦は理由は不明だがロサンゼルス市警の留置施設で、首をつつて自殺したのである。

また、砒素をカレーに混入した林眞須美は後に死刑になるが、容疑の段階からマスコミの餌食にされ、プライベートをズタズタにされた。

まさかと思うが、状況からみて吉田はなにか秘密を抱えていたのでは。そして思わぬテロ事件の報道の余波で、秘め事が別の方向からあぶり出されてきた可能性は否定できない。ゆく子は、いても立ってもいられない気持ちだった。

隠された過去

吉田は、シドニーから車で30分の同市内の、マンリー地区で自分が販売委託を受けているマンシヨンの一室にいた。

昨日、ゆく子の弟からの「顔写真を送れ」との連絡を聞いて、すぐピンと来た。日本からの追跡者だ。

ゆく子の弟は、日本の警視庁の刑事だという。先（せん）だって環境保護団体のテロの被害を最小限で回避したのは、ゆく子自身も気がついていないが、その弟とゆく子との連携プレーの成果だった。

この事件は日本で報道されてしまった。テロの被害者として、自分とゆく子が載ったのであった。その余波が自分の過去のシミをあぶり出してしまうことになった。

ここはマンリービーチの近くで、奔放で、そして美しい。その美しさとはシドニーがその衣服を脱ぎ捨て、抑制から解放されている、そんな感じの場所である。と、紹介されている。

移動手段に鉄道や公共交通機関は使えない。多分鉄道駅には、ポリスの張り込みがあるはずで、日本人は目立つからすぐにパクられるだろう。吉田は、裏をかき域内の委託を受けているマンシヨンに一時潜むことにした。そして、ここで逮捕されてもやむなしと覚悟するのだった。

テロリストに拘束されたあたりからの自分の流れが狂った。しかしそういつまでも逃げおおせるものではない。いつか年貢を納めるときが来る。

吉田がシドニーで暮らすことになったきつかけは、言うもはばかるが犯罪であった。

8年前、吉田が25歳のことである。

吉田は、建築会社の現場で施工管理の仕事をやっていた。つまり現場監督である。

事件は路上で起こった、通行人同士のちよつとした行きがかり上のトラブルだったが、

双方の若さに歯止めがかからず、殴り合いの暴力事件に発展した。

吉田のほうが強かった。男は吉田のパンチで沈み、そのとき頭を打つたらしく起き上がってこなかったのである。相手は道端の茂みで倒れたままの状態であった。吉田は、ことの重大性を認識せずそのまま立ち去った。

翌日、吉田は工事現場へ出かけたが、ちよつと気になって昨夜の殴り合いの場所へ迂回してみても驚愕した。

そこには昨夜の男が草むらに倒れたままだった。彼はすでに息絶えていた。

殺人。という二字が脳裏をよぎった。死体は、いずれ発見されるだろう。

吉田は迷った。とても今日は現場で仕事をする精神状態にはならなかった。行ったり来たり思考をくりかえした。吉田は現場から逃走した。なにかも捨て、後も振りかえることなく海外に逃げた。

犯人が自分だと特定されることは、まずないだろうとも思ったが、それは分からない。いずれ警察の調べで事実は解明されると思わなければならない。

数週間後、警察の捜査は、この暴力殺人事件の重要容疑者に吉田を特定した。殺人現場の近辺を歩

く作業服の男が目撃されていたのに加え、現場近くの建築工事場の施工監理担当者の吉田が失踪していたことから容疑者として特定されたものである。

容疑者に特定された時点では、すでに吉田はインドネシア共和国のセレベス島に到達していた。ここままで日本の警察の捜査はゆき詰まった。インドネシアの治安当局の捜査が及ぶ範囲は全国津々浦々まで行き届いていない。

多数の離島や地方にはいまだゲリラ闘争や、バルチザン闘争が行なわれているところもあり、そこは国家の治安の能力を超えるエリアである。

吉田はマカツサルの港で荷役のバイトをしたが、南極海の調査捕鯨の船長を口説いてオーストラリアへ密入国したのであった。

それから8年、吉田は不動産ブームにのってうまく泳いできた。しかし今は吉田に微笑んだ幸福の女神にも見放されたのかもしれない。

あの環境保護団体テロリストに巻き込まれたのが不運だった。この上は、パートナーのゆく子に負担をかけないよう、逃走の晩節を汚してはならない。

砂上の楼閣

ゆく子は、吉田の連絡を待っていた。すでに2日たっていたが音沙汰なしであった。電話は盗聴さ

れているかもしれない。吉田はどこにいるのだろうか。

ゆく子は、海岸へ出てみた。白い雲が流れ、波はしずかに打ち寄せ、海風が吹く平凡な眺めだった。

ゆく子は、吉田の残した走り書きをみた。いつでも廃棄できるよう2日前からブラジャーの中で保管していたのである。隅になにか字があった。それが電話番号と分らなかったのは漢字だったからである。

公衆電話で押すと吉田が出た。

「あなた。なにがあつたの。」

「君の弟に聞けばいい。君の周りには尾行がついているはずだから。これ以上しゃべるな。電話をかけるのもだめだぞ。」

電話が切られてあたりを見回すと、たしかに遠くからこちらを見ている人影が動いていた。望遠鏡で私の口の動きをみているのかもしれない。

それにしてもなんということだろう。永遠のパートナーと思った吉田は身を隠し、仕事と資金を託して消えるとは。

ゆく子は、吉田にいわれたとおり、日本の警視庁の弟に電話をかけた。

「吉田が、警察に追われている。私も尾行されている。」

「シドニー警察に吉田の確保を依頼したが、まだ身柄を確保できていないらしいな。吉田は日本の

殺人犯だ。」

「どうすればいいの。」

「あまり動かないで、吉田の確保を待つんだ。盗聴にきをつける。電話を切るぞ。」

「わかったわ。」

殺人犯、という単語が空中を舞っていた。いずれにも結びつかないフワフワしたものだ。

幼いころ、ケセランパサランが飛び交う童話があった。それは女の子と生涯をともにし、幸せを運んでくる地上の浮遊物だった。いまは明日が見えないゆく子だった。

3日後、弟から電話があった。

「残念だ。吉田の遺体があがったそうだ。」

ゆく子は言葉を失った。あつという間にゆく子の眼前の世界が、ガラガラ崩れ始めていた。

「地震かしら。」

「姉さんしっかりしろ。地震が起こったか。」

国際電話の向こうで、弟が怒鳴った。

ゆく子は、無意識のうちに電話を切っていた。先を誓った相手の吉田が死ぬとは、吉田は、私を見捨てていってしまったのか。それはあまりに無責任だ。

「吉田さん、それはないでしょう。」

人生のルール違反ではないか。ゆく子は嘆きも捨てて呆然とたたずんでいた。私には、その殺人のこともそのいきさつも説明しないで逝ってしまった。

吉田の死に伴う後（あと）処理は、日本領事館の手に移された。ゆく子は、正式な夫婦ではないが、同居人として事情を尋ねられた。

すでに環境保護団体のテロで領事館には事情聴取を受けたことがあり、領事は、

「やあ。あなたでしたか。」
と、驚いた風だった。

「日本での吉田さんの犯罪は、本人の死亡で立件できないでしょうね。領事館は域内の邦人の保護です。吉田さんはインドネシア経由の密入国でした。在留届も出ていなかったが、督促しても在留届を出さない人もいます。

この国に対しては不法滞在でした。日々5000円くらいの罰金が科せられます。ほぼ1500万円くらいの額になります。遺族に請求されるかもしれませんね。

ご遺族のことはご存知でしょうか。吉田さんは、秋田県の男鹿郡の出身だそうです。地元の高校卒業後、大学の建築学科で学びけっこう大きい会社で現場の仕事をしていましたようです。事件後、インドネシア経由でオーストラリアへ密入国したのです。

国許の秋田には老いた両親がおりました。経過は地元の警察から内々おしらせしたようです。ご遺体は、ご両親が引き取るといっています。

ただ、吉田さんの死亡現場の状況は、シドニー警察が抑えていて、私たちも近づけないのです。あるいは死因に疑惑が見つかったのかもしれない。状況は流動的です。

あなたも大変でしたね。なにか質問はありますか。」

領事は、淡々と語った。

「吉田は、なんで死んだのでしょうか。」

「シドニー警察が捜査中で死因が公表されていません。」

領事は、含みを持たせる言い方をした。あるいは分っていて公表をさし止められているのかも知れなかった。

せまる処刑

ゆく子のもとには、吉田の未処理の仕事と、彼が託した資金だけがのこっていた。

「オレたちは、試されたパートナーだ。」

吉田が言った言葉が浮かんでは消えた。遺体は秋田へ帰るそうだが、その費用は膨大なものである。う。

ゆく子は、遺された営業資金から遺族にそれらの費用を割愛することにした。不法滞在のため、自分の銀行口座も開設できず、現金を机に放りこんでいた吉田だった。

ゆく子は、吉田の遺留品として2000万円を、日本の警視庁を通じて吉田の両親に渡すよう手配した。弟は。

「へー。吉田さんは、大金を持っていたのだね。分った、姉さんの名は伏せておく。こんどいつ帰国するかね。テロのことは、終わっていないよ。なにか変わったことはないか。」
と、聞いた。

「疲れたから。すこし休みたいわ。けど、遺された仕事もやらなくては。」

ゆく子は、自分が不動産屋を続ける気力を、むりにでも奮い立たせなければと思いなおした。

なにより、日々の糧も得なければならぬ。そのような下世話な日常が、吉田の好みであり希望でもあったはずだ。

ゆく子は、吉田の愛用の机にすわり、継続中の仕事に目を通した。

そのとき電話のベルが鳴った。女のこえだった。

「私、この間の環境保護団体の女です。」

「あつ」と、声が出そうになった。テロリストだ。

「今、わたしあなたの家の前の公園にいるよ、ちよつとベランダへでてくれないかしら。ここから見せたいものがあるよ。」

ゆく子は、カーテンの隙間からのぞいてみた。前の公園に派手な衣装の女が見えた。

しかし、何かがゆく子をとめた。

どんなときでもすっぴん（素颜）で外へ顔をさらしてはならないと、母から受けたしつけだった。母は、女は髪の乱れや、身の外見、顔を直してから外へ出なさいとゆく子にしつけたのだ。ゆく子はその作業中に、ふと、狙撃 という言葉が脳裏をかすめた。

吉田の死因も疑惑があるかもしれないと領事は言っていた。あるいは、吉田の死はテロリストの処刑だったかも知れない。

あのとぎのテロリストの顔を知っているのは、吉田とゆく子の二人である。

ゆく子は、身を硬くして、窓辺にたたずんだ。数秒ののち、公園側で、パンパンと銃声があった。

何の騒ぎかと、もう一度のぞくと、公園の左右にわかれた数人の撃ち合いが始まっていた。想定される事態は、テロリストと警察の銃撃戦だった。

ドアが、どんどん叩かれた。

「奥さん。警察のピーターです。聞いてください。外へ出ないで。」

あのとぎ来た刑事だった。ピーター警部は片手に拳銃を持っていた。

「テロリストの報復です。危険です。」

ピーター警部は、そのまま階段おりていった。あたりはそのまま静かになったが、警察もこなかった。追跡していったのであろう。

思いあぐねて、日本の警視庁の弟の電話した。一部始終を話すと。

「吉田さんは、テロリストのリベンジで処刑されたのだろう。シドニー警察からは、吉田さんの遺

体の下げ渡しもないのだ。領事は経過をすべて知っている。姉さんも狙われたし、そこは危険だ。こっそり帰国してくれ。出国まで領事館の護衛を頼もう。もつとも日本が安全ともいえないが。」

ゆく子は、すべてを了知した。テロリストは吉田とゆく子を狙っていた。拘束した時点で処刑しなかったことを悔いていたのだ。

夜になって、シドニー警察のピーター警部が婦人警官を連れて訪れた。

「吉田さんの死因は銃弾による出血多量と断定されました。あのときのテロリストによる処刑でしょう。おなじ時、テロリスト3人のうちリーダー格だった男が仲間内で処刑されていました。」

あなたたちを一時的にでも解放した判断ミスが理由です。そのため、海上の捕鯨船の爆沈が1隻にとどまってしまった。彼らは、少なくとも5隻は成果としたかったようです。」

今日の私たちの銃撃戦では、残った男女二名のテロリストの捕縛ができなかった。人口密集地の捕り物だから、住民に二次被害をあたえないよう手加減したためです。」

ピーター警部は、悔しそうに言った。

「これから、日本領事館へ案内します。1時間後に出発しますから。」

婦人警官が、ゆく子の退去準備を手伝った。

ゆく子は、吉田が、日本で犯した犯罪の追及に耐えられず、切羽詰り自殺したのではないかと思っていたがそうではなかった。先日のテロの拘禁の続きの処刑死だったのだ。ゆく子は背筋が寒くなった。

ならば、私も同じ立場である。テロリストは、地球の裏まで追ってくるだろう。

そこが日本であっても同じである。ゆく子はテロのターゲットになってしまったのである。

日本へ

領事は、夜半であるにもかかわらず在席した。

「あなたが無事でよかったです。ハラハラしました。現居のほうはシドニー警察が巡回して守るそうです。しばらく帰国して安全を期しましょう。空路では、ちょうど帰国するこの主席領事が同行します。空港からは、日本の警視庁の保護下で帰宅してください。」

「吉田の遺体はどうなりますか。」

「テロリストによる処刑死と確定したので、今日以降、いつでも引きとりができると思います。

故郷の親御さんは、死因を聞いて、こちらで茶毘に付してお骨でもって帰る、と予定を変更してきました。遺体が損傷していますし、そのほうが経済的です。ご両親は明日にでもこちらへこられる予定です。あなたとは入れ違いですね。」

ゆく子は、吉田に会いたいと思った。しかしもう数時間後には出国せねばならない。

「帰国前に、吉田に会えないでしょうか。」

領事は、腕時計にチラッと目をやって、

「ちよつとシドニー警察へ問い合わせてみましょう。」

と、電話機に手をのばした。

シドニー警察の霊安室はひんやりしていた。吉田の遺体が柵から筆筒のように手前へひき出された。

見られたのは顔だけだった。眠っているような顔だった。いつもの顔だ。ゆく子はじつと吉田のデスマスクを見つめてから合掌した。吉田とは知り合つてから、つかの間の夫婦ごつこだつた。

「あなたにとつても、私にとつても、オーストラリアは最後の地だ。地球最後の日まで私は生き抜いてみせよう。」

と、ゆく子は吉田の遺体に誓つた。

「吉田さん。あなたは不運だつたね。ゆく子は、あなたの分も生き抜くよ。」
ゆく子はそう言つて最後の別れを告げた。

離陸する機体は急速に後ろへ傾き、前方が天井とまがう錯覚に陥る。すこし左旋回で左の窓からシドニーの街あかりが真下に見えた。

海外居住の邦人には、帰国時の安心感が睡眠となつて発現される。ゆく子は、一等座席で死んだようになつて眠つた。

着地の羽田は曇つていた。ゆく子は、警備員にVIPの出口に誘導された。

そこで警視庁の護送車に乗った。エスコートしてきた、総領事館の主席領事も一緒だった。運転する警察官が。

「お疲れでしょうが、警視庁ですこし事情の聴取があります。」

といい、桜田門へ急いだ。いつか見た日本の普通の景色は、日本の風が吹く安心感のもてる風景だった。

日本国内では日本人は、居住者ほぼ全員が同族人だという、心の安らぎが感じられるのがいい。

今日は、日比谷の森に飛ぶカラスさえ珍しく見えた。

取調官に聞かれたのは、三つのことだった。まずテロのことである。係官はシドニーの領事が解説した状況を繰り返した。

「あなたは、テロのターゲットになっていきますから、十分注意してください。日本にいる間は、所轄による巡回が頻繁にあります。なにが起こるかわかりません。テロリストの日本支部のようなものがあるかもしれないですね。」

二つ目は、テロの凶弾に倒れた吉田とのことであった。

拘束中に吉田が、ゆく子の解放を交渉し、ゆく子は一時的に解放されたが、ゆく子は、日本の警視庁を通じてこの危機を通告した。ゆく子は切羽詰って警視庁の刑事である弟に相談したのである。

弟は、警視庁に籍をおく犯罪捜査のスペシャリストだった。直ちに海上保安庁と陸上の警察によるオーストラリア治安機関への情報提供が行なわれた。

瞬時に現地の情勢は変わり、それによってテロリストの行動は制限され、捕鯨の船舶は被害は最小にとどまった。

しかし、テロリスト組織の鉄の掟は、ゆく子はか人質を作戦中に解放したリーダーを、戦士の理念にもとると即時処刑し、そのあと報復的に吉田とゆく子を狙った。そして吉田はこのテロリストの面（メン）われを防ぐため、と組織防衛と報復の対象となり処刑されたのである。

生き残っているゆく子も、吉田同様に狙われている。帰国のきっかけは、ゆく子が狙撃されそうになった一件であった。あのとぎのテロリストの女の、電話によるベランダへの誘導である。ゆく子が言われたとおり、ベランダへ姿を見せていたら、たちまち狙撃されていたであろう。

そこでシドニー警察、総領事館、日本の警視庁がタイアップしてゆく子を日本へ避難させたドラマであった。

警視庁の取調官の三つ目の尋問は、吉田の凶状であった。しかし吉田は、自分の犯した殺人事件のことは、ゆく子には一言も明かしていなかった。だから日本から逃げ、経由地からオーストラリアへ密入国したいきさつは、領事館で説明を受けた以上のことは分らなかった。

ゆく子は昼の日比谷公園を右にみて、母の待つ小岩の弟宅へ送られた。

3月初旬の東京は、春特有のハッキリしない空だった。まだ色もなく香りもない木々のたたずまいが景色に固定したようにはり付いていた。

小岩の弟宅に到着したのは夕方だった。

「よく帰ったね。」

母が咽ぶように叫んだ。ゆく子は「ただいま。」といって、そこに座った。

「まあ、お茶でも。何か食べたいものはある。」

畳に座って、茶を飲んでみると、昨日までの海外生活と異質な感覚に襲われるのだった。

夕方、所轄の警察官が、パトカーで訪れた。ゆく子の面通しのようだった。

「所轄の池上といいます。近辺警備に当たります。」

警官は、両足をそろえて敬礼の姿勢をとった。

浮雲のゆくえ

せつかく帰国したのだが、警察の身の回りの警備が厳しく、自由がきかないゆく子だった。

「これでは買い物にも行かれないわ。」

「姉さんの生命維持のためだ。贅沢を言っては困る。狙撃されそうになったんだろう。」

弟がなじるように行った。

「買い物に行きたいなら、所轄の池上さんに連絡しなさい。ついていってくれる。」

「そんな。警察官と同伴で買い物なんて。」

「要人警護はみんなそうだよ。首相夫人だとか、皇室の宮さまとか。」

「私は、普通の人だわ。」

「自分が危険にさらされている人だと、自覚してもらわないと困る。」

「今のうちに生命保険に入っておこうかしら。殺されたとき、あなたたちが潤うように。」

「冗談を言っている場合じゃないよ。そうだ、あの吉田さんに遺留品として渡した2千万円、警察から親に渡しておいた。親御さんは、死んだ息子に感謝していただきたい。」

「良かったわ。」

吉田が、営業資金として残したのは五千万円だった。ゆく子がそのうちから渡したものである。

領事は、不法滞在の罰金で1500万円、遺体の搬送で数百万円くらい必要といていたが、息子の遺したものは役立っただろうか。

ゆく子は、シドニーの不動産の営業のことを思い出した。5〜6百万円のコミッションを集金しそこなっている。

しかし、このように警備されていては如何とも動けないのであった。もう一つは、私は、テロリストからいつ解放されるのか、ということだった。

そういうえば、テロリストと解放を交渉したあの時が、実は私たちの死期だったのではないか。

解放は、テロリストのミスだとして、あの子のリーダーは処刑されたのであった。

つまり本来そのリーダーがするべきだったのは、テロリストとして、あの時点でのゆく子と吉田の

即時処刑だった。

因果の連鎖は、さらに続く。二人が、受託マンシヨンの点検に訪れなければ、テロリストに遭遇することはなく、すべての不幸は起こりえなかった。

その最悪のタイミングは予測不能なものだったが、その辺が二人の生死の分岐点であったろうか。人の運命など誰にも分りはしない。

ゆく子は、毎晩、吉田と行ったり来たりでこれらの会話を続けたのであった。

「そうだ、オレは拘束されたときに処刑されるのが本当の流れだったのだろう。わずか4週間の執行猶予のような延命だったが結局は処刑された。しかしゆく子、オレがヤツらと交渉して君を解放させたことは大ヒットだった。

世界平和への貢献だったね。ゆく子の一時的な解放が、結局いくつかの捕鯨船舶の撃沈を防いだ。価値ある交渉だったよ。」

そうだったのである。吉田一人の命が4〜5隻の船舶と引き換えの価値があったなら、吉田は無駄死にはなかったことになるかもしれない。

「でも、あなたに生きていてほしかった。」

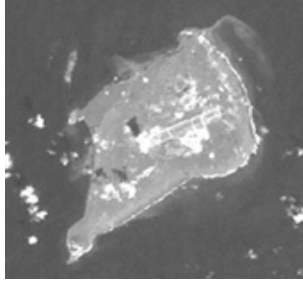
浮雲は、流れてどこへいくのだろうか。

「おーい、あなたは、いまどこにいるの。」

ゆく子は、南の空へ向かって呼んでみた。

その声は浮雲にのり吉田のいる空へ、ちぎれ雲のように翔んでいったのだろうか。でも、ゆく子のその声はいまはむなく虚空に消えていった。了

硫黄島の怨歌



硫黄島

小笠原諸島の「小笠原」は、信州小笠原氏の名によるものといわれてきた。小笠原諸島父島の扇浦に貞頼（さだより）神社がある、小笠原貞頼を祀った神社である。

この小笠原貞頼の歴史的な存在は確認されない。いつの時代かに小笠原の名だけが一人歩きしてしまつたようにみえる。

仮に小笠原と信州との間に何らかの接点があるとしても、現在の信州松本地方にあつた小笠原氏に由来する伝説の範囲にすぎない。

私は、生粋の信州諏訪の生まれである。この小笠原氏とは同郷の信州という以外になんの関係もないが、私は東京都の小笠原支庁の職員としてここに勤務したのである。

このころ私は、小笠原村父島の生協を永く経営した老人ヘンリーさんと知り合つた。

この老人ヘンリーさんは、このころすでに日本でいえば卒寿の年齢だつた。

ヘンリーさんは、よく昔のことを語ってくれた。小笠原諸島の父島は、昭和43年に施政権が日本へ帰ってくる前は、アメリカ合衆国のカリフォルニア州に属する一地方だつた。

そのころ、ときおり日本や台湾の漁船がシケや台風の避難で入港したり、日本の自衛艦や日本のコーストガードの船が、補給で寄ることがあつたという。

ここ父島では欧米系のわずかな住民の生活のため、住民同士「ボニン諸島通商会社」を立ち上げ

て、グアム島經由でうまいカリフォルニア米や、シアーズの拳銃を買った。ピストルが日用品として必要だったわけではない。アメリカ人にとってピストルは、空気のようなものである。手元がないと不安で仕方がない。かといってあつてもこれといって使い道はないのである。

施政権返還の昭和43年というのは、日本では数年前に東京オリンピックピックが開催され、戦後生まれの子供たちが、もう23歳になったころである。

また日本の一般社会では、戦後の影は消えて日本国の憲法も教育基本法も、その定着から熟成の時代に入つて、そろそろ憲法改正が話題に上るほど時代は進行していた。

この永い年月、小笠原は星条旗がはためき、昔ここが日本だったということも忘却の彼方におかれ、100%のアメリカが定着していた。

日本側からみれば、小笠原には明治の日本帝国憲法の残骸が敗戦でうち捨てられ、なにもかもアメリカに占領されたときのまますぎた四半世紀後の世界であつた。

施政権が日本へ移行されると発表されたとき、小笠原のアメリカ人ヘンリーは、複雑な気持ちでそのニュースを聞いた。

今、ここには日本の気(け)はまつたくない。アメリカそのものである。なにをいまさら日本であるか。

日常会話はイングリッシュユダし、通貨はドル、ヤード、ポンドの世界だつた。ヘンリーのような商人には、言葉と通貨がすべてである。

ここが日本に変わったらどうなるのだろう。店の商品の仕入れはどうなるか。銀行もアメリカへ引きあげ、保有するドルは役たたずとなってしまう。

日本人が一人もおらず、300人くらいの欧米系の住民と、米軍人だけの平和な世界だったのになんということか。

ヘンリーは、今後の身の上の変化も見とおせぬままに不安を覚えるのだった。小笠原の施政権をなぜいま日本へ返さねばならないのか。

もつともアメリカがこの島を実効支配していても、アメリカにとってなんらメリットがないのは分っている。

わずか300人ほどの欧米系住民のために軍政府をおくなど、手間ひまかかることであり、小笠原がアメリカにとつてお荷物であることも理解できる。

ロシア政府が北方領土を自国にとつて価値あるものとして返還を拒否しているのとは異なるのである。

しかし、日本は戦争に負けた。つまりアメリカが勝ったのだ。小笠原は戦利した領土ではないか。戦争に負けた国が、改めて領土の返還などを要求するのはおこがましい。

それがいやだったならば日本はあの戦争をおこすべきではなかった。

しかし実際には無謀にも戦争をおこし力および負けた。力及ばなかったということは、日本はその程度の力量の国だったのだ。

今日も波を飛び越えてイルカがはしゃぎ、ときおりくじらも姿を見せるのどかな今日の海は、いつものエメラルド色に輝いていた。

島の中央にそびえる独得な形の山々は、地殻変動で隆起したものである。おなじ高度が連続しているのはその証拠である。

南側には海食洞が多く、以前に日本軍が司令所や戦闘機の格納庫、人間魚雷の発進所など多様な活用を試みたのである。

米軍の弾薬庫付近は立ち入り禁止となっているが、ポラリスなど核装備が公然と格納されていた。ここはアメリカだから当然である。本土復帰になったら核をどこへ運ぶのだろうか。

沖縄かもしれない。沖縄は小笠原と違い米軍の有用な基地だから、今後とも日本への返還はないだろう。

ヘンリーは思った。沖縄はアメリカにとって共産圏に対する防波堤であり、アメリカの生命線である。

さて私が知り合ったヘンリーさんは、気分よいつき私に語った。

「あなたは、硫黄島へ行ってみなさい。年に二回ほど遺骨収集と村人による墓参のチャーター船が出る。そこであなたは、世にも不思議なものに遭えるかもしれない。」

さらにヘンリーさんは言った。

「あなたは、暇があつたら島の瀬戸の海食洞と扇浦の吹上谷へいつてみなさい。この島の歴史に身をもつて触れられるかもしれない。」

瀬戸は夕焼けで明日も晴れそうだった。夕波は夕焼けに重なっていた。

その1

硫黄島の怪

私には、硫黄島の墓参の機会が先に訪れた。

硫黄島へは父島から約8時間の航海である。

硫黄島は接岸し得る港も岸壁もない島だから、船は錨泊である。そこからはしけ船をクレーンで下ろし分乗するのであるが、この作業に時間がかかり、客は停泊、動きのない船に眠っていたので、目的地に着いたのかどうか定かではない。甲板に出て初めてそれが分るのであった。

甲板上がってみると、初見でも一目でそれとわかる。すりばち山が、平坦な島の端にぼっかりと丸く空中にあった。

父島と違つて硫黄島は、すりばち山の他に丘も山もなく実に平坦な島であった。これなら飛行場はどこにでも、いくらでも作れそうであった。住民がいる父島や母島は、狭小と地形複雑のため飛行場のスペースがとれず、ヘリや飛行艇に頼るセキュリティにあまんでいるのに比べうらやましい島

にみえた。

硫黄島はいうまでもなく玉砕の島であるが、日本軍だけが占有したのではなく、れっきとした日本人が住んだ島で、軍などはあとから配置されたものである。

ここは硫黄島（いおうとう）村といって、神社もあれば観音様も祀られていたのである。

南洋方面の戦時の日本の落ち行く状況をみると、サイパン玉砕の3月前の、昭和19年の4月から5月、連合軍は、ニューギニア島へ上陸した。

戦線拡大がたり、応戦できる装備も食料も欠乏した日本軍は、なすすべもなく人跡未踏のジャングルを彷徨して14、600人が餓死した。

翌月は、ビアク島が圧倒的な力の差で3個大隊と高角（射）砲隊が玉砕し、一部は、自然壕に追い詰められ2、000人が火炎放射機で焼き殺された。

硫黄島玉砕の直前の昭和20年3月25日、戦艦千鳥は北硫黄島沖にいた。敵の硫黄島上陸に際して、海上から日本軍を援護するためである。

同日、艦長は乗組員に告げた。

「本艦の燃料は底をついた。明日の戦闘がこの艦が行動できる限界となる。各兵は、心して効率よく戦闘に奮闘されたい。」

それを聞いた乗組員は、一様に青くなった。

「もう帰れないのだ。」

この船は、もともと帰りの燃料を積んでいなかったのである。

横須賀から1800kmの硫黄島等火山列島の洋上は、米軍の攻撃の日、海が真っ黒になるほど敵艦船が押し寄せた。

すでに艦長は帰還困難と覚悟していたのである。

「燃料が尽き次第、艦は至近で座礁させ、硫黄島を援護する。」

乗組員は、今度は真っ赤になった。

後の世で、史上最大の作戦、といわれ歌にもうたわれた、ロンゲストデーのノルマンディー作戦と同様であった。

日本軍は、縦横無尽に掘り込んだ硫黄島の地下壕を活用して要所を固めた。艦船上からはどこに日本軍がいるのか分らない陣地だった。

栗林司令官は、敵を十分にひきつけてから一斉射撃を目論んだのである。ところが何の手違いか、恐怖に怖気ついたか早々に大砲を撃ってしまった部隊があった。

その大砲の一発で日本軍の陣地の位置が判明した米軍は、そこを中心に総攻撃を開始したのであった。撃ち込まれた砲弾は数十トンにもおよんだらうか、硫黄島の砂も、土も岩壁も鉄が食い込んだ人工の造形物のような態となった。

これが日本軍2万人以上の玉砕となった硫黄島の戦の始まりであった。

硫黄島の墓参に訪れた私は、戦跡を見て回ったが、いずれも火山列島だけあって、壕内は暑く、長時間滞在するのは苦痛だった。この灼熱地獄に、司令部や診療所や居室が置かれていたのである。

火山列島の名のとおり島の地殻変動も激しく、当時の記憶で壕を訪ねても見つからない。

大阪山大砲跡に連隊の記念碑があった。ジャングルの下でいくつかの隊が、それぞれ壕を伝わって戦い、移動したので、日の目も見ないで生き埋めになった兵は数しれなかった。

このように何十トンもの弾丸が撃ち込まれ硫黄島は、60年経過した今でも、あたりの岩には、まっ赤にさびた鉄の弾らしい残骸が無数に、そしていたるところに時間を超えて、激戦の戦場を再現していた。不発弾も多数出てくる。

すでに燃料がつき、座礁して単なる鉄(くろがね)の塊と化した戦艦千鳥の乗組員は、守るも攻めるもならず、一部の乗組員をのぞき早々に玉砕した。

その一部は、すりばち山直下の海食洞へもぐりこんだが、ここでも日本兵は火炎放射器で焼き殺された。

人間の死には、思いつくままにあげても自然死、病死、餓死、事故死、水死、刑死、銃殺、打ち首などがあり、古くは討ち死にとかさまざまな死に様があるが、生きた状態で無理やり殺されるのは悲

惨である。戦場での死因にはあらゆる死に様（さま）が混在し、なんでもありである。

江戸時代のころ、恋人に会いたさつのもつて放火した八百屋お七は、火あぶりの刑死だった。

火を用いてお七が苦しみ死んでゆくさまを公衆に見せる「見せしめ」であったが、火炎放射器による処刑もその類であろう。

2013年に北朝鮮の金第一書記が命じた何人かの政敵への処刑でも、銃殺にあわせて火炎放射器が併用され、恐怖感を見せて「人民への見せしめ」とした。

米軍は、この硫黄島の日本兵残党狩では、

「降伏を条件に生命を保証する。」

と拡声器で伝えて回ったが、多数の日本兵が、それに誘い出され・投降したが、出てきたとたんに撃ち殺された。

生かして捕虜にする手間を思えば、ここで戦場死させたほうが手間が省けると考えたのであろう。戦争におけるいのちの価値など一寸の虫のいのちにも及ばない。

すりばち山の基部付近は、硫黄が吹き出す地獄模様であるし、硫黄島の海域は硫黄まじりの海水だから人体に有害である。2014年でも自衛隊のへりからの下降訓練は、父島海域まで出張（でば）って行なっている。

今日私は、すりばち山の基部にあった。すりばち山の頂上は、米軍のピクトリーモニュメントなど

が誇りたかく鎮座しているが、山のふもとは未開のジャングルで、日本軍の壕が多数脈絡なく残っているのである。

ジャングルに一步踏み込むと、そこは人を拒む別世界の様装である。静寂と今は究極の自然、名も知らぬ植物のオンパレードであった。

構築物が見えたと思ったたら、それは形ばかりのコンクリートのかまどであった。よくみるとここそこに銃弾がめり込んだんだ岩肌が露出しているのだった。

私は、そこでサルに遇った。サルだろうか、萎縮したからだの人間ともとれる不思議な動物であった。

さらに下向きの沢を下って、海と思われる方向へ下る途中だった。

サルは、遠巻きに私についてきた。右に壕がみえた。この島では壕など珍しくもないが、壕というのは奥行きが分らないし、入った通路は暗いし、いつ落盤が起こるかも予想内である。

もし閉じ込められたらと思う気持ちだが、閉所恐怖症である。高度恐怖症とおなじ種類のトラウマである。

その壕の入り口からは、蒸し暑い熱気がほんわかとにじみ出てくるようだった。

この島のレモングラスは硫黄に強い草である。このレモングラスで壕の入り口はおおわれていたが、地形からここに壕があることはすぐわかった。正面からは見えず横岩が衝立になったような力

フラージュの地形である。

私は誘われるように、わずか直径50cmの入り口から上半身から入坑した。数メートルは匍匐（ほふく）前進するが、下側に掘り込んである位置から立つことができる。

水が入らない配慮であろう。この壕は居住用であるらしい。

戦闘用は海岸べりにあり、銃眼がいくつかついたものや、銃眼を広くとった機銃用もある。大砲が入った大型のものも遺され、壕はエックス型に掘りこまれ、複数の部隊が戦闘した形跡も残されている。

用途では、居住用、倉庫用、事務用、指令用、通信用、探知用のほか、電源用、探照灯やソナー探知壕があり、武器庫を兼ねたトーチカに近いものもあつて壕は多様である。

私の入坑した壕は、電信と居住を兼ねたつくりだった。

当時は徴用された朝鮮人や、炭鉱の労働者やそれを指導する専門の技術者が軍属として派遣されて、硫黄島、小笠原、サイパン、南ではフィリピン、ニューギランドに至る日本軍の戦線に従軍して、トンネル掘りをしたのであった。

しばらく真つ暗な壕を進むと、すこしボヤつと自然光が見えた。

前方になにか動くものがあり、ハツとして目を凝らすと、そこには先ほどのサルが数匹いるではないか。この場所の開口部が出入り口だったようである。

私との距離は10mほどであった。そこに3匹のサルがいた。しなびた人にも見えるサルであった。

サルは、私に気がつくのとパツと散った。私は、

「おお、よし、よし。」

と、子をあたすように声を出した。よく見ると、サルの顔は黒くしわが多かった。老年であろうか。驚いたことに毛をもつて覆われるべき体は、毛と見間違う皮膚の硬化としわで全身が毛のように見えたのである。

どう見ても人間が一回りもちじんで固まったミイラのような老人に見えてきた。

「あなた方は、どうして。ここに。」

話しかけてみたが、この奇妙な人種はお互いに顔を見合わせるばかりだった。

「エーレー。」

一人が叫んだ。

「エーレー。英霊ですか。」

私は、復唱した。

「そうだ、われわれは、エーレーだ。内地のおひとか。」

会話にエンジンがかかると、徐々に口のまわりが滑らかになるようだった。エーレーは語った。「聞いてくれ。硫黄島防衛船に燃料がない。はじめから半分しか積んで来なかった。それを聞いて

みんなの顔色が変わった。みんな真つ青になった。まもなく真つ赤に変わった。覚悟ができたというわけでもなかったが、帰れない戦いだとわかった。」

燃料が尽きると艦長は、この艦を座礁させて戦ったが、歴史の流れをひっくり返すこと到底不可能だった。

この戦艦千鳥は、やがて爆発を起こして横転した。多くの船員は投げ出されたのである。

エーレイの話は、怨嗟に満ちていた。

「私は、昭和17年に一旦病気で帰郷した。あれほど頑丈だった私の体は、前半の戦でズタズタになり、一時帰休で郷里で療養したが、私の体は身内も近所の人も、目をそむけるほどの憔悴だった。

すこし休んで体力を回復した。その間に妻に子ができた。しかし、出産を待つことは許されなかった。すぐに再度の応召になった。

子は、いまはもう50歳を超える歳だ。今日まで一度も子を見ることはなかった。」

エーレイは、顔をゆがめて訴えるように私を見つめた。

「お気の毒です。」

「内地のお人。」

エーレイは、探るような目で私を見た。

「戦争の始末はついたのか。」

「日本は昭和20年8月15日にギブアップしました。戦犯も裁かれました。」

「おれたちを戦争に追い立てて、殺しまくった軍や政府には責任を取らせたか。」

「戦勝国による裁判で戦犯は処刑されました。」

「そうではない。それは、相手に対しての罪だろう。われわれ兵や、家族への罪のことだ。加害者の国家を、誰がどう裁いたのか。」

「国内の被害者への国家の殺人などの罪は不起訴です。国家の犯罪だから立件が難しいでしょう。」それを聞くと、エーレーは怒り狂った。

エーレーたちは、数人が集まり、なにか互いに脈絡なく大声で怒鳴りあっているようだった。しかし意味は不明だった。エーレーたちは、おしなべて顔は紅潮し背筋は伸びていた。

戦国の昔、日本には、竹中半兵衛、黒田勘兵衛、山本勘助など著名な軍師役がいたのであるが、明治以降の近代戦では参謀という役が変わった。

この参謀役に才ある人材を欠いた悲劇が、日本敗北の裏にあつたようである。

これら参謀は、機を見るに鈍（ドン）であり作戦ミスが相次いだこと、また物量の不足はいかんともしがたく、無謀にも国力の違いすぎる相手に、精神主義で徒手空拳の戦いを挑んだのが敗因である。もともとやっつてはならない戦争であつた。

単なる弾薬がわりにされた彼らエーレーは受難の民である。しかし神は彼らを助けることはなかつた。すでに神ははじめから日本を見放していた。

彼らの受難に立ち会うマリアもいなかつた。

イエスの受難のとき、十字架のもとにその母マリアがたたずんでいた。西欧の音楽の歴史の源泉は、この「聖母たてり」とテーマされた系譜が根本にある。

これは宗教曲の「スターバト・マーテル」のテーマとして表現された。桐山襲という作家が好んで作品のテーマにとらえた題材でもある。

桐山襲の同名の小説では、一過性のチンピラセクトの赤軍派の戦いに、戦士の理念を見出そうと着目して「スターバト・マーテル」という荘厳を準用したが、歴史上巨大な日米戦争にこそ踏み込んでもらいたかった。

ここ硫黄島の戦いは国家規模の戦争における、戦士の理念が論じられるべきであったからである。エーレーの問いかけは、これら受難の民が後代へする、自分の受難の告発であり、加害者を糾弾しようとするエーレーの復讐でもある。

だからこそエーレーは壕を訪れるものには、誰彼問わない問いかけを続けているのだ。自分たちの戦の勝敗と、それが後代にもたらした効果を確認しなかったたのであろう。

「おれたちの死は、意味があつたのか。」

しかし私から得た否定的な回答は、エーレーを絶望におとし入れ、彼らは怒り狂つたのだと思う。

エーレーが怒つたのは、帝国日本が犯した明らかかな罪状に対して、日本人が不起訴処分で済ませってしまったというやりきれない結果であつた。

その場は、嘆きのジャングルに化した。エーレーは気を取り直して、

「出口へ案内する。」

と、一人が先にたつた。しばらく獣道（けものみち）をたどると、先ほどとは違うコースで元のジャングルに出た。別れ際エーレーは、じつと私を見ていった。

「私たちの硫黄島の戦闘と死は、全くの無駄だったようだ。数え切れない野ざらしのエーレーに伝えよう。さて、内地のお人。ここで見たことは、誰にもしゃべってはならない。いいね。」

私はうなずき先ほどの道を登り始めた。時刻をみると、集合時刻にあと30分のタイミングだった。

強い硫黄のにおいが漂っていた。すりばち山に登るジャングルの道は、落ち葉で滑りやすかったが、地肌は堅固だった。中腹からは、島の東西の海岸線がみえ、気がつくとも中腹にもいくつかの銃眼があつた。それぞれ脇に壕の入り口があるはずだが、見てまわる余裕はなくそのまま通過した。

今でもそれぞれにエーレーが住んでいるのだろうか。ほぼ1km直下には硫黄が滾（たぎ）り、臭気ふんぶんの火口穴が大口を開けていた。

突然、その付近で大爆発が起こった。位置から推測すると先ほどのエーレーがたむろしていたあたりらしかった。

黒煙が、500m上の私を包んだが、それは硫黄のにおいではなかった。

硝煙の臭いである。まがうこともないあの花火の火葉の臭いであつた。地雷か不発弾の爆発かもしれない。とっさにそう思った。

危険を避けるため、私はすこし急いで遠ざかることにし、やぶこぎをしながらすりばち山へ直登したのであつた。

驚いたことに、あの大爆発に気づいた墓参の村人は、百人ちかい同行者の一人たりともいなかった。

案内書によれば、すりばち山の下部は戦跡に不発弾が多いので絶対迷い込んではいけなさと記（しる）してあつた。

あの爆発は、エーレーが踏み抜いた不発弾だったのだろうか。いずれにしても私はエーレーに救われたようである。

硫黄島の墓参を済ませた村人は、船で島を一周して帰路についた。船上から見返ると、夕暮れのすりばち山に、一筋の煙が立ちのぼっていた。

それはエーレーが焚いたのろしであつたかと思う。エーレーは、あののろしに託して何を伝えたかつたのであろうか。

古来、伝説とはある程度の信憑性を期待され、おとぎばなしであればそれ自体読み人に、その内容を信じられようとする意図はなく空想を楽しむ芸術である。

エーレーの存在はいずれに属するだろうか。

人類に文字がもたらされた以前からあつた「かたりごと」でもよい。後代に語り伝えてほしい。というのがエーレーののろしのゆえんであろう。

村人は、硫黄島に向かって合掌する人あり、供物の日本酒を走り去る船べりの海へ注ぐ人あり、と、さまざまな思いを抱き、溶け込むような薄暮の訪れのなかで硫黄島との別れを惜しむのだった。

その2

瀬戸の海食洞の怪

雨の降る日曜日だった。こんな日は島のどこへ行っても眺望がなく、降る雨が起こす方向も定まらない風に悩まされるのが常である。

戦跡日和と思い、ヘンリーさんが言っていた瀬戸の海食洞へ入ってみようと思った。

潮時表を見ると今日は干潮である。

岩陰のことと思しき はからめ の茂みに入ってみると、洞はすぐ分った。そこから後ろを振り返ると崖の上には銃眼が見えた。

なるほど当時のセキューリティーであろうか、洞の入り口を後ろから監視していたのである。

ここには人間魚雷の「震洋（しんよう）」の基地があった。海食洞を利用し、洞の中に数台の魚雷艇がつながれるが、潮の満ち引きにあわせて、艇が浮き上がったとき発進できる。

小学校の講堂より小さめだが、出入り口はたこの木に覆われて洞の存在自体が外部からは分らない。

もちろん今は、中には何も伝説だけの海食洞である。

洞の入り口近くの岩の上に、二人の釣り人がいるのが見えた。アノラックを着て、救命胴衣をつけているが、アノラックの風防で顔が覆われているので誰か分らない。

観光客は、ほとんどチャーター船で釣に出るので、岩からの釣りは地元の愛好家であろう。声をかけても、声は波の音で届かない位置である。

はからめ の草むらをわけて洞に近づいた私に、その釣り人が二人一緒に大声でさげんだ。

「あぶない。隠れろ。」

と、言っているようだった。私は、洞の内側へ滑り込んで、後ろ側を伺った。突然、崖上の銃眼から、紫煙が撃ち出されるように放出され銃声が響いた。

そして二人の釣り人が、至近の波に飛び込むのが見た。

私は、一瞬、なにが起こったのか混乱した。銃眼からは、連続してさらに2回の煙が発射音とともに飛び出す様子が見えた。

外はあぶないと判断した私は、すこし洞のなかへ足を進めた。すると洞の奥の水際のほうからモリを抱えた男がでてきた。

「なにか、爆発した音がしましたね。」

と、私の脇を抜けて、入り口から外をうかがうそぶりだった。男は、黒いウエットスーツを着て、ゴーグルを顔につけていた。洞の陸とは反対側の海の方から逆に入ってきたようであった。男は、

「まずいな。」

と言つて、もとの海のほうへ戻つていった。

私も、洞の奥の方を見たかったので、彼について波の音が響いてくる方向へ歩をすすめていった。そこには小型のモーターボートが係留されていた。ウエットスーツの彼が乗ってきたものらしかった。

引き潮だったが、モーターボートの底はわずかな隙間を残して浮いていた。彼は、

「戦時中にね、ここから魚雷艇が発進したのですよ。死に行くんです。魚雷そのものに乗るのですから。当然自爆です。そんな戦争は日本だけでしょうね。爆弾三勇士が教科書で讀えられたのですよ。あなたはいい時代に生まれましたね。」

彼は、そう言つとエンジンをかけて発進した。

なにか引つかかるセリフだな。と私は思ったものである。殊に、

「あなたは、いい時代に生まれました。」

と、言い残したとき、ふと彼の顔が自然光ではつきり見えた。それは、硫黄島のエーレーとそっくりだった。

モーターボートは、直進ではなかった。左右ジグザグに走り乗員もいつの間にか3人の人影に見えた。その増えた二人は黄色い救命胴衣をアノラックの上につけていた。

先ほど海へ飛び込んだ二人かもしれない。

そのモーターボートは、海上を左右ジグザグに走り、左右の舷に交互に引き波を立てて、そのかぶる波を崖上の銃眼からの狙撃の盾にして、銃弾を避けながら進行しているように見えた。

瀬戸の潮は右から流れ、かなり早い海流になっていたが、モーターボートは流れに乗るよういつの間にか視界から消えていた。

私が見ているところは、ほぼ海面と同じ高さだったので、モーターボートは平面的に見え、銃弾を避けていたのかどうかは定かではない。

私には、あの三人は、硫黄島のエーレーとおなじ類の人たちに思えてきた。

そして、すでにモーターボートが消え去った彼方を、波の間に間にすかしてみるのがだった。

ともかく私は、魚雷艇発進基地だったこの海食洞の大きさと立地の良さには感心した。

そして、多くの若者を戦争に駆り立て、帰還困難な自爆魚雷艇に消耗品のようにのせた狂気の戦闘には、心が暗くなる思いであった。

その暗い気持ちを引きずり、今日の超常的で理解を超える出来事に首をかしげながら海食洞の出口へ向かった。

気がつくと出口にあたるそこに、不思議な人物が海を見ながら、ブツブツつぶやいていた。着衣の下には警備員の制服を着用しているらしいが、白い上下のつなぎ服でそれを覆っていた。

ただ帽子にはイカリのマークがみえたので、定期船の乗組員かと見まがった。

私が近づくと、

「この奥で、不審な男たちをみませんでしたか。」

と、問うたのであった。目は大きなサングラスで覆われていた。

「海運会社のものですが、明日の出航をまえにいらなくなってしまったのですよ。」

男の顔は黒かった。黒い顔にサングラスをかけているので、実に不思議な雰囲気をもしていた。

「ウェットスーツで、モーターボートに乗って行った人は見かけました。」

と、私が言う。

「なにか言っていましたか。」

「私に、いい時代にうまれたね。と言いついて残していましたが。」

男は、サングラスを取って、改めて私を見た。その顔は、硫黄島のエーレーと同じだった。

「あの者たちは、逃亡兵です。昭和20年のころ、震洋（しんよう）という魚雷艇に乗り出撃を命じられたのです。」

当然、それは、死に行つて来い。という死刑のような命令です。艇は発進した後、敵艦へ体当たりして自爆するものです。もちろんワンワンウエイの燃料です。」

私は、聞くともなく問うた。

「あなたは、追いかけているのですか。」

「そうです。逃亡が明白になった日から追いつけているのです。」

彼の衣服は、白のつなぎで覆われていたが、海風の息が強まったとき、はだけたつなぎから見えた

のは、特警（海軍の憲兵）の制服のようだった。

あの4人の追いかけてごっこは、60年も続いていたのだった。まさに永遠の海上の逃亡者であり、まがまがしくも（不吉なようす）永遠の追跡者であった。

いつの間にか雨はあがり、規則ただしいなぎさの波動の音が、浜に刻みをつけていた。

モモタマナの紅葉の下、すこしたたずんで瀬戸を見回したが、あの不思議な4人のエーレーの姿はなかった。

翌日、私は資料室で昭和20年8月8日の東京日々新聞を見ると、次のような記事があった。

父島瀬戸前の、ダイハツ艇で震洋（しんよう＝自爆艇）の乗組員が事故。とあり、4人の事故死が小さく載っていた。

しかしあのエーレーたちの話を総合すると、事実は事故などというものではなかった。

「3人の魚雷艇の乗組員は、出撃し自爆を強要されたので艇で逃亡した。追跡に回った特警（海軍の憲兵）と銃撃戦となり彼我4人が射殺された。」

これが真実だ。

私はやるせない気持ちで資料室を後にした。

赤いかんざしといわれるビーデーの枝が絡みついた60年前の空から60年前の陽光がさし、至近の海の潮騒が耳障りだった。

あのとき逃亡兵と特警との銃撃戦は決着がついていない。エーレーはいまも逃亡し、追跡し果てし

ない戦いが繰り広げられているのである。

追跡を命じた司令官はもういない。彼らは中東のパレスチナ難民にも似て、いまも空（くう）をさまよっているのである。

吹上谷ロマン

父島を北上する都道が橋でまたぐ溪谷がある。これが吹上谷（ふきあげだに）である。私は、ヘンリーさんに教えられたこの谷を見下ろす位置にいた。

眼下には波の碎ける岩だらけの浜が見えていた。海はいずれにいても私に寄り添うようになってくるのが島の特徴である。

今日は沖の水平線はかすんで、空に溶け込んでいた。視界がよいと鯨のプロウ（しおふき）も見られるが、今日はイルカ一匹見えなかった。

谷は、モクマオウ というヒノキのような針葉樹が高山のクロフのように集まって、なにか魔物のように潮風に揺れていた。

海岸べりまでおりようと踏み込んでみると、獣道（けものみち）らしい路が雑草に覆われたまま続いていた。

やがて右カーブのあたりに、いつもの壕の臭いの地形に遭遇した。壕がいかなる状況で作られたか

は、取り付け口の竹（たたず）まいでほほ分るのである。

ここにも壕があつた。

突然、下のほうからこの道を上がつてくる人に気がついた。この観光の島は、至るところに内地からの観光客が、美景や、特異な風景、天然記念物の動植物をハントして、どこへでもめぐりこむのである。

それはこの島の住民としては好ましいことであり、この島を愛でるお人はどなたでもウエルカムである。

それは女性であつた。地味なパンツでタータンチェックの半そでという、内地の客の、自然もぐりこみの標準スタイルであつた。

「こんにちは。浜に珍しいものはありましたか。」

尋ねると、女性は破顔したが無言だつた。

「きれいなところですね。」

「お一人でおいですか。」

尋ねると、やはり女性は破顔したが無言だつたが、車への便乗を頼まれることになった。

「お帰りに、街までのせてくれますか。」

ここから、船着場まで5kmはある。今日は入港日だから客が大挙して下船する日である。到着便は3日後にかえり船となり、ほとんどの客は内地へ帰って行くのである。

そして次便は1週間後にまた次の客を乗せて入港するというパターンである。

島民にとつては、1週間から10日の間は待ち遠しい次の入港日である。この貨客船は新鮮野菜や乳製品、魚、そして7日おくれのたよりや新聞を積んでくる。

その2時間後に連絡船が母島へ出航するが、この2時間に荷役がフル稼働で行なわれ、母島行のコンテナ荷をクレーンとフォークで、ほぼ100m先の岸壁に停泊するは しま丸 に積み込むのである。

件(くだん)の女性を船客待合所の前でおろし、私は入船で混雑する前に正面2階にあるレストランで昼を摂った。

やがて展望レストランから湾外に、黒い煙を直上にたてた微速の定期船の影がみえ、ぐんぐん接近してきた。

湾の中間点で長い汽笛を島中に響かせて入港を知らせ、湾内をぐるりと360度回転するようにまわって、入湾して来た方向に船首をむけて停船した。後はクライサーで横滑り接岸するのである。

すでに乗客は、大荷を抱えて下船の順番待ちをしていた。

宿の看板のプラカードを掲げた出迎え人が並び、個人の出迎え人は日陰で接岸を待っている風景だった。ふと見ると、先ほどの女も客待ちをしているようだった。

何の客待ちであろうか。

その三日後東京への出船のとき、私は再びこの女を見た。連れの男を見送りに来たようであったが

男は見えなかった。

その後またびたび見かけた女であったが、面識はあったものの住まいも分らず会話を交わすこともなく、実に不思議な女であった。

あるとき私は再び吹上谷を訪れた。以前来たときには、例の女の依頼で、その女を街まで送らねばならず、この谷の壕か洞かの探索ができなかったのであった。

今日は、この谷には誰も入っていないようだった。

バンジロウという実のなる木が野鳥を誘っていた。十数メートルで波打ち際へ到達する位置に、地形上、壕の存在が予想される兆候の場所があった。

近つくと案の定ぼっかりと壕の入り口が見えた。背丈もあるおおきなもので、元は海食洞であろうと推測できた。

ちよつと踏み込んでみると、なんとなく人の気配を感じ、私はそのまま立ち止まった。

それは女の吐息かため息のようだったし、女のよがり声にも聞こえ、波を刻む浜の音とともに断続して聞こえてくるのだった。

私は、一旦外へ出て、浜辺へ降りた。アベックが場所をわきまえず壕で乳繰り合いをしているのが予想されたからである。

沖の水平線は曇り空に溶け込んで、はつきりしない天気だったがよせる波は穏やかだった。

ヘンリーさんが言ったのは、あの壕のことだろうか。私は、振り返って海岸べりにそそり立つ崖線

に沿った崖を左右に見た。

吹上谷から落ちる川筋は、戦時以前に従軍慰安婦がいたところ、つまり慰安所が並んでいたとい
う。

片や海軍の海軍クラブ、此方陸軍の陸軍クラブ、ほかに州崎吉原、兵士ホームなどが店を張っていたのである。

州崎と言うのは、現東京都江東区の州崎遊郭を模したもので、吉原は言うまでもなく江戸のメインの遊郭である。

しかし、サイパンと硫黄島からの空爆が頻発した昭和19年から昭和20年、民間人はすべて父島から内地へ強制的に疎開させられた。そのとき、慰安婦も一緒に引き揚げたはずである。

さて、件（くだん）の壕は人気（ひとけ）があつたので遠慮したが、いくら待っても誰も出てくる気配はなかつた。

意を決して戻ってみることにして立ち上がった私は、浜のわきにモーターボートがないのであるの
に気がついた。

浜辺に人気はなかつたはずであるのにと不思議だつた。

やがて、笑いながら男女が姿をあらわした。二人はじゃれるようなしぐさで坂を下り、浜に続く平坦なところで手を振って別れた。

男は、そのままモーターボートのほうへ歩いていった。チラッと見たその顔は、驚くべきものだっ

た。それはあのエーレーだったのである。

隠された黒い顔とその姿は硫黄島のサルもどきの様装であつた。一方の女はどうみてもあのとき私
が声をかけ、街まで送つたあの女だつた。

振り返ると男のモーターボートは、すでに波間に消えていた。

私は、帰りしな吹上谷を上つていく途中、壕をもう一度のぞいて見た。そこには、さきほどはな
かつたハイビスの花が置かれていただけだつた。

私は、この世に未練を残して死んだ霊が、再来するような超常現象は、芝居の世界でのことで、
「怪談千鳥が淵」とか「牡丹灯籠」とかで演じられているだけだと思ひ込んでいた。

たとえば「怪談牡丹灯籠（ぼたんどうろう）」は、萩原新三郎という男と幽霊お露の恋物語であ
る。

これは中国明代の奇談の、剪燈新話（せんとうしんわ）を源にした輸入怪談であるが、内容は和製
である。

カランコロンの下駄の足音をたてて深夜に、お露が新三郎を訪ねてくるところが象徴的に語られて
いる。

話は、生存中の萩原新三郎は、幽霊の美女お露とひと時の逢瀬を過ごすのであるが、それを垣間見
た人がいた。それは明治25年のことで、見たのは戯作者（げさくしゃ＝作家）の河竹新七であつ
た。

萩原新三郎は、愛おしいお露を狂おしく抱き、究極の愛を交わすのであった。

そして、戯作者（作家）の河竹新七が垣間見た、男が愛おしく抱いて愛を交わしていた相手の美女のお露は、上からかぶさる男に下から絡みつく骸骨（がいこつ）に見えたのであった。そしてその骸骨は、男との接点を中心に紅さし赤く上気していた。

そして漏れ出（いで）るよがり声を現世までひきずって、今あなたを求めているのである。

また、「怪談千鳥が淵」では、親の反対で心中に至った二人だったが、呉服屋の手代美之助のほろだけ生き残ってしまった。美之助はその後べつ女と懇意になった。しかし先に黄泉へ行った伏見種木町の遊女の薄雪太夫は、未を契ったその愛をあの世から迫り来るのであった。

雪がしんしんとふる夜、薄雪太夫に導かれ、千鳥が淵へ誘われるように入水する美之助の背にはボタン雪が容赦なく降りかかり、美之助の顔は穏やかであった。

恋は女の命である。たとえ黄泉にあつても、愛のためなら自らの骨をさらすのも厭（いと）わないのが女心である。

むかし「1年（ひととせ）のお俊」という娼婦がいた。長めの着物に頬かぶり、その片端を口にくわえた妙齢の女であつたという。

彼女はごさを抱えて、柳原の土手を場に稼いでいた。けっこうなじみの客もいたようで人気だつた。

当時1杯の蕎麦代が16文（500円）だったが、このヨタカ（娼婦）がチヨイの間（ま）で24

文程度であった。チヨイの間というのは一人5分という頻度である。

お後はこまめにせつせとこれを行ない、一夜で50万円くらい稼いだという。

とった客は一夜300人というが、計算はあわない。一人2分でも無理である。

比較されるのは、戦後進駐軍による日本女性へのレイプ事件が頻発したとき、あわてた政府の主導で日本女性の貞操を守る政策が施行され、進駐軍慰安婦が募集された。

国家としては情けない政策だったが、慰安婦は当時のドル高のレートも影響して実入りは良く、大森海岸の小町園の慰安所では、月収が300万円にのぼる稼ぎの人もみられた。この女は、日に50人もの客を取っていたという。

このような娼婆世界を、かの有名な一休禅師は次のように喝破した。

元来有口更無言　百億毛頭擁丸痕　一切衆生迷途所　十万諸仏出身門

(迷うもよし、悟るもよきかな。)

お接(め)交(こ)はエレーもさることながら、万人の迷いの根源であり、また悟りでもある。

さて、私が吹上谷で遇った件(くだん)の女は、あの海食洞で、いまもなお従軍慰安の業(なりわい)を続けているのであろうか。

その日、小笠原諸島の地上約300メートルを、まぶしく黄色い光を放ちながら飛ぶ謎の物体が出

現した。

物体は音もなく移動し、一時は港の岸壁エリア上空にまで接近したことから、急きよ出航予定の定期船は欠航となり、乗客には「謎の物体が出現のため」と理由が説明された。港に着岸予定だった母島発の便は、物体が姿を消すまで港内を巡航して待機した。

日に1便の硫黄島と内地を結ぶ軍用機も発着を見合わせ、父島への救急飛行艇も飛べなかった。物体は数時間港や島内付近を移動し、やがて雲間に消えた。

薄暮になって自衛隊が硫黄島から発進したヘリコプターで調査したが、この物体の手掛かりはつかぬ、上空からは父島漁港の探照灯だけがいつも輝いて見えた。

玉砕から60年、いまだ成仏できないエーレーは、旅人をひき止めては怨嗟を語り、夢のなかで戦闘を継続し、逃亡兵を追跡し、従軍慰安所でひと時の慰安に心を和ませる空（くう）の世界にとどまっていたのである。おそらくこれからも、この小笠原諸島でエーレーは迷いつつ虚空をさまよい続けていくのであろう。

小笠原諸島と硫黄島火山列島でエーレーのみなさんと接した私は、エーレーが時空をこえて己が運命の救いを求めて、誰かを訪ね、語り、訴えている姿をみていたく感じるものがあつた。

彼らは、虚空を100年も200年も行くあてのない旅路をさまよい続けなければならぬのである。私は、これは人類が犯した罪であり、その犯人こそ糾弾されるべきと改めて思ったのである。

名指ししてもよいが、その犯人の系譜はいまも皆さんの近傍にいるのである。了

光
る
か
ぜ



風
光
る
郷

石井ひかる

石井ひかる は19歳だった。子供のころ、よく故郷の信州のおじさんたちが、

「赤線がなくなつたで、男は無駄な努力をせにゃあならんのお。」

など愚痴つてているのを聞いたが、子供の石井には、おじさんたちの切実さが分かる歳ではなかつた。

いま思えばおじさんたちは、赤線廃止で手軽にお接(め)交(こ)ができないので、素人の女を口説く無駄な手間を課せられると愚痴を語り合つたのであろう。

石井もいまは同感であつた。「情」の都度、いちいち女の気を引く甘言を弄して、何割かの可能性をあてに女の愛を求めると、実に面倒なことに思えた。

諏訪に、

「かわかわするな。」

という、よく親が子を叱る言葉がある。

「渴(かわ)く」転じて、「腹がへつても、食物をむやみにあさるな。」と言うことであらうか。

あらゆる人間の慾は、手軽に満足されるものではないし、良俗にかなう範囲で自らの振る舞いをこなすべきという基礎的なしつけの言である。それはおじさんたちのあのような下世話な悩みへの制限

にも通じる原点であった。

石井がときどき悔やむのは、自分が育つ所与の環境が他人（ひと）並みなものであれば、少なくともいづれかの大学で学べたし、自分のことだけにかまけていればよい境遇であったはずであったということである。

よく、「前世の因縁がたたる」などということを知ることが、自分に前世はないのだから、前世とは親の代のことであり、祖父の時代が前々世であろう。

裕福な家では、親が子の欲求を先取りして、適時潤沢に物（もの）を買い与えるので、子のほうは、改めてこれといってほしがらぬものもない。

高校卒業にいたるまでも、石井は、要らざる行為で周囲に眉をひそませることがたびたびあった。

その一つは、その物欲と浪費ぐせであった。ほしいものがあると、親の金でもとってひそかに買う癖があった。

親がいつ気つくかの様子見をする罪悪感が襲ういたたまれない焦燥感をかかえながら、街まで自転車で遠出したりして一時的な放浪に身をさらした。

根底には、何とかなるだろうという気持があり、それは「罪」を畏れる気持ちも飲み込むし、他人も看過してくれるはずという自分だけで融通のきく見込みの範囲に身を置く、いわば「甘え」心であった。

これは石井の生まれ持った豊富な浪費心の欲望に対し、それを満たせない貧困家庭という周辺ギヤップうんだ思いがけない悲哀であつたともいえる。

石井には、よくもあしくも理想が現実と著しくそぐわず、倫理までも飛び越えることをもつて心を満たそうとする生まれもつたその性格がいづれへも作用していた。

いいかえれば、収まる器をもたない欲求不満が将来にわたつて自身ばかりでなく、身内や、周りをも困らせる要因になつていくのであつた。

このもつて生まれた浪費ぐせなどのカテゴリーを、宗教では「原罪」というのかもしれない。

節度をわきまえ得る人徳の源泉は、年齢によるものではない。人間の資質と、生れ落ちた場所での環境であろう。

「三つ子の魂百まで」ということわざは、それが人間の「絶望」を象徴したものであることは、自身が百歳になつたとき初めて分かるだろう。

石井は、いづれかからその「原罪」を受け継いで生まれて来てしまつたのであつた。

高校を出ると、石井は、昼間アルバイトで稼ぎ、夜間は大学へ通うことにして東京へ出たのである。

すでに20歳になつた今、石井は、このよるべない、風をつかむような生活に満足していなかつたが、すでにサイは投げられ、後戻りはできなかつた。いまさらそれをグチつても始まらない。やるし

かないと思ったのである。

幸い、信州諏訪の寒風にさらされて育った20年間の生活は、石井に自然環境への不屈な体力だけは醸成してくれていた。

職というならば、1954年の小学校の4年生のときから地域新聞の配達員で、月に800円を稼いでいた。

そのころは朝鮮戦争特需が一段落して、日本経済が次の高度成長期を狙っている上向きの時期だったが、失対（国の失業対策労務）の道路作業の出面（ですら日当）は254円で、転じてこれらの労務者を「こよん」と呼んだころのことであった。

石井は高校時代もホンダカブを無免許運転して新聞の横断配布をやった。これらアルバイトを通じて失対労務者あがりのおじさんたちとの付き合いも経験したのである。

この世界の大人たちは、おしなべてスケベな猥談だけで時間の合間を過ごしていた。おじさんたちには、女の話のほかに話題もないようだった。

石井は、都会に出ても金がなければ、悩むより先に体力にまかせて本職のほかにアルバイトを探した。

金のためなら3Kでも何でもやろうという気力は自然に湧いたし、改めて気持ち奮い立たせる努力なしで、殺風景な油くさい工場でもいずれ的环境下でも同化して前向きに動けた。

理屈にはしらず、まず足が出る心根は信州諏訪っ子が持つ地域くせ、すなわち天与の諏訪っ子の特

性の才であろうと自分でも思ったものである。

しかし、その猪突猛進も報われることはなかった。いくら身を粉にして前進してもはじかれ、おし戻される現実には石井の若い意気は消沈した。

石井が窮する都度目に浮かぶのは、あのころにこよんのおじさんやおばさんたちの煤けたいくつかの顔だった。

その顔は、いくら逆立ちしても届かない世界がある現実を如実に伝えるものだった。世の中は、そういうものだ。という諦観と達観がそこにはあった。

おじさんたちは、車のタイヤは黒色に決まっている。赤いタイヤや黄色いタイヤがあってもおかしくないが、タイヤとは、そういうものだ。だと思いつくことが幸せの早道だと無言で語っていた。

ともかく、石井ひかるは、高卒後の社会へのスタートを切った。しかし、その中身はよるべないもので、心では右往左往しつつ、すわりのいい場所を探すような不定形のものたりないものではあつた。

そして明日が見えない不透明な先行きは、石井にさらなるがむしやらの、そして無駄な足掻（あが）きを強いていた。

東大卒

この無定形な生活を、信州諏訪の親たちは心もとなく思っていた。よりどころの夜学への通学も、本人には不満足でとらえどころのない無駄な時間になってしまっているようである。

見かねた父母は、

「どっちつかずの生活に切りをつけ、この際正式な就職をしたほうがオメーの身のためだぜ。」

と、諏訪の父母は、諏訪へ戻って仕切りなおしをするよう勧めるのだった。

石井は、いまさらおめおめと諏訪へ戻る気にはならず、翌年、石井は、公園のゴミ箱に捨てられていた東京新聞の、三面広告にあった公務員募集に応募したのである。

この公務員試験は当然ながらパスし、石井は次善の策として国家公務員の道を歩くことになった。高卒程度というその公務員試験により、自分の無限の可能性が消えて高卒というハッキリしたランクに身をおいたのである。しかもスタートで2年遅れの人生の周回遅れのプザマをさらすことになるような区切りであった。

これで2年間の人生を無駄にしたという結果が出てしまった。石井は、諏訪の父母の忠告を重ね合わせて忸怩たる思いで一杯だった。

「もう今後は1年たりとも無駄にできない。」

石井は、自分が今よって立っている時空の現実を、いやがうえにも思い知らされた。

その公務員試験は、中学、高校を秀才といわれて過ごした石井としては安易なもので、自分では、パスするのが当たり前だと思っただし、合格自体に何の感慨もなかった。そこに「合格」と書いた現金

入りの財布が落ちていても。脇のドブへ蹴つ飛ばして捨てたであらう。

数カ月後、仰々しい入省式で辞令をもらった。同時に提出した宣誓にかわる誓約書では、

「日本国憲法をまもり、職務に専念することを誓約します。」

との文面にサインさせられた。

石井の配属された通産省官房は、多数が東大卒のキャリアと呼ばれる人種が中心となって仕事を進めていた。

しかし東大卒が、百人集まっても、学歴で仕事が進むわけではない。その数倍の私学や高校卒のスタッフに依存する事務が山ほどある。

新任式は、いまだ冷たい風が吹いていたが、省まえの並木の桜は、幼児、小学校の入学式でみたそれと変わらず爛漫であった。脇の黄色の連翹（れんぎょう）も、桜に対比して栄え、空の色ともマッチしていた。

石井に与えられたポストは、統計事務のセクションであった。政府の行政の全般にかかる主要な統計は、総務省の統計局が所管するが、各省の事務事業にかかる統計は各省で行う。

石井は、「こうぎょうとうけいか」へ配属された。挨拶に行った先では、課長が辞令をみて、

「きみイ。君の行く場所は、ここじゃあないよ。ここは、え、こうぎょうだよ。」

と、気の毒そうに、また、あきれたように辞令を返した。

「え、こうぎょうですか。」

後で分かったことは、「え」というのは、カタカナの「エ（え）」のことで、工業と鉱業を区別するために、カタカナの「エ」と工業の「工」が同形だから、省内というか、それぞれの業界が「工業」と称して、同音異語の工業と鉱業を区別したのであった。

石井が、発令された先は、鉱業統計課であったのだ。

統計事務の仕事は、細かい数字をいじくるもので、高校で数学が好きだった石井には適職だった。

あの時、無意味だと思っていた微積分や二次関数が常時活用できたのである。鉱業統計課の職員は選ばれた国家公務員だけあって、多士済々（優れた人材多数）であった。

安月給の公務員だったが、始業終業の時刻は一定し、「休まず遅れず」働く勤務は、人生の初仕事としては「ならし」としてもやさしいものだった。

石井の生来の、怠惰、依存心、楽観、を許容してくれそうな職場であった。

まよい

仕事にもなれた半年後、石井は、女に迷った。石井は高校半ばの2年生のころ、中学校の同級だった娘に淡い思いを抱いたことがある。

その後高校では、不純な異性関係を「成果」のように吹聴する悪友もおり、石井も徐々に性に目覚

めていった。

悪友の言動に触発され、石井は元中学の同級の娘に同様の行為を試したりした。また、卒業年には、歳下の高校生とわりない仲になったこともある。いずれの娘（こ）も、初めての恋に陶醉したようであった。

悪友たちが行なった女への行為は、恋や愛ではなく、単なる男の「いたすら」だった。

しかし石井がそれもどきで行った行為は、石井の身についた「仁愛」が、作為に伴っていたという点で違いがある。

石井は、本質的に「あそび」ができない性質（たち）だった。彼女たちには、石井への心の陶醉があったのである。ならばこそ娘たちもその苦痛をこらえたし、再度の逢瀬にも応じたのである。

石井が生来受けてきたあの原罪は、貧困家庭に不相応な過大な物欲だったが、育まれた十数年間の現実、ことごとくそれを叩きつぶされた失意の原罪であった。その原罪の裏に、一方でその後育まれた新たな石井の人格はこの仁愛に根ざすものであった。

彼女は、

「石井さん、やりたいんでしょ。」

と、身を投げ出す健気（けなげ）さだった。

それは諏訪湖へ注ぐ川の河原で月見草がゆれ、二人の姿を隠す宵のことだった。そして二人を包むように流れる風は光っていた。

これらの秘めごとは、相手が受容しなければ成立し難いものであるが、この二人とも、さして嫌がらずに成立した。

それは健気（けなげ）な半咲きの、月に向かって開く宵の夢のような月見草だった。

この二人は当時高校生だったが、その一人は長じて社会人になると、早い目覚めが後押しして水商売の道を歩くことになった。卒業後数回東京で逢ったが関係が復することはなく消えた。次に逢ったのは20年後であつた。

もう一人は早くから海外生活に興味を持ち、ベトナム戦争帰りの兵士のジョージと結婚した。石井にも結婚式への招待状が届けられた。

それ以前には石井と数回の逢瀬を重ねたが、彼女は石井の職の「公務員」をダサイと嫌い、自ら外へ雄飛する道を選択して消えていった。次に逢ったのはやはり20年後であつた。

二人とも自らの意に沿って選んだ道を羽ばたき、今日よりも明日に賭けて、光るかぜとともにそれぞれの青春に散華していった。

石井は、所与の目前の利以外は信じたくなかつた。明日のことには夢を抱かない主義である。信州諏訪の母のモットーは、

「見ねえ（見ない） 100より、見た50」

という、「明日の予定で提示されている100円より、今、目前にある確実な50円に手をたせ。」という現実主義だったことに影響されたのであろう。

異性という新しい分野の人間関係は、石井の女性観を、女友だちを心のふれあいだけでみるレベルから、もつと行動的な相互関係という認識にレベルアップした。

その後石井は東京の地で職を得てからも諏訪にいる二人の女性の、月見草咲く河原に立ち待つ姿を思い出しては胸騒ぐのであった。

石井が昨日、事務連絡中に知り合った省内の同歳の女性との逢瀬は、女性のほうからの誘いだっ
た。

この女性は、石井を自分の愛のエリアにひっぱり込み、自分の心そのままに説教型の愛をくどくど語る性格だった。将来世話女房になる女であろう。

この女は、喫茶店でチョコレートパフェを食べながら、横並びにいる石井の前を握りながら愛と説教とをささやくのだった。

このころには石井は、マージャンの盲パイのように、女性のそこに手を入れて触手だけでその形とありようが分ったし、彼女の好む触れ方も分ってきた。

しかし石井は握られた自分の前部分の甘美さに甘んじ、この女にかしづくことはなかった。

数回の交際は、そのチョコレートパフェの繰り返しだったし、親がするようなこの女の説教は、道徳のテキストさながらで、石井はうなづくこともなかった。

後、女性は、石井を出世の見込みが薄い男と判断したのであろう。この関係は数ヶ月で解消し、な

にもないことになった。それまで乳繰り合いのじゃれあいには伴ったが、それ以上のことはなかった。普通、女性側が求めるものと男が求めるものとは、多くは違う趣向であり、双方のギャップを埋める努力がなければ、アンマッチのエラーとなるのは当然である。

受け手に回った石井が、優柔不断であったことと、石井の生来の物欲という原罪がまだ仁愛に昇華せず、生煮えの慾だけで愛の共有に欠けたまま進行する仲は限界がすぐに訪れるのであった。すなわち端的に言えば、性格の不一致による接点の見出せない相互不信である。

背景には無節操に「ほれやすい」石井自身の欠点があることは、本人も自覚のうちではあった。

石井は、耐えるのがつらくなると街へ出た。その夜、新宿の空には月はなく空は真っ黒だった。歓楽街のネオンや照明が強烈で、その反対側にある木や空や空気は真っ黒に見えていたのだった。

ここは故郷の人々が安住する信州諏訪の風景ではない異次元の空間で、どこかに怪物が住んでいるような錯覚を覚える異様な世界にみえた。

石井は酔い覚めに雑踏のなか、さまざまな飲食などの店をながめながら駅への道を逍遙していた街の質が違うせいか、八百屋、魚屋はなく、ほとんどが飲食店である。

サンドイッチマンが、

「旦那、警察の人か。」

と、真面目に聞いた。役所帰りの背広ネクタイで歩く姿は、街の風情にそぐわなかったらしい。石

井が、違うというよ。

「遊んでいらないか。いや、わるいあそびじゃないよ。れっきとした真面目な女子高校生だよ。紹介するだけだよ。あとは、本人同士で話してくれ。」

この男は、右上の喫茶店を示した。指示されたとおりにカウンターでマリといってボックスに掛けた。ラテンのタブーが流れて室内の観葉植物の葉のそこだけがエアコンの風で揺れている、変哲のない喫茶店だった。

すぐに女が注文を取って戻っていった。

「こんばんわ。」

と、脇に立つて笑んだのはセーラー服姿の女子高校生だった。

「まりです。ご一緒していいですか。」

女は、石井の前に掛けたが、別にスレた女でもなく、「単なる」と言う表現が適当な悪びれた様子もない娘だった。

「オレは、石井だが、この店はどういうシステムになっているんだ。」

「石井さんは、何をしたいですか。お話、お食事、お散歩、カラオケとかダンスのお相手程度ですか。」

女は、客の程度を計っているようだった。

「仰向けになって。胸出せ。」

と、笑いながら話しを引つ掛けてみたが、女は、

「酒だせ。ツマミだせ。じゃないの。」

と、まぜつ返す余裕を持つていた。さらに、

「胸なし、ケツでかいぞ。」

と言うと、女は、

「私のパンツを見たい？。ウサギの刺繍よ。」

と、実に低劣、稚拙な会話へ進んでいった。

「パンツに興味はないよ。だけど、小学生じゃあるまいしウサギのパンツはないだろう。」

後の世に「JKお散歩」とか、「援助交際」で、社会的に眉をひそめさせたのはこの歳の女子高校生であつた。

未成熟ではあるが女という性の少女のうち、きつかけを持ったコたちが、小使い銭ほしさと、未知への魅力を臆せず求め、一方でメディアがおおる流行の風潮が、罪悪感を消し去ったところに生ずる社会現象の一つである。

「流行」は、個性や羞恥心を消し去る。昭和34年ごろ、皇太子とみちこひでんかの婚儀の前後のこと、若い女は、使いもしないテニスラケットをぶら下げて歩くのが流行（はや）つたのもこの類であつた。

このコたちは衣装などへの物欲を満足させる目的で、手っ取り早く小使いを得たいのである。ま

た、女は本来みんな潜在的に男をとり扱う才能が備わっている。

これらの現象は、世にとっては好ましくないからざる現象だが、女の本来で裏に備わったそれらの手管を引き出し、流行を背景に場をあたえてコミッションを巻き上げようとする、したたかな商売人に乗せられ、またはそれに乗った巷の最新の裏街道である。

「石井さんは、うさぎのパンツより、すけすけパンツのほうがいいの。？」

「お前ナ、よく言うよ。親の顔が見たいな。」

「お兄さん、お金ある？。」

「援助か。ま。魚心、水心だな。」

石井は、面白そうなコだと思った。

「しばらく一緒にいてくれよ。話を聞かせてくれ。」

「上に、同伴席があります。どうぞ。」

女は、石井を3階席に誘導した。そこは二人横掛けのソファアードで、飛行機の座席のようにすべての座席が同方向に向けて並んだ席だった。

「東京には、いつ地震が来るか分からない。非常口はどこだ。」

「非常口のことから真つ先に言われたのは初めてだわ。」

とり留めのないダベリだった。石井は、横から女の肩から腰に腕をまわしていた。

女は、話上手だった。すこしうち解けると、女は石井の前をまさぐって握り上下に動かした。

「イキそつだよ。」

「ねえ、どこへ行くの。」

と、とぼける女だった。

「地震に備えて非常食のビールとツマミが必要だな。ところで、今夜はできるか。」

「おあいにくさま。生理です。」

女は、クスリと笑った。女は、石井に名刺をわたし、

「来週ご希望かなえます。マリのところへ来てください。お待ちします。石井さんは、私このみだわ。」

と、今度は強めに石井の前を握った。

夫婦の才覚

数年後、石井は、伴侶を得た。なぜか気恥ずかしかったので、結婚したことを職場には伏せていたが、出産にあたって健康保険に被扶養者登録をせねばならず、遅ればせながら自分の婚姻を公にした。所属の課長は、

「石井君、なんといつても奥さんが一番安あがりですよ。いいことです。」

と、意味不明の祝辞を述べた。

それを遡る半年前、すでに妻は妊娠していたので、妻は勤めを辞めたのであった。家計維持が石井ひとりの肩にかかったこともあり、式とお披露目は経済面を考え内々で行った。

突然通知された在東京の身内は、石井の若すぎる歳を慮（おもんばか）って、とまどった様子だったが、みんな大人（おとな）の親戚つき合いで協力してくれた。

石井は、これで信州のころの女たちも、上京してから中途半端につき合ってきた女友達もすべて、ひとかたまりにどこかへ飛び去ってしまったと感じた。

妻は、田舎出のこれといってとりえない女だった。

馴れ初めは、比較的スムーズに男女の情を通じ、その結果お互いに負担の少ない同棲の道をたどることになったことから始まった。そして、手軽な愛のやり取りは、当然ながら妊娠という思いがけない事態に至ったのであった。

子ができると、夫婦は単なる男女関係を超えて、社会性を持つことになる。

このときまず夫婦に求められるのは、子の地位の安定である。石井の妻は、3年の間に2人の娘を出産した。

子の地位の保全のためには、婚姻という手段が必須である。石井もそれにならなかったので、最初の妊娠後すぐに挙式したというのが真相であった。次に、妻に求められるのが、世渡りの才覚である。

石井の妻は、この分野では最低であった。すぐに分かったことは、「かたつかない女」という素顔（すっぴん）であった。

いたずら盛りの子2人が絡んだ、そう広くもない家内は、全体がおもちゃ箱のようで、足の踏み場もない。

しかし石井は子をかわけなかった。胸をやさしくたたきながら寝付かせるくせが慣れとなり、すこし大きくなると、自分の手で胸をたたくようにして寝るしぐさもあった。

母親といえ、日々の清掃も行き届かず、それらのごみの上に翌日もまた同様ののごみの重なりが続くと、ごみの上に布団を敷いて寝るような状況になる。

これが続くと家族の心は乱れ、生活も絶望を感じる域に至るのである。子供も、遊びに行った先の家と自分の家の様子が違うという奇異なものを感じはじめたようであった。

「サリちゃんの家は、ゴミがない。」

などと評価するようになると、親は、困ったことだと感じるものだが、女房は、カエルの顔にしよんべん同様で、気にもしないのである。

果ては、子のランドセルやかばんは埋没し、持ち上げた新聞の下から、バナナの皮が出てきたりという、笑えないはなしだが、家はゴミの収集所の態となっていくのであった。

困るのは、学校のPTA電話連絡網などの大切な資料までいずれかに紛れ、電話連絡網で連絡を受けても、次がいずれか不明でまわせないなど社会的、対外的孤立に陥（おちい）ることである。

健康保険証はいつのまにか紛失し、妻は何度も平気で再交付を要求するが、役所の担当者は再発行がたび重なると、奇異な目で石井を見るのであった。

石井の初期の失敗は、やはり石井生来の怠惰、依存心、樂觀、の集積が原因であり、妻選びにもそれが影響したのである。

「女」はすべて同じだ。という益体（やくたい）もない達観論が、倒錯した安易な道を選択し結婚自体が逃げ場となった。

確かに、女の形はおしなべて同じであろう。しかし、個々人の人格の違いを検討すべきである。石井は最初の選択を、過去の自身の人生の運びと同様に、怠惰、依存心、樂觀、の克服ができない幼稚なままで、実行してしまつたのである。

夫婦二人だけの生活ならまだしも、子二人を交えた家庭では、新婚時代の「愛の巢」などという感傷の時代を超え、普通は、主婦たるもの家事にてんてこ舞いで、目の回るような日々を過ごすことになるはずである。

妻の側では、それをこなすため、家事にメリハリをつける工夫がいるし、子を自立させるしつけとか、近所付き合いも如才なくかわすなどの機転が必要である。そして、その自覚や才覚は、婚前に受けた生活への訓練や、親からの教育の蓄積のできるものあろう。

だから、「子をみれば親が分かる」とか、「親の顔が見たい」などという評価もどきの言葉が飛び交い、子の出自の参考になるのである。

少なくとも妻たるものは、家庭を任せられる才覚は必須である。昼間から、ごみだらけの畳の上の布団で昼寝をしているようでは主婦は勤まらない。

石井は、妻の怠惰な家庭経営に不満をもっていた。

結婚式などの儀式は曲がりなりにも行なつてけじめをつけたが、その後の妻のありようは尋常ではない。外部から忠告にも素直な反応がなく、逆に

「あなたの協力がなから、できない。」

など、問題を相手に転化する逃げを打つような態度は、石井には容認できないものだった。

言いたくはないが、信州諏訪の母がよく言っていた「おひきずり」である。家事に無能で、「のろま」、「ずくなし（＝ものぐさ）」、万年床、と並べればきりがない「やくたたず」の妻であつた。

20歳代の前半の若者は、一応は一人前といわれるが、社会への適応の訓練もまた未熟で不安定であり、けじめのつかない時代である。

男女関係から、同棲になだれ込んだ後にも、双方に、怠惰、逃避、楽観、など心のゆき届かない幼稚さが残っている。

この同棲から本格的な「結婚」への移行には、人生の仕切りなおしとして清算すべき課題がある。つまり、同棲から婚姻に進むその時点では、改めて伴侶としての適否の判断が求められる。

しかし、突然の予期せぬ妊娠などが発生すれば、二人はパニックに陥つて、方途を失う方向音痴になつてしまうのである。

やむを得ず「エイツ」とばかり、そのまま結婚に突き進むと、とりあえずは安住できるものの、いずれ手痛い困難、たとえば生活苦などに陥り苦勞することになる。

無謀の自覚がない無謀運転をしているようなもので、なにかの偶然でうまく事故を起こさずに通り抜けたような運転をしている状態に近い。

夫の石井は職を得てから数年間社会にモマレ、社会への感度が磨かれたが一方の妻のほうは夫から託された家庭を、気持ちの進歩もなく怠惰に経営した結果、二人の間のギャップが広がってしまったのだ。この夫婦は、片方が、桜が狂い咲くように季節感まで違う夫婦になってしまったのであった。

聖子ひとり

石井は、家庭内の、「片つかない混乱」を憂いつつ日常をこなしていたが、汚れきった、ごみ置き場のような家には、帰宅も躊躇する気分であった。

そんな気分のあるときは、高校生の聖子と懇意になった。それは、石井が一時帰省で信州諏訪へ行った帰りの汽車だった。隣あわせの座席にいた娘と知り合ったのである。

伊那の娘だったが、両親とともに東京で生活していた。

父親は、東京で理容業を永く行なったが、数年前伊那の故郷へ帰ったという。

母子だけ東京に残されたが、母は看護婦だったから生計に支障はなかった。それは聖子が中学生のときだった。聖子は、看護婦の母の昼夜分かたぬ勤務ローテーションに翻弄され、よるべない日々を送ったのである。

女子中学生が、孤りで母の帰りを待つ寂しい日々であった。それも成長とともに心たくましくなり、母に代わって家事をこなすほどになっていった。

石井との出会いはテニスクラブだった。若くて運動の神経も鋭く、石井はたじたじだった。しばらくの喫茶店つきあいから、留守の自宅での交流に進んだのであった。

喫茶店での付き合いは、定番の触れ合いからだ。夏の薄手の下着は直で手のひらが入った。薄い影のようなぶ毛が感じられるやわらかい付近から芽を指で挟むしぐさに、聖子は拒むことなく右の膝はすこしずつ離れ、初めての陶酔に浸った。

「いいきもちだなあ。」

と、お世辞ではない言葉が出た。すでに二人の接点は近づいていたが、きちんとしたセッティングに至ったとき、テニスの審判員がコールをかけるような声で、「いたい、いたい。」と叫んだ。終わった後、トイレへいったが、

「中へ入れたんでしょ。冷たいからみたら出血よ。」

と、言い、

「これは、おめでないことなの？、女になったんでしょ。」

と、予想もしない言葉だった。

聞けば初潮のとき、何も分からない聖子に、それと気がついた母親がめでたと言った記憶からのセリフであったようである。

その後石井は、聖子の成人式のころまでそのようなつき合いを続けた。聖子は、前後に必ず洗面所へ石井を招き、手洗いを督促したが、看護婦の母がしつけた清潔の習慣であろう。

あるとき石井に聖子の中の、うっかり半呼吸のアンコントロールの暴走があり、すこし中へ漏れてしまったらしく聖子は妊娠した。

内緒で病院へいかせ、確認して墮したが直後産熱がでて聖子は動けなくなった。

聖子は結婚後の出産時に、このときの初産オペがあまり良くなかったと医師に言われたそうである。その後遺があつたようだが、それでも2人の子に恵まれたということである。

石井との離別のきっかけはその母が、かねて予定していた信州伊那への帰郷を決心したときである。母娘はすでに先行して帰郷していた父親を追うかたちで、東京を去ることになったのである。新居を構え故郷に錦をかざるものであつた

帰郷話が出る前のころ、母親も迷いのなかで、娘の恋人の石井に託す気持ちもあつてか、母親は、「私としては、このまま医大の看護婦を全うしたいが、主人の嫁の立場もあります。意地を張って帰郷しなければ、主人ともども故郷でなんと行われるか。」

と、もどかしい思いをしたのであつた。

それは聖子の誕生日母親が、信州の家郷食を石井に振舞つて懇談したときのことだつた。

後に聞くと、帰郷後母親は、信州で看護婦職で求職し地域差で安月給だつたが、伊那の病院で永く勤め、知事からも功労賞を受けたという。

そして後の世界の2013年に、母は90歳で没したと、65歳の聖子からお知らせを受けた69歳の石井であった。

母の帰郷のとき、聖子は23歳であった。あわせて帰郷する聖子は、東京に未練を残しつつも去っていったのである。石井にとっても妻との確執で多忙だったこともあり、引き止めることはしなかった。そして、ぼつんと独白した。

「去るものは追わず。」

石井は、聖子のことは一過性のハプニングだと思い、明日のことは聖子には語らなかつたのである。

聖子も、けなげに成り行きに従ったが、ことさら将来に関して石井に夢を持ったわけでもない「おぼこ」娘のままだった。

そして数年の文通をへて聖子とは終わることとなった。

くりかえす絆

そんな折、石井は、職場の上司の私的パーティーに呼ばれ、そこで何人かの知り合いを得た。

その一人が、節子であった。節子は銀行員の娘で、越中おわらの生まれだといった。

おわらは、風の盆供養の里である。

「風流そつな里ですね。」

と言つと、

「おわらには、きかない女ばかりがおつてですよ。」

と、応えた。日本海の風をともに受ける剣、立山の靈峰に抱かれた、風の盆の里は、印象ほどロマンの里でもないようであつた。

石井が妻子がいる。と言つと、驚いた顔で、

「そんなに、若いのに。生意氣だわ。」

と、笑うのだった。節子は、石井より年かさのようだった。石井には、節子が妻より清潔に見えた。

石井が節子と懇（ねんご）ろになつていったのは、石井から見ても、節子がお嬢育ちで洗練された女性であり、妻とは違つた魅力を持っていたからである。

その日は、春のうららかな陽光が、庭の青桐の花を引き立てていた。おわら生まれの節子には、そこはかとなない純な娘心がバラのかおりのように漂つていた。

石井は、妻に子ができたという、状況の変化にあわてまくつて、うかつにも拙速に結婚に逃げ場をもとめたドジを悔いた。

聖子の場合には聖子が高校生だつたし、関係をもつたものの石井とは歳差もあり、添い遂げるような環境に至らなかつた。

今日、パーティーで紹介された、風の盆の節子との交際では、聖子とはレベルの違う大人のつき合いに発展し得る素地が見られ、聖子の思い出は石井の心から遠くなっていた。

節子とのつきあいは親にさえ秘密だったが、水面下で思いがけずも話が進展した。

それは、適齢の節子の別ルートの結婚話に伴う、二人の間の心の動揺に由来した。

節子は、数年の間、いくつかの見合い話を袖(ソデ)にしてきたが、狙いめは、東大卒であった。

石井のいる通産省は、東大卒の官僚のオンパレードである。

「石を投げれば東大卒にあたる」といわれるほど多数で、東大卒の「価値」は、内部では高くなく「東大卒さま」などと思っている内部職員は皆無である。

だが、娑婆(しゃば)では、東大卒は、徳の高い僧侶のような存在としてあがめる風評があった。

事実、省内では東大卒のキャリアでなければ、ハバがきかない実態ではあるが、東大卒全員が将来事務次官のポストを約束されているわけではない。キャリアは同期の一人にトップを取られた時点で、その組は全員が辞職せねばならない運命である。

それは官僚の道をえらんだ者の宿命であり、官僚もみんな人知れず苦勞をしていた。

それらは、石井たち高卒の蟻のような働き手があつてこそ生きる「官僚」である。彼らと石井たちとは、人種の違いほど接点に欠け、ふだんでも私的なつき合いは少なかった。

彼らは、広い大通りのはるか向こう側の歩道を歩く人たちであったし、高層ビルでは、階段でのぼる人と、エスカレーターに乗つてのぼる人くらいの感覚の違いがあった。

もともと国の官吏の出世街道は「登竜門（とりゅうもん）」といわれる中国の科挙（かきよ）という登用制度に似ている。

科挙制度とは千人に一人という官立校への入学資格である「秀才」という資格を得て学び、次にごとの「挙人」に同様の合格率で合格し、さらに「進士」へ進むという、頭でっかちの超人的なりクルートというか就活制度であった。

国家公務員の実態を聞いた節子は、目からうろこが落ちたように目先を変えたようであった。

やがて節子の目は、石井に向けてきていたようだった。石井も節子をにくからず思っていたが、何せ石井は既婚者である。

石井は、いま結婚に懲り、苦界にいる身だから、これ以上ややこしいことは避けたい気持ちだった。

それだけでなく、最近、省内のある女が、石井に秋波をなびかせてきている。酒を好む筋（すじ）で、飲み友達としてなら歓迎のタイプであった。

亜矢子という女であったが、頭脳明晰な女官僚タイプの独身だった。なぜ石井が好かれたか分からなかったが、

「私は、上背（うわぜい）のある大女だから、ペアで連れ立つのに石井さんくらいが榮（は）えるのよ。」

と酔い紛れにいうのだった。石井は背丈が180cmだから大男であった。亜矢子も170cmを

超える大女である。石井は、女の奇異な視点に感心した。亜矢子は、石井の「せいたかノツポ」に仕上げたのであった。

この席では、酔い話からアジサイの話になり、一緒に見に行くことにまで話が展開した。

亜矢子は古寺巡礼が好きで、以前から京都、奈良の寺院をよく回っていた。今回は、亜矢子の希望に沿って、鎌倉の あじさい寺 を、花を求めて訪れることにした。

鎌倉の明月院に大男と大女のペアがみられたのはその翌週だった。

梅雨にそば濡れるそのお寺は、傘に身を隠す道行（みちゆき）に相応（ふさわ）しい情緒で、他人（ひと）の目は、むらさき色の紫陽花に集中していたし、雨の糸は、二人を隠すめぐみのビーナスだった。

鎌倉の雨は穏やかだった。海からの日差しが江ノ島、由比ガ浜海岸を強く差し、薫風が寺の屋根に吹くころであった。

あじさい寺といわれる明月院は、もとは禅興寺という歴史ある寺の塔頭（たつちらゆう＝支院）の1つであった。

室町時代には、関東十刹の一位に列せられ繁栄したが、明治の初めに国の廃仏毀釈の愚策で廃寺となり、支院の明月院のみが残った次第である。

特徴は、明月院のシンボルとなっている本堂の円窓である。窓の向こうには、奥庭が見える。

この明月院は鎌倉にあって、どこか京都のような雅（みやび）な雰囲気のお寺である。見渡す限り

の青一色の境内に梅雨のカーテンが二人を隠していた。あじさい寺はその花の多さと華麗さが好まれ、花の時期は多数の衆生が集まる観光スポットともなっている。そのむらさ色の花の集合は、互いに重なりあい相乗的に華やいでいた。

その宵、二人が結んだ赤い糸は、亜矢子には苦痛だったようである。開きながらも、「さいごまでやっちゃいやよ。」

と、顔をゆがめ枕のうえの首を振った、

亜矢子は、名門都立立川高校在学中は、なみ居る東大進学希望者の上位にいた。才媛の誉れは高かったが、いずれにあつても亜矢子にはおごる心はない普通の女官僚であつた。石井の女関係にもまつたく興味はないようだった。

「お互いに、自由でいきましょう。」

と、石井の身上とは一線を画していた。そして、石井との酒の翌朝は、なぜか職場へタクシーで乗りつける同伴出勤もあつたのである。

「君との、再婚も僕の選択肢にある。」

と、石井が打ち明けたとたん、亜矢子は、

「それは、無理よ。飲み仲間で行きましょう。」
と、言うのだった。

亜矢子には、石井の本質が分かっていたのであろう。石井は、決して普通の結婚生活ができる男ではない。心に一貫したものがなく、だれかの心におもねる、「すけべえ心」の男である。

これでは、仮に自分がのめり込んでみてもとらえどころがなく、相互の人格を一心にまとめられるめやすもない。と見破ったのである。

二つのわかれ

おわらの女の節子は、父母が勧める見合いを軒並み断っていたのは、石井の本心を探っていたからである。以前なら崇拜した東大出の外交官まで袖（ソデ）にしたのであった。

節子には、亜矢子のような職業女性としての独立心はなく、ごく普通の形の結婚を望む女性であった。

節子は、少ない情報の中だったが、石井の周囲を自分なりに慮（おもんばか）っていた。

聞けば石井の妻は、機転の利かないニブイ女だという。子が二人いるが、夫婦ならば子がいるのは当然であろう。

仄聞するに、部屋はメチャメチャ、いつもわたぼこりが飛んでいるような不潔な状態だという。

台所の流しには、汚れたなべカマが重なり合い、立つ場所もないくらいガラクタで埋まっているだろうと想像すると、一刻もはやく石井を救い出したい思いであった。

石井は、早く離婚をと訴える節子をみて、これは本物だと思った。

昨日まで出会った幾多の女性は、石井が妻帯者であることを承知で、男女のステージの趣向を変えて夫婦ごっこに興じただけである。

しかし、婚姻は、単なる色模様ではない。さらに離婚ともなれば、慰謝料から子の養育、監護、などがんじがらめの掟（おきて）がある。

いずれにしても、まずは妻に離婚を承諾させるところから始めなければならない。

一般に、昨日まで夫婦だったペアが離婚する場合、婚姻のときと同様に両者の合意が必須だが、すんなりと合意に至ることはなく、両者の利害が絡むので、その駆け引きと思惑でもめるのが普通である。

離婚を提起する理由も必要になるが、単に現象面で家の清掃が行き届かないからというだけでは認められない。また、一方的に好きだ、嫌いだ、で離縁を迫ることは許容される余地はない。

民法には離婚を認めるいくつかの事例のほかに、「その他婚姻を継続しがたい場合」という文言があり、協議離婚は、この「その他」の適用が多い。

しかし、申し立て人にすでに他に女がいるような場合は、公序良俗違反で、「申立て」自体がひっくり返るといふ判例がある。

江戸のころ、駆け込み寺とか、縁切り寺というのがあった。当時のドメスティックバイオレンスで夫の虐待を受ける妻や、不本意な婚姻を強いられた妻が夫から逃亡し、それを救った尼寺である。

縁きり寺では鎌倉の東慶寺とか、上野国の満徳寺が有名である。駆け込み後3年在寺で離婚が成立した。このとき庵主（あんじゅ 〓 尼僧）さんが主に尋問したのは、その逃亡が夫から他の男に鞍替えをもくろむものではないかという点であった。

「公序良俗」が古今を通じて重要視されたゆえんである。

石井の場合は、無職の妻が、離婚することにより経済的に現状から著しく不利益を受けることになるのは明らかである。したがって、石井の離婚協議の焦点は、妻側の今後の生活の安定と、子の養育に要する経費のことである。

石井は、現在の妻との離婚を当面の課題とした。

普通、男女が結婚する過程に裁判が絡むことはない。しかし一旦結婚が成立した後は、男女の地位は、その男女の権利義務を伴って法的にも確定することになる。さらに離婚時に子がいる場合は、子の地位を親権と監護とで保護する親の義務が発生することになるのである。

離婚協議というのは、夫婦のもつ一連の既得の地位を協議により解消しようとするものである。

これには両性の合意のほかに、それまでに築き上げた既得の権利や義務に踏み込んで侵害した部分があれば、何らかの保障も加えるなど、個々の愛憎まで絡むフィールドで、厄介な交渉をねばり強く行なわなければならない。

石井と妻との離婚協議は一年かかったが、なんとか条件を折り合わせ、離婚が成立することとなっ

た。調停離婚では、申立人と被申立人が終始同席することはない。それ以外の調停では、最後の判事の宣告時のみ同席する。

晴れて石井は、バツイチになったのであった。しかしこの代償は甚大なものであった。協定書を書くとき、裁判所の書記官が石井に同情した。

「たいへんですね。すっかり裸にされちゃって。」

石井は、それでも晴れやかだった。

「あしたがある。」

石井は、どこかの流行歌のようなセリフで強がったのである。

あの結婚からこの離婚に至るまでの約10年が、石井の人生にとって要だったか不要だったか無駄だったかの評価は、当面の課題に忙殺する石井には今だ出せる結論ではなかった。

半年前の裁判所の関与が始まった時点で石井は別居した。生活費がきつかったので、亜矢子に数百万円を借用したこともあったが、同時に、妻から離れた石井の無聊を慰めてくれたのもこの亜矢子だった。

亜矢子を別居中の新アパートに誘ったが、自分のエリアを城のように守っている亜矢子は、簡単に御輿（みこし）をあげて石井のアパートに来なかった。しかし自分の居所に石井が訪れるのは抵抗が少くないようだった。

日本史で言う「妻問い」だが、日本人男女の歴史的な体質に根ついた無理のない逢瀬の方法なのか

もしれない。

亜矢子は、いづぞや石井が再婚の打診をしたのに対して固辞した女である。亜矢子には、いづれの男ともわずらわしい結婚などをする意志はないようだった。

石井は、離婚が成立した後は亜矢子は除外し、節子との婚姻に進むことにした。

そのころ亜矢子のアパートのすぐ近所に、偶然ではあるが手ごろな建売り住宅が売り出された。

物件は、亜矢子のアパートとおなじ最寄駅にあったことから、石井には多少心に抵抗を感じるものはあった。

しかし、節子と婚姻するということは、亜矢子とは離別するということである。

石井は、思い切つてこの住宅を購入した。購入目的は、もちろん節子との「愛の巣」である。

そのときすでに亜矢子とは、男女の関係は断つていたが、亜矢子は職場の同僚である。

日々おなじ上り電車で同伴出勤をするハメになった。互いに、毎朝

「おはよう。」

と言い合い、二人で並んで、つり革にぶら下がった。ただ一度だけ、亜矢子が石井に問うたことがあった。

「ねえ。どうして私のアパートの近くに住むことになったの。」

石井は、偶然だと応えた。

高架から富士山が良く見え、富士山の眺望の日々の変化が、通勤途上の手持ち無沙汰で気まずい二

人の車内の話題になったのである。

そうはいっても亜矢子との数年の深い関係は、気持ちの上では完全に断絶できるものではなかった。それは割り切りの悪い、いわば清算のついていない仲のままで永くすぶったのである。

終電車に近いおそい帰宅となったときのこと、偶然石井は亜矢子が男連れで自分のアパートに入っていくのを目撃した。そして翌朝は決まって乗る電車をずらしたのか、駅で会うことはなかった。

石井は苦笑を禁じえなかった。

戦時中、陸軍少尉だった誦訪の西茅野のおじいさまが、酒宴後の杯盤狼藉（はいばんろうげき）の場で、最後に残った数人を前に、

「フランスの女は、亭主が不在だと一週間もたないよ。必ず浮気をする。」

と、戦地で見てきたか経験したのかは不明だが、何かの話のついでに語ったのをふと思い出した。亜矢子の次の男も、おれとおなじ道半ばだなど思っただけである。

儀式の裏

数カ月後、石井は節子を正式に妻として入籍した。

医大の医局にアルバイトしながらで勤めていた節子は、権威ある医大教授と臆せず対等に言葉を交わしていた。

結婚式には、派手好みの医大の医学部長や教授たちがごぞつて出席したので、新郎側の地味な通産省の役人の歴々は色がなかった。

石井が期待したとおり、節子は家事をてきぱきとこなし、家事に関するかぎり何事も滞ることはなかった。石井は、気持よく日々を過ごすことができた

節子と結婚する前後、石井は女としての旧妻と亜矢子と聖子の三人の女を離縁や行き違いで失っていた。

節子が輿入れするまでの間、石井の男の迷いを受け止めてくれた新たな女性がいた。隣の課に所属するベテラン職員の敏子である。

敏子は、石井より一回り歳上で子はなく、主人は税務署の徴税課長という立場だった。

敏子は、気性の激しい女だった。一旦ほれたら、蛇のように聴く絡みつくタイプの女だった。

互いに世をしのぶ逢瀬だったが、石井にはすでに慣れた世界だった。敏子は、職場、家庭、夫などとの時空のギャップを活用してしつこく濃厚な付き合いをせまってきた。

何回目かの逢瀬のとき、仰向けの石井の上に乗ってせめる敏子に、

「僕には妻がいるんだから、なかなか敏子さんの思うようにはいかないんだよ。」

と、気持ちを振ってみたが、

「私も同じよ。私は、主人に対しては何の不満もないのよ。」

石井は、なんだか訳（わけ）の分からない応えだと思ったが、愛の最中だったし、「まあいい

か。」と、ここでも妥協してしまふ優柔不断に支配された。

敏子とは、そのような抜き差しならない域にのめりこむことになっていったが、人妻である敏子も同罪である。

不倫に正当な言わけはない。ただひたすら水面下の忍ぶ恋である。その則（のり）を超えると、「高くつく代償」が、双方に制裁として待っている。

むかし、若くして結婚したとき、上司が、

「なんといつても、自分の奥さんが、一番やすあがりですよ。」

と、祝福したが、欲求不満を抱える若い層には、結婚自体の経済的効果はそんなものかもしれない。

その視点でみて敏子との不倫はどうなのか。代償を1円でも要求されるわけでなし、この不倫にかかる費用はランニングコストだけだから、やはり安上がりの選択ではないかと思う石井だった。

敏子は、若い石井にネクタイや背広を自分の趣味で着せたい気持ちもあったようだが、そのような行為は、かならず破滅に至るといつて断った。妻の節子にはすぐ分ってしまうことである。敏子はトヨタの車まで買ってやるというのだった。

女の見栄や、意地、恠気などが浅知恵となつて露呈すると、この恋は破局に至ることは必定である。

明治の元勳は押しなべて妾宅を構えて蓄妾を当たり前のこととした。これは当時のステータスで

あつた。

現今、役人がそんなことをしたら即袋叩きである。役人風情のする恋は、互いに粗末なものをつかの間舐めあえばよい。男も女もひっそりと、身の丈の程度の不倫をして実をとればよいではないか。

あとは、仕事場の業務や考課に差し障わりがないよう、職場における不倫の秘匿が肝要であることも敏子に分つてもらわねばならない。謀（はかりごと）は密を要するのである。

敏子も自身夫ある立場を思い知つて、秘匿、平穩、無過失の態度を貫くことができれば、この不倫は二人限りの秘密のベールに守られて大過なく継続されよう。

いうまでもなくこの切ない恋は、表には出してはならないものである。ひとの祝福を受けようなどと決して思つてはならない。

石井は、敏子にそう釘をさし、互いに今食べている禁断の木の実に、後ろめたさを耐える業に合意してその花園の守りを継続した。

不倫の世界は、二人にとつて社会から閉鎖されたまさに二人の世界だから、その特異な場の愛の貴重な時を惜しみあい、めつたに経験できないアンビジブルな交流を極めればよい。

もう一つの花

敏子の部下に、恵子という新卒の女性が配属されてきた。「山からテツ転がしたる松の木丸太でもく」というド田舎女への評が九州の民謡に歌われているが、まさに、畑から大根を引き抜いて泥つきのまま、卓袱台（ちゃぶだい）にのせたような、原色の娘だった。

敏子は、先輩らしくこの部下への指導に当たった。

敏子は石井とランチに同伴する際には、石井との関係をカモフラージュする意図もあってこの娘を同席させた。

恵子は、スポーツウーマンであった。数年勤めて学費をため、体育大学へ進学したいと語った。

恵子をよくみると、磨けば魅力も出そうな素地がありそうだった。そして半年もすると、多少垢抜けた顔になった。

同席する恵子にかまわず敏子は、石井との痴話ばなしに明け暮れた。亭主が2時間もつないで離さないとか、「松葉くずしとはこうやるのよ。」などと両手の指で説明したりするうばざくらであった。このあけすけな敏子の猥談は計算されたもので、周囲から二人の不倫をベールに包む意図があった。

この間、恵子は興味深そうに、上司の敏子の一挙手一投足を観察していた。

その秋のこと、敏子夫妻が、婚姻記念日に海外旅行へ行つた隙に、石井は、あの恵子を誘つてみた。

恵子は、埼玉県の秩父の出で、東京では教員の姉と同居していた。

高校を卒業して半年の初々しさが、かつて自分が高校のとき結ばれた聖子のかぐわしさと一致した。

その夜同衾した恵子は、「熱いあつい」と滝のような汗を流した。石井の体温が冷たい恵子の肌には熱すぎたのである。

顔がぶつかるほどせまい浴槽で、乳繰りあったが、恵子は閉じたままだった。恵子には、上司で石井と親しい敏子に遠慮するものがあつたし、処女のつつましさも感じられた。

「ここまで」と、限度をきめてきたようであつた。強く腰を前上へ押してみたが、亀頭が半ばはさまつたところで押し戻された。恵子は開き気味ではあつたが、田舎娘の力強い太めの腿（もも）で、石井を締め付けるように腰をひいて挿入を防いでいた。

枕を乱して訴えるように首を激しく横に振る恵子に、石井はそれ以上の無理強いはしなかった。

一週後に帰国した敏子は敏感だつた。

「ねえ、あなた、恵子と情を通じたでしょう。分かるわよ。」

その直観力に石井の背筋は寒くなつた。その日のランチに恵子を同伴せず来たのは、その話があつたからのものであつた。

「なんの話だ。」

石井はもちろん否認した。しかし信じる気配はなかつたし、女のカンは適切に事実を射抜いてい

た。

「私、海外に行っている間もあなたの浮気に気を病んでいたの。いつもそうよ。主人に抱かれていても、いま、あなたに抱かれていると思って燃えるの。目を瞑（つむ）っていて主人の顔なんか見ないのよ。あなたの奥さんだって、まさかあんな小娘に夫がたぶらかされているなんて思っていないことよ。」

「せっかくご主人と旅行するんだから、日本のことは忘れたらどうだ。」

石井は、敏子が外国まで行って石井を思いつめ、主人がする愛を、石井に振り替えて受けるなどは、夫婦のありようへの冒瀆だと思ったものである。

この日以来、恵子との逢瀬は困難を極めた。

石井は、職場では恵子と目線を合わせることも避けて看過した。石井は、バツイチの妻帯者で、子もいる身である。一方の恵子は未成年だし、公序良俗の世で絶対に石井の側が世の批判を受けざるを得ない立場である。

恵子との三角は、敏子ののぞむところではないはずであり、敏子は職では実力ある女だから、ことが露見したらそのリベンジは恐ろしいと思った。

一般的にも、石井は、あつてはならない不倫をダブル、トリプルでやり遂げる二重苦、三重苦を覚悟せねばならなかった。

不穏な空気の三角だったが、妻の節子は、そのような夫の行動は疑うべくもなく、家事に専念していたし、泊で帰らなければ仕事の都合だろうと、夫の石井に思いをはせるのだった。

その年も師走となり、秩父の生まれの恵子は、秩父夜祭に行こうと誘った。

秩父夜祭りは、12月1日から6日に開催される埼玉県秩父市の秩父神社の例祭であった。

2日が宵宮、3日が大祭であり、提灯で飾り付けられた山車（笠鉾・屋台）の曳き回しや、冬の花火大会で知られる。大祭の3日の午後6時半頃に、秩父神社から1kmほど離れた御旅所に向けて御幸行列が出発し、6台の笠鉾・屋台がそれに続く勇壮なものである。

御旅所下の団子坂を笠鉾・屋台が曳き上げられる頃にクライマックスを迎えるものである。京都の祇園祭、飛騨の高山祭と並んで日本三大美祭及び日本三大曳山祭の一つに数えられている。

喧騒の宵い山のなか、恵子は石井にしがみついていた。

「ねえ、私を守って。こわいわ。」

恵子は、その勇壮な山車（だし）を見てはいなかった。必死に石井の目を見、石井の目がそれないよう両腕で正面から石井の二の腕を押さえていた。

「敏子さんが、私を追い出しにかかっているの。」

「そんなことはないだろう。」

石井は、さもあろうと思いつつ、一応は否定してみせた。

恵子は、石井の煮え切らない態度をにいらだった。

「石井さんは、私と敏子さんのどっちの味方なのよ。」

すでに石井との男女関係では敏子と同格と認識した恵子は、石井に自分の側にたつよう願いつつも石井の心が読めなかった。

石井には、敏子の心は分かっていた。多分恵子の上司として、いろいろな嫌がらせを画策しているのだらう。恵子を石井のそばから離そうとしているのは、敏子の性格を思えば必定である。

職の地位を使つて、恋敵を排斥しようとするようなことは、倫理としても許されることではない。職場の上下関係は、勤務中の仕事上だけの権限である。しかし格気の敏子には、そのような説得では通用しないであらう。

石井と恵子の間には、すでに割りない関係ができていたが、ひとついえることは、いまだ肉体的な結合は控えていたことである。

同衾したしシャワー室でも一緒だったが、恵子は最後の一線を拒んでいたし、石井も無理強いはしなかった。

だからそれは「きれいな関係」かと問われれば、憚（はばか）りがある。すでに心は結合しているのだから、「一線」があろうがなからうが、きれいだと胸をはる根拠には程遠い。やはり、男女の関係はあつたということである。

しかし、恵子の若さは、その「一線」を守っている余裕が、いつでも自助できる皆（とり）でなっている。

一方の敏子は、石井が放擲したら奈落へ落ちるほどすべてを曝（さら）してしまっている立場であつた。

石井は、恵子を救う手立ては、恵子を一時的にでも離別するしかないと思つた。

敏子に、その結論を宣言すれば、敏子の恵子への責めは多少はうすらぐのではないか。また恵子も、「一線」を守つたことで納得できよう。

秩父夜祭は終わつた。山車は帰りお旅所へ収まつた。

秩父の朝は、12月の冷気の朝霧が武甲の山を飲み込み、山間の谷戸に黄色く咲くボサ菊の霜枯れた風情がすがすがしくもあつた。恵子とは朝帰りになつてしまつた。

恵子のリベンジ

石井の恵子との交流抑制の話は、恵子を納得させるものではなかつた。恵子の本質に根つくスプー ツーマンシップは、妥協を容認しなかつたのである。

話は、思わぬ方向へ走つた。

某日、石井は、小林と名乗る男性から電話を受けた。

「はじめてお電話申します。私は、小林と申しますが、あなたさまの同僚の敏子さんのことで、一度お目にかかりたいのですが。」

慇懃な言葉使いの中年らしい声だった。

そこは通産省の脇の喫茶店だった。断る理由もなく会った小林という男性は名刺を出した。名刺には、小林次郎 とあり、中央税務署徴税課長の肩書きがあった。

「私は、小林敏子の夫です。」

と、聞いて、石井は飛び上がるほどびっくりしたが、このような場面が絶対には思っていないかかったのも事実である。

喫茶店のバックグラウンドミュージックには、ボサノバが軽快にながれていた。

夫ある女と懇（ねんご）ろになるということは、常に愛の裏には夫の影を覚悟せねばならない。

石井は丁寧な挨拶をし、奥様にはなにかとお世話になっています。と返した。

「今日、私がここに来たことは、妻の敏子は知りません。」

小林は、出されたコーヒーを一口飲むと、

「あなたの恋人と名乗る、恵子さんが、私の事務所を尋ねてこられました。」

恵子が。と、石井は意外な展開に動転した。

「恵子さんが申されるには、うちの敏子が、なぜか恵子さん、つまりあなた方の恋路をやっかんで邪魔をするそぶりで困惑している。と言うことでした。」

その事情が私には良く飲み込めない話なので、私どもに落ち度があるなら、敏子を飛び越えることになりませんが、直接私にご説明いただければ幸甚と思ひまして伺ったのですが。」

小林は、あくまで丁重であつた。恵子は、敏子のウイークポイントをついてリベンジの行動を起こしたのだろう。

恵子は、上司の敏子と石井の忍ぶ仲をうすうす察している。双方妻帯者でありこれは不倫である。二人の関係のカモフラージュのため、自分がダシに使われているのも分かつてきた。

しかしあるうことが自分は、上司の敏子の留守中に石井に誘われ、なびき、わりない仲になつてしまつた。

そして、上司の敏子は、それを女のみで見破つたのである。さらに愷気の敏子は、自分の留守中におこつたこの事態を、恵子の追放で解決しようとしている。

恵子のリベンジはここから始まり、上司の敏子と石井の不倫の源泉である、その源（もと）の夫婦の倫理の部分を攻撃してきたのである。それは攻撃される敏子のもつとも手痛い患部である。

男社会に競争があるように、女の世界でも競争がある。それは主として彼我の美貌とか、男をめぐる陰性の競争で彼女たちには死活問題である。そのためそのとばっちりを受ける男も出てくるのである。

恵子のリベンジは、当の恵子自身にとつても危うい橋だし、いとしい石井にも、とばっちりで傷が及ぶという両刃の剣であつた。

今日、石井に面会を申し入れた小林は、石井と自分の妻の、隠された深いことは知らないようであつた。

「奥さんの敏子さんは、恵子の上司です、部下の職員にあらぬ噂を立てられることは本意ではないはず。多分、私、石井は恵子の相手としてふさわしくないとிட்டのだと思います。それは当然です、第一、私は妻帯者ですから。恵子の恋人などということはありません。」

「そうすると、恵子さんは、妻あるあなたに恋心を抱いたが、それをうちの敏子が止めた、ということでしょうか。」

「その通りです。恵子は奥さんの忠告を逆恨みしたのでしよう。若い娘の一途な気持ちは不可解で分かりません。いや、しかし私の責任でございます。もうしわけありません。恵子には、機会をみてきつくいつておきます。」

小林は納得したようにみえた。本題が済んだあとの話の口直しに、

「海外旅行へ行かれたそうですね」

と、話を振ってみた。

「ヨーロッパへ行ってきました。とも働きですので、共通の時間が取れなくて、女房には不満を持たせるばかりですまんと思っております。」

そして、別れ際に

「いそがしい中、ありがとうございます。今日のことは、女房には伏せていただければ幸甚です。糟糠の妻ですが、先走る性質（たち）で、押さえがきかない欠点があります。不満なら、不倫の一つでもやってみる。と言ひ合いをしたこともあります。ま。あのような愚妻ですが、私には必要な

妻と思っています。」

小林は、ひっそり戻っていった。小林が帰ったあと、石井は、恵子が決起したりベンジへの対策を考えた。殊に、小林が、最後に言った、

「愚妻だが、私には必要な妻だ。」

というくだりは、石井の胸にグサツときた。あるいは、小林は、敏子の不倫を感じて石井をターゲットにそれとなく言ったのかもしれない。あるいは、小林は、敏子の不倫を感じて石井をターゲットにそれとなく言ったのかもしれない。

いや、その可能性のほうが高い。それではなくては、小林がわざわざ石井に会いに来る必然性がないし、第一そのようなプライベートなことを、他人の石井に正面から漏らすはずがないではないか。

小林が石井に告げなかったのは、

「私の妻に手を出すな。」

と、いうことではなかったか。石井は、さもあろう と思った。そして 自粛せねばと思い、敏子にも自粛させねばと思つたものである。

石井は、霞ヶ関の丘から、今日はめずらしく空気が澄んで、うつすらと姿を表わした夕映えの富士山に思いをはせた。

山をみるとき石井は、必ず故郷の信州諏訪の自然と重ね合わせ望郷の念に浸るのであった。

富士には月見草が良く似合う。と、文豪の太宰治が書いた。それもそうだろうが石井には、月見草は信州の諏訪湖へ注ぐ宮川の氷のようにつめたい、その雪解け水に洗われる河川敷にこそ似合うと思

うのだ。

そこは故郷諏訪に残してきた高校時代の二人の乙女との、思い出に満ちたフィールドであったからである。

・
反省と自肅

石井は、家庭生活に身を入れることにした。

ちようど庭の桃の花が濃いピンクに群れて咲き、脇の竹が日差しを覆っていた。夜は朝に溶け込み、牛乳配達のガラス瓶のすれる音が響いて通り過ぎる時刻だった。

妻の節子は、早朝から家事に専念し、てんでん走りまわる日々を過ごしていた。ひたすら夫の善意を信じたそれは、以前の偏った婚活を反省し、今の夫がいかなる望みを持つかが、つき従う忠実さを感じた。もちろん夫の不倫などは思いもよらないことであつた。

「あなたが落ち着いたら、子供をつくりましょう。」

節子は、来月は、制限なしでやってほしい。と、子づくりを催促した。

その後、この賢母の育児が功を奏して、成した男女二人の子はともに最高学府まで進学させることになる。

育つ環境にもよるが、子自身の資質もさまざまだから、順調に育つてくれる子ばかりではない。

前妻の二人の娘は、あの「おひきずり」の母親の因果が子に報うことになり、学歴も中卒で終わつたし、定職も持つことなく、婚姻も敬遠され歳ばかり経ていった。

前妻には、離婚後石井が伝（つて）を頼つて、前妻子三人の生活が立ち行くよう、地方議員との誼

(よしみ)を通じて、介護補助員という地方の公務員のはしくれに任用してもらっていた。

石井は、二人の学費を送金したが、それも中卒までの約十年で終わったのである。

前妻は、子の育成の不首尾の原因を、生涯石井のせいにしてやまなかった。石井も、不首尾の子はどかわいいと身につまされてはいたが、手も出せず傍観せざるを得なかった。

石井は、恵子との秩父夜祭とか、敏子の夫の小林の突然の訪問とか、妻節子の出産準備などで、あれ以来、石井の職場の三角関係は膠着していた。

敏子は、夫や、石井のただならぬ雰囲気を敏感にとらえて、間合いを計っている風だった。

また、恵子も、自分のしている恋は、妻ある男との道ならぬ恋であるとの自覚と、まだ「一線」を守っている余裕で、あれ以来の軽挙妄動は自粛していた。

半年後が、妻の節子から出産予定が知らされた。

この間の石井の懸念は自身の「身持ち」にあった。これからは、三角関係どころか、三角形の一辺もない禁欲に身を置かねばならない。

石井のこの渇水のような状況のなか、恵子は、職場に見切りをつけて体育大学への進学をめざし離職した。

退職挨拶は、大広間で合同で行うので、退職者は、所属課の上司の介添えであいさつをして職場を離れていくのである。定年の人、中途退職、結婚退職、などさまざまな離職の色模様がみられる。

なかにはあいさつの途中、感極まって涙声になる離職職員もいる。

恵子の介添え役は、もちろん上司にあたる敏子であった。

恵子は、自分が絡んだこの上司の敏子と石井をめぐる複雑な確執を、石井を引き合いにだして敏子の夫の小林を引きずり出したものの、有効な決め手に欠け、敏子攻略には至らなかった。

恵子が仕掛けたリベンジは、天につばする行為であった。

石井を「私の恋人」と、強弁してみても、その石井が、「妻ある男」であつては、それは恵子自らに都合が悪い事実である。

「公序良俗」の掟に反しては、世の同情も得られない。かえつて自身を貶（おとし）め、恥をさらす結果にしかならない女の浅知恵がうんだ愚である。

一方の敏子の側は、自分の家庭生活のなかで夫にそれとなく、改めて釘をさされたのであろう、敏子が企図した恵子の追い出し作戦には限界があつた。

しかし思えば、これらはすべて石井自らがもつ、生来の優柔不断さから生じた不始末を二人の女に転化したものではなかつたか。

むかし高校生の聖子や、信州諏訪の高校時代から始まった石井の女性との付き合い、というか女遍歴は、いずれも、なるようにしかならない流動的なものだった。今も変わらず、流域が拡張しただけのことである。

古今と洋の東西を問わず、赤と黒の絡み合いは、スタンダールなど文豪の手で描かれ、一編ずつが人類の文化財になっている。またその色模様も多種多様である。

それらをみると幾多の人格の男女のプライドが、歴史に共通するステージで、喜び、悲しみ、そして絶望へとたどるシナリオが描かれているのである。

石井は、今失った二人の愛人との、その折々交わした会話を空に再現し、自らの絶望にいたる経過を省（かえり）みた。

人のあり様はさまざまである。これに男女関係を重ね合わせると、さらに複雑な織り模様が発現される。

恵子も敏子も役所内では事務系だから、専門職と異なり、属性では一致点があるものの、石井とは、性別で属性を異にする宿命だから、その不融和が絶望の世界を真近に呼ぶこととなったのである。恵子は石井との別れ際に、

「じゃあね。」

と、こぼれるような笑顔をみせ、その一言を残して消えていった。恵子との交流は、まさに真夏の夜の夢であった。

石井は、一面ではホツとし、恵子には、二度と会うことはないだろうと思った。

敏子のリベンジ

石井の私生活は、まもなく出産となる子への期待と、初産の節子への配慮で身も心も多忙だった。

臨月になると、節子は「デンと構えたが、夫の石井は落ち着かなかつた。石井自身は、妻を違えて通算三回目の子の出産であつたが、慣れることはなかつた。

「痛くなつたら来なさい。」

という助産婦の話にしたがつて病院へ送つた。

病院の入院日数は、夜半の0時過ぎから1日と起算されるので、節子に宵の9時から始まつた初期の痛みを、0時過ぎまでこらえさせ、1日分の泊費を節約して、病院へ送りつけたのであつた。

男の石井には、当面それ以外の出番はなく、その夜は、手持ち無沙汰の一夜を独り過ごしたのである。

生まれたという連絡を受けて駆けつけたが、病室には子はいなかつた。新生児の集中管理で無菌室に入っているらしかつた。この子は、石井の長男であつた。

今は夏の盛りであつた。公務員にも有給休暇のほかに、期間限定で数日の夏休みがあつた。以前は、正式な夏休みというものはなく、労働組合との団体交渉を経て、職務専念義務免除などというやこしい非勤務日を無理やり作つて休んだものであつた。

夾竹桃（きょうちくとう）と百日紅（さるすべり）が、いやがうえにも燃え上がつて、その下の影は、いやがうえにも濃かつた。

石井は、子を抱いてテレビをみるという、実に家庭的な親父（おやじ）の態で過ごしたい。

その日、石井は2人の見慣れない男の訪問を受けた。応接間があるわけではなく、家族と一緒に茶の

間で対応することになった。

訪問客は、部落解放運動を主唱する団体の執行役員だと名乗った。50歳がらみの男と30歳前後の男で、二人とも地味ないでたちだった。

「実はうちの事務所へ、おかしな手紙がまい込みまして。」

50歳がらみの男が、持参したかばんから一通の封書を出した。それには、肉筆はなく、すべて今流行のワープロでうたれた。

石井夫妻の授かった子には、部落民の黒い血が流れている。などとかかれていた。

石井を、部落民と誹謗しおとしめる内容で、一目で愉快犯のいたずらと分かったが、訪問した二人は、

「これは直接には、あなたを中傷する個人的なものだと思えますが、部落民差別をその手段にしている点で、私たちも被害者です。このような手紙を出される覚えはないですか。」

石井個人を中傷する手段に、部落民を引き合いに出して、問題を煽り立てようとするやり方は、犯人はその騒ぎをどこかで見て愉快を感じていることから、「愉快犯」というのである。

1970年代前半から、部落問題の啓発活動が行政を巻き込んで大きく盛り上がっていた。

差別者は、糾弾され反省を求められた。犯人は、この激しい運動のことを知って、部落問題を脅迫状まがいの内容に取り入った知能犯かあさはか犯かであろう。

部落問題を進める母体の組織のお二人は、石井にその不穏な手紙を見せただけで帰っていった。

次に同様な嫌がらせの手紙が舞い込んだのは、数週間後のことだった。今度は、直接石井の住所へ普通郵便で来た。

手紙の内容は稚拙な、たわいもない嫌がらせで、出すほうにとつても切手代を損するだろうと思われるようなものだった。その後、かみそりが入った手紙もあった。

いずれも直接の被害はなかったが、妻の節子が気持ち悪がった。

そのうちに、反応が見えない手紙戦術を変えたのか、無言電話が多数かけられた。これは、電話番号を変えたので数回引つかかった程度で済んだ。

固定電話は、かけてきた相手がわからないので、その点を活用したものである。

総合すれば、石井を巻き込んで、何か問題を煽り立てたいこと。家族を恐怖心を持たせたいような抽象に属する事例が犯人の意図となる。

電話をかけて相手が出たら無言で切る。などは相手がどう反応するかをスリルとして感じたいなど、電話をおもちゃにする稚拙で卑劣な遊びである。

誰も見ていない公園などで、公共施設にスプレーでいたずら書きをするのと変わらない。

一方、ターゲットに目的の欲望を持って忍び寄るのがストーカーである。「忍び寄る人」という英単語だが、自らの存在を明確にし追跡者の役割も果たす危険な存在でよく犯罪に至る。

愉快犯の犯人を特定する目安、たとえば嫌がらせの手紙では、犯人は、相手にわからないように書

いているが、知る情報の限定性に着目すれば、犯人は絞られていくものである。

石井は、この犯人は身近の三人のいずれか、特に本命に敏子と見ていた、そして恵子と亜矢子はこの事件には無関係であろうと思った。

恵子と亜矢子はすでに自ら去った女であるし、いまさら石井を振り返って利を得る女たちではない。

昏迷の絆

その後、沈黙していたあの敏子が、出産祝いを持参した。敏子は、今日は和服であった。

「おめでとございます。これで安心して仕事にはげめますね。」

と、久しぶりの会話であった。石井はこれで決まったと思った。あの犯人は敏子である。

犯人の心理では、必ず犯人は、犯行の効果と状況を知りたくて、何かのことよせて接触してくるのである。妻の節子は、医大の教授のところへ挨拶に行つて留守だった。

しばらく近況を語らつた後、石井は、カマをかけた。

「敏子さん。部落同盟を知っているかい。」石井は、とぼけて言った。

「さあ、わからないわ。」女のうそは目でわかる。

「それがどうしたの。」

「いや、聞いてみただけさ。」敏子は、探るような目で石井を見た。

敏子は、あぶない橋を渡っている。部落同盟を敵に回す危険を敏子は知らない。バレた時の彼らの糾弾はすざましいのである。

石井は、そんなにまでして自らを危険にさらし、石井にアピールしたい敏子に哀れをもよおすのだった。

その時石井は、不思議な感情に襲われた。敏子を愛おしく感じたのである。敏子は、主人と結婚周年記念の海外旅行をしたが、その帰国時に石井に言った。

「わたし、主人に抱かれていても、いま、あなたに抱かれていると思つて燃えるの。目を瞑（つむ）っていて、主人の顔なんかは見ないのよ。」

と、自分の部下の恵子と石井が、自分の留守に結ばれたことを、泥棒ネコに襲われたようになじつたが、その気持ちは、満更（まんざら）嘘でもなかつたかと思う。

敏子にとつて小悪魔の恵子は転進していき、スツキリ、クツキリしたが、当の石井からは、女を排除してしまつた。

今の敏子の関心事は、「愛人の石井が、自分をどのように感じてくれているのか、またもう一度石井は自分の胸に帰ってきてくれるだろうか。」である。

恵子のゴタゴタから数ヶ月、石井との逢瀬はご無沙汰となつていた。敏子は、改めて石井の横顔を見るのだった。

ちようど、妻の節子は外出していたので、話はしやすかったが、ここで話す内容でもない、石井は子育ての話に埋没した。

「それじゃあ、失礼します。奥様によろしくね。」

石井は、「ありがとう。」と言ったが、それは、いかにもよそよそしいセリフだし、別れ際に何かしてやらないと、二人のこれまでの逢瀬での、心と行動のありようと違ってしまうと思った。

「今日はいいわ。和服だから。」

察したように敏子が言った。

お互いに変な仕打ちをし、また受けても、ボディータッチは男女の心の緩衝ごとである。飼い犬でも飼い主のボディータッチは必須である。

短時間だったが瞑（つむ）った目を開け、和服の襟とすそを直して

「もう忘れたかとおもったわ。」

と言い、敏子は帰っていった。

別れ際の、「あした、ね。」と、いうのは以心伝心の男女の了解であった。

初めて今日訪れた石井の住宅は、植木の配置もよく、灯籠やあずまやこそなかったが心地よいはずまいであった。

駅から10分の距離は、購入価格も相当であろう。石井の力だけでは住宅の購入はおぼつかないはずだから、奥さんの実家でかなり援助したのだろうと想像した。

日曜日だから電車はすいていた。遠くに昼の富士山が、なんの屈託もなく姿を見せていた。

敏子は、帰りの電車のシートで、明日の約束したものの、石井の体力が心配だった。今日二人は、しばらくの空白をちよつとだけ埋めた。

石井は帰り際、耐え切れないように、せいて愛をくれたが、おびたしいものが入ったようであった。

電車のシートにかけている敏子は「ウツ。」と、小さく声を発した。戻り水にひざをつよく閉じた。

小林課長

妻の敏子は、石井という男によるめいている。小林はそう確信していたが、妻に問い詰めるようなことはなかった。

そのようなことをすれば、自分と敏子の間は、簡単に瓦解するかもしれない。二人は以前は仲の良い夫婦だった。

子のいない共働き夫婦のことをDINKS（ディングクス）と揶揄されるが、それは小世帯で出費が少ないうえに2馬力で稼ぐので、子だくさんの家庭より自（おの）ずから家計は有利だというやっかみである。

しかし、子がいないということは、家庭としては未完成である。なんとかとしたいと思つたが、こればかりは神のみが司るエリアだった。妻の敏子は、すでに30歳の大台にのつた。小林はすでに子のことはあきらめていた。

敏子は石女（うまずめ）であろう。昔だったら、「子なきは去る」のくちである。

小林は、敏子と10歳差の43あつた。働き盛りの歳だが、職場の責任も重い身では、ストレス解消が必要である。部下との酒のつきあいは、あまりその解消にもならず、できれば夜は早く寝たいのである。もちろん妻の夜の要求には閉口するのであつた。

数年前から、妻も自粛しているようにみえたが、実は自粛ではなく外に男を作つて矛先を外の男にむけているのかも知れない。

この間、妻の部下の恵子という娘が尋ねてきて、その話を聞き驚いた。妻の敏子が職権をかさに人道にもとる迫害を、部下の女子職員に加えているという訴えだつた。

恵子から相談を受けたとき小林は、ことの重大性を認識しなかつた。

そして、「おぼこ娘」のたわごとと、「聞きおく」程度で済ませた。しかし、考えてみると問題の根は深そうだった。すこし気になった小林は、申し入れてきた女恵子が、己が恋人と名指しする通産省の石井という人に面会した。

石井の説明は筋が通つていたので、とりあえずは、一連の事態は納得したし、肝心のその騒ぎもそのまま収まったようにみえた。

しかし、妻の敏子が、部下の恵子の不倫を止めようと画策した件（くだり）は、いまいち不自然なところがあった。なぜ恵子は、私のところへ訴えに来たのか。

小林の説明では、妻の敏子は、部下の恵子の石井への愛を、良俗に反し不倫に至るものとして善意で止めたといっていた。

しかし、結果としては、恵子が職場を追われる形で辞職したのである。恵子の辞職は本意ではなかったはずである。

それは、恵子が小林のところへ訴えてきた話の内容から分かる。恵子の口から、辞職のことなど一言も出なかった。恵子は、妻の敏子によって、辞職の強要を示唆するような迫害を受けていた。恵子は、おそらく万策尽き、イレギュラーだが敏子の夫である私のところへ、救いを求めて相談に来たのであろう。

仮に不倫であつても、恵子と石井の絆が確固としたものであれば、二人の愛を差し止めようとした敏子の意図は無に帰したはずである。

にもかかわらず敏子の意の向くままにことは進み、恵子の石井への愛は遮断された。

そこには、石井が、恵子を失つてもよい事情があつたのではないか。そしてその裏で恵子の排除を了承した石井と敏子との暗黙の信頼関係がみえるのであつた。

恵子は、石井が「恵子排除やむなし」と決断したのを察し、勝てないと悟って辞職を決意した。

小林は、そこに勝ち残った敏子を見た。では、敏子は何に勝利したのだろうか。

小林は、その答えの行く先に石井を描いていた。

小林は、敏子をめぐる石井をはじめとする人々の絡みをもう少し分析しようと思ったのであった。しかし、そのもくろみは実現しなかった。足元から小林自身の存在を揺るがすような、大事件が起こったからである。

季節は、変わり目に移っていた。梅雨のシーズンである。からっと晴れる日はなく、晴れていても空気がぬれよどむ日だった。

小林は、日常の仕事に追われていたが、部下の管理係長がこの上もない深刻な様相でやってきた。管理係長はいつもと違って課長席の小林の耳元まで接近し、ひそひそと報告した。

「部下の平田洋一君が、公金に手をつけてしまったようです。」

「公金横領」いう他人ごとでも聞きたくない異質な言葉に石井は仰天した。

夢にも思わなかった足元をすくう事故は、小林徴税課長の面目にかけて収束すべき課題となった。いまのところ、課内のわずかな職員のみ知ることであった。まずは、被害額の調査である。当事者は、他の職員に分からないよう日比谷分室の徴税資料室での、徴収データの調査を指示し、疑惑の平田職員をそれとなくルーチンワークから外す措置をとった。

内々調査を命じた管理係長の間接報告は3日後に出た。

「帳簿に五百万円の穴があき、そのほかに徴税還付金の入り繰りの処理に疑問がありそうです。」
というものだった。

小林は、五百万円と聞き、取り返しのできる金額だと思った。このほかに個人の住宅ローンが例えば一千万あっても、住宅を売却すれば済む話である。

同日石井は、管理係長とともに日比谷の分室へ出向き、本人への事情聴取をことにした。

実務の調査は業務を良く知る管理係長の手でなされたが、平田本人の陳述のヒアリングは、課長の役だった。小林は、威厳を持ってたずねた。

「このことは、言うまでもなくとも困ったことです。どうしてこんなことになったのか、包み隠さず説明してください。」

30歳くらいのノンキャリアの平田職員は、終始うつむいたままで口は少なかった。

要すれば、魔がさしたことで、目の前の現金に心の押さえが利かず手をつけたこと、私生活で金が必要だったことなど、理由はこのテの事故の定番の域を出るものではなかった。

「報告によれば、額は、五百万円をくだらないようですが、今のうちに全額返済してください。事が大きくなると課内だけでは収拾できませんから。」

小林は、この時点で、その条件が満たされてば、平田職員を庇（かば）ってもいいと思っていた。幸い数人が事故に気づいただけである。

敏子と石井

敏子の夫の小林は、部下の職員の不始末の收拾に追われていた。課内だけで処理できるかどうかは分からない。

小林は、内々、監察室にいる友人の主査に秘密だと前置きし相談した。同類の事件を多く裁いてきた監察室主査の見解は、「被害額の大小と情報の広がり程度」によるというものだった。

「メディアの知るところとなった場合は、ほぼアウトですね。公務員の場合その劣悪な待遇の割には、倫理の遵守への世間の目には厳しいものがあります。一点の曇りも許されないのでですよ。」

と応え、かつ聞きたくもないおまけの説教まで聴かされた。

小林は緘口令を敷く必要があると思つた。それでなくとも新聞記者は署内をうろろう徘徊してニュースを捜しまくっているのである。

敏子は、夫の憔悴した様子を見て、

「あなた、どこか悪いんじゃない。」

と、問うたが、夫は、「なんでもない、すこし疲れているだけだ。」と、そそくさと

出勤していくのだった。

税務署の課長の小林の出勤時刻は敏子より早かつたので、とも働きたが敏子とは一緒に出勤したことはない。

二人の出勤後は家がカラになるので、施錠や、ごみ処理、など通常は敏子の仕事である。貴重品も家には置かないようにしているが、手持ちの貴重品はかばんにいれ持ち歩くのである。だから敏子の

通勤バックは巨大である。

今夜は、石井との逢瀬をたのしむ予定である。石井ももう若くはない、以前は、興がのると2回も3回も重ねて責められたが、昨近は、一回を永くつなぐのが好みのようである。石井の奥さんの方は、永いのは好まないといっていた。

敏子が石井と会うのは新宿である。ここまでくれば同僚の目もかわせるとの見込みであった。

「変わないか。」

石井が、敏子の腰に手をまわし優しく言った。

「本当にご無沙汰ね。」

「おれはいいから、旦那さんとは、頻繁にやりなさいよ。」

石井は、小林を意識して言った。

「それどころじゃないみたいよ。課長のストレスは。死んだように眠りこけてるわ。」

騎乗から松葉くずし、バックから敏子の体を一回りして、逆の松葉から元の騎乗に戻るの、二人のワンコースである。この間、結合したままであるが、両手指はくまなく探りあい、ほぼ1時間で完了するが、敏子があわせて、開いた口から悲しそうに聞こえるしんぎんの声を発し完了する。

このような行為の表現は、神代（かみよ）にさかのぼり、神話や伝承、後の世では浮世絵や艶本、近年ではポルノ映画で現わされてきているが、もともとは優れて子孫繁栄を期する生殖行為である。これを芸術の名の下に、艶（えん）に表現しようとする人間のあさはかな試みについて、大正期の

作家、白樺派文学の文豪の有島武郎（ありしまたけお）は、

「生殖は、本能による純粹なものである。しかるに、女は、誤つて知的生活に妥協したため、生活上の欲と生殖とを混同した。男は、卑しくもそれを使用した。」と、書いている。

文豪といえども、男女の倫理を正面きつて、露骨に表現するのをはばかったような、いわば奥歯にものが挟まった文章である。

端的にいえば、「近代人は、男女の問題を必要以上に複雑化してしまった。」と、いう意である。

「主人は淡白なの。」敏子は、さめやらぬ残り火をシャワーで消しながらポソツと言うのだった。

互いにシャワーをかけ合つて着衣が終わると、二人は顔を見合せて笑い、この時点で現実目覚め、一人ひとりにもどるのである。

ほの暗いネオンを避けて、表通りに抜けると急にまぶしくなった。

気がつけば、ライトアップに公孫樹（いちよう）のみどりが光っていた。虫の音が、闇をみだらにし、大地からは太古の泣き声が聞こえるような気配だった。

ひとしきりの風が二人を包み、なにかのおち葉を吹きちらしていった。

敏子と別れ、すぎ間なく埋まった電車に乗ると、石井は酔客にまぎれて吊り革にぶら下がった。

玄関灯にかげつた門扉の音が響くアップローチを抜け、節子の顔をすこし避け気味に玄関にはいる

と、何も知らない節子が

「おかえりなさい。」と、迎え入れた。子はすでに眠っていた。

床に入った石井は、節子を放置せずいつもの正攻法でその存在を確認しあった。

今夜は敏子に吸収され、めげそうな性欲だったが、まだならし運転中で半熟体の妻の節子には、かえって適度な刺激であったようだ。

敏子と違って節子は避妊が欠かせない。節子は、妊娠しやすいタイプなのである。

翌朝、石井の買った新聞には、税務署の汚職の記事が載っていたので石井はハツとした。

記事は、中央税務署が名指しされ、約五百万円の使途不明金を報道していた。石井は、まさかとは思ったが、この続報に注目することにした。

加害と被害

その前夜小林は、敏子の帰宅より遅かった。12時過ぎにタクシーで帰宅したのである。

「遅かったのね。」

「署でまずいことがあってね。部下の職員が使い込みをしたのだ。」

小林は吐き出すように言った。その対応で全管理職が足止めとなった。

すでに報道担当から明朝のN新聞の報道の予告は入っていた。他紙が追従するか情報待ちだった。明日の朝刊での報道は、このN紙だけだと判明した。

しかし明朝は、各社が押し寄せるだろう。記者会見も設定せねばなるまい。早朝から、全管理職の召集としばり（待機）が命令されていた。

小林は、いずれから情報が漏れたか不思議だった。

小林は、上司の署長の指示の下に、使い込んだ五百万円の返済を平田職員本人に迫り、早急に返済する段取りに合意した直後であった。平田は、住宅の売却もやぶさかではないと言っていた。

そこまで済めば、部下の平田は救えたのだが、報道されてしまったら、万事休すである。刑事事件として拘禁もありうる。本人は休職となり、起訴でクビをさらされる。

裁判では、使い込み金の返済の有無が量刑で考慮され、返済がされない場合は、別途に署から、民事の訴訟を提起せねばならない。

これからの対応を思うと、小林は胃が痛む思いだった。

このことを知っている数人のうちの誰かが、情報をリークしたのに違いない。

守秘義務が課せられる内部情報だが、近年は、内部告発を奨励する動きの方が優勢である。

疑惑の平田職員に個人的恨みを持つ誰かが、意図的にメディアに内部告発として情報を漏らしたとしても、告発者に対して守秘義務違反を問いくい雰囲気である。

三日前のこと、石井の尋問に平田は、

「全額返済したいが、当面準備できるのは、三百万円程度です。」
と、応えた。

小林は、残りの二百万円は、自分が身銭を貸すことで五百万円を返済させることまで考えたのである。平田が「当面」といつている三百万円も本人が、現金として持っているのではなく借入金である。

報道されることにより、氏名が明らかになれば、予定したその本人の借入金の借り入れ事務は空分解して一切借用不能になるだろう。

署の被害額は五百万円全額ということになるのである。もちろん平田本人は、懲戒免職で退職金は一切支給されない。仮定退職手当額は、被害額とおなじ五百万円であった。

すでに調査の中では、住宅資金や一般貸付金、銀行ローン合わせて一千万円もの負債が明らかになっているのである。

職員の非行で公金に被害が出たときは、被害額を確定して、ともかくどんな手段でもいいから公金を返済させ、しかる後に後処理をするのがやり方である。

このとき非行の職員が返済金の調達をするためには、上司が立ち会ってでも早急な手を打たねばならない。発表を先行すると、本人が金の調達が困難になる場合もあるから、初期の対応は秘密裏に本人と密着することである。

まごまごしては本人が拘禁されて動きがとれなくなったり、逃亡したり、最悪自殺に及ぶこと

もある。

今回は、いずれかからマスコミにリークされた最悪のケースである。

本人の苦悩も限界であろうが、署がともかく優先して確保したいのは公金五百万円である。

翌朝は、東の空が赤く焼け、不吉な雲が張りついていた。

予想通り、早朝から各新聞社が署へ押し寄せた。N紙に出し抜かれ焦ったメディアはけんか腰だった。

小林のもとには、ニュースをみた警視庁から、事情を聞きたいと刑事がやってきた。

「事情は判りました。このような場合、本人の身柄をはやく確保した方がいいですよ。もし、自殺でもしたら、元も子もないですよ。」

刑事は、平田の居所を執拗に聞いた。

「任意同行で、本人の身の安全を確保しましょう。」

刑事は、さらに言うのだった。

小林は、上司に相談し、刑事の忠言に沿うことにした。使い込みが発覚した時点から、平田は職から外され日比谷分室へ仮配置したのである。しかし現場の係長からは、今日はまだ出勤していないという報告であった。

自宅へ電話したが、いるはずの奥さんは電話に出てくる様子がなかった。自宅にも電話攻勢がか

られているのだろうか。警察が自宅を訪問したが、在宅の気配はないと聞き、小林は万策尽きた思いだった。

警察は、メディアの追及から逃げたか、パニックで逃亡したかいずれかだろうと断じ、早急に正式な告発をするよう勧めた。

昼になって、署長名で平田洋介職員の告発状が出され、警察が平田確保の動きをみせた。直後に記者会見が開かれた。

使い込み本人の氏名、被害額と、本人の逃亡が発表され、平田は名実ともに容疑者になったのである。

逃亡する者

石井も敏子もテレビのニュースでこの展開を知ることになった。しかし二人とも別に、この事件の直接の関係者ではない。二人の身近なあたりで、公金横領事件があった。というだけのことだった。

敏子にとっては、主人が容疑者人の上司だったという点が、悩ましくもあった。当然ながら、監督ミスという落ち度である。

いま小林徴税課長は、事情聴取や、後対策で死ぬほどつらい境遇にあるはずである。

そして、その後には、国家公務員法による懲戒処分が待っている。その制裁は、免職、停職、減給、戒告のいずれかである。

「直属の上司でありながら、君を助けられず申し訳ない。こうなったら、もう逃げられるだけ逃げ続ける。」

小林は、心の中で叫んでいた。

容疑者と呼び名を変えられた平田は、自分のローンと、仕事場から持ち出した公金の合計額の、ほぼ一千五百万円を負債とすることになっていた。

しかし、住宅を売却すれば充当できる返済可能な金額である。公務員を懲戒免職され、すべてを裸にされる制裁を受けても「罪こそが憎まれる」のであり、本人の若さを生かせばいずれ不死鳥のように再生できるはずである。

しかし、平田本人の生涯の収支決算をみれば、五百万円の着服を臨時収入と計上しても、引き換えに償う莫大な有形無形の損失を差し引いてみれば、経済効果として成り立つものではない。

小林は、部下であった平田職員を哀れに思った。

途方にくれる小林を、執務室の喧騒と電話の音が、たばこの煙りと混濁して揺らめくように幻惑していた。

今日の夕刊には、あつてはならない公務員の犯罪が紹介され、国税庁の幹部のお詫びの記事が飛び交うであろう。

街角の新聞売りは、まだ紅葉期には早い。とうかえで並木が、海側からの風を受けてざわめいて
いる夕暮れのなかにあった。

そして暮れない太陽が心なしか、めげるように落日する風景を見せていた。

その年の暮れ、公孫樹（いちじょう）の金色の葉が歩道に敷き詰められ、暮れの薄い日光がぼんやり
都会を映し出ころだった。

国家公務員法による公金横領事件の一連の処分が出された。刑事告発中で逃亡中の平田洋介は、懲
戒免職すなわち公務員の最高の懲戒処分である。直属の上司の小林は監督責任で減給3ヶ月、署長は
戒告で決着した。

逃亡中の平田容疑者は、この寒空にどうしているだろうか。打ちひしがれ肌を寄せ合い絶望の極み
であろう。

小林は、部下に裏切られ、不利益な処分まで背負わされた身であるにもかかわらず同情を禁じえな
かった。そしてつぶやいた。

「もう、こうなったら、逃げまくって死ぬ気で生きぬけ。」

みんなすまじき宮仕えに身をおく同じ公務員である。運命の神の手違いだ。

東京の乾燥した寒風を受けて街を歩く石井には、骨の髄までこの寒さが凍みこむのであった。

検査入院

小林は、重なる労苦に耐え切れず病に倒れることとなった。職場の検診では、骨髄性白血病が疑われるという指摘を受けたのである。

以前から、風邪だと思っていたが、なかなか熱が下がらなかった。それに全身に倦怠感があり息切れと貧血症状が顕著であった。健診では数値異常が指摘されたが、早期発見ならば軽度であろう。

「しばらく検査入院してください。」

主治医は冷たく言った。

「一般に、この病は重症化すると、白血球細胞が増加して症状の拡大します。脾臓、肝臓やリンパ節などに浸潤して臓器腫大をきたして、いろいろな症状が現れるようになります。」

検査入院は1週間と宣告された。

敏子は、夫の小林の検査入院を知らされて動転した。そういえば半年前から、顔色が悪く、疲れた様子だった。

殊に最近は、心労が重なっているようだった。

指定された北部医療センターは公立病院だが、設備はどうだろうかと気になる敏子だった。

翌日、小林と敏子は、入院の手続き方々北部医療センターへ出かけた。このまま入院してもいい準備はしてあった。

北部医療センターは、ゴルフ場のように広い芝生の敷地に、病棟がいくつか並んでいた。

ところどころに支えをつけて植栽が施してあり、散歩もできそうだった。

小林は、そのまま入院することになった。

「奥さん、検査だけですからご心配なく。とりあえず3日後に一度おいでください。検査結果の一部が出ていると思います。」

医師が、敏子にカルテを見ながら言った。

「昼過ぎに病室に入ってもらいますので、ご一緒に昼の食事でもして、呼ぶまでお待ちください。」

医師は、たとえ3日間でも、別れることになる夫婦に気を使ったようだった。

「食事しても大丈夫ですか。」

「送られた検診のデータを分析して、専門医と打ち合わせしてからですから、今は食事をとつても差し支えありません。」

病院の食堂で向かい合い、夫を眺めた敏子は、そのやつれに改めて驚いた。

「検査の結果が、大したことがなければいいですが。」

「ま、やつてみなぎやあ分からんがな。」

小林は、久しぶりの敏子との食事にテレているようだった。

「病名が気にいらんなあ。白血病とは。広島の原爆を思い出すのお。」

敏子は、夫を病室に入れると、帰宅の途についた。色もない正月の空だった。モノクロ写真のよう

な冬の雲が空いっぱいになり、雲から風が落ちてくるように吹いている絵だった。

家に着いたのは夕方の4時ころだった。まだ石井は、職場にいる時間である。

石井は、その電話にすぐ出た。

「主人の検査入院して、今、帰ったところです。」

「どこが悪いのですか。そうか、あの事件でお疲れですね。」

石井に、一応の説明をした敏子は、テレビのニュースで小林の署で起こった横領事件の容疑者が、あれから数ヶ月経過したがいまだに確保されていない、その続報が流されているのをみた。容疑者の自宅は施錠したままで、夫婦ともに消えてしまった不思議を報道していた。

検査入院の後、診断は検診で疑われた骨髄性白血病は、その兆候はあるものの直ちに発病する気配はないという、一応、ホッとするものであった。

しかし、別に深刻な病名が告げられたのである。別室で医師が、とまどいながら言ったのは、

「小林さんは、近頃文字が乱れるようなことはありませんか。」

意外な質問だった。

「気がつきません。」

「3日間の検査で出てきたのは、ご主人にALSの疑いがあります。筋萎縮性側索硬化症といいます。これは難病に指定されておりまして、残念ながらもまだ病気の正確な原因はわかっていません。

病気のことを少し説明します。皆さん一番困っていらっしやるのが、手足の力が入らないというこ

とです。手の筋肉が痩せて萎縮してくる、これが一番多い症状です。足の力が低下すると歩行困難になります。その次に困るのが、舌とか咽頭筋、つまり、飲み込むための筋肉が萎縮することです。呂律が回らないという構音障害や、あるいは飲み込めないという嚥下障害などの症状が発現します。そして、食生活が困るようになります。さらに呼吸困難のため人工呼吸器が必要となります。」

聞いているうちに、敏子は絶望的な衝撃に襲われた。

「主人が、そうなるのですか。」

敏子は、やっとの思いで聞いた。

「樂觀的なお話は、医師としてできません。説明したとおりに理解してください。」

「仕事もできませんね。」

「半年、1年くらいで、字が書けなくなり、通勤も介助が必要になるかもしれません、まだしばらくは歩けます。公務員だったら、病気休職が最長3年くらいでできますから、半年後くらいを目処に病気休職されたいかがでしょうか。」

気分が悪くなるような宣告だった。

「主人は、自分の病気を知っているのですか。」

「奥さんに、お話してからと思ひまして、骨髄性白血病がセーフだったことだけを話すにとどめています。今日は事後処置がありますので、明日昼ごろに退院してください。」

医師は気の毒そうに言ったが、敏子には、死刑の判決だった。今日は、とても小林には会えないと

思った。夫が、無病息災の検査結果と安堵しているところに、自分が、打ちひしがれた態で行って、どんな会話をすればいいのか。

敏子は、今日は病室を避けて帰宅することにした。

暖房の病院から出たとたん、横から寒風が襲った。通路は暗かった。グリーンの広い芝生のスペースに、水銀灯がいくつかが宵を打ち払うように点灯していたが、寒風は容赦なく、絶え間なく吹きつけて水銀灯を消しにかかっているようだった。

電車のシートにもたれて目を閉じた敏子は、ぐるぐる回る思考を一つに絞ろうとしたが思考はまわり続けた。いま、敏子は浅い波と波の間でおぼれているような気分であった。

夫婦の絆

石井から電話があった。

「旦那さんの検査の結果は出たのですか。」

敏子は、今日の検査結果のショックで落ち込んでいたこともあって、話は弾まなかった。

「うん。よくないのよ。」

石井は、それ以上聞かなかつた。敏子は、明日退院すると告げた。明日は、小林は、医師から宣告を受けるのだ。

石井は、敏子にとつて、心底ほれた永遠の愛人ではない。第一、互いに配偶者がいる身である。生活の情性から生まれた怠惰な妥協で馴れ合っている関係、いわば近くの水道である。渴けば隨時手軽に水を飲める便利さを互いに利用している。

お互いに、気心の通じた友人になりうる愛人であるが、それぞれのもつ配偶者のピンチは、法的には愛人には何の責任もないハナシである。

石井は、敏子の夫の病には何の責任もないし、敏子も、石井の妻の出産には何の責任もないのである。石井が、敏子に問うた夫の病の状況は、二人だけの都合を問うものであった。

今日、小林は医師に、不治の病の宣告を受けるだろう。そして明日、敏子と共有した情報で、今後の生活設計を再構築せねばならない。そこには、神さま以外に頼るべきオーソリティーはない。もちろん愛人の石井にさえもである。

数日後、石井は敏子の相談を受けた。

「夫は、難病です。半年後は歩行もできなくなるようです。まもなく字も書けなくなるし。」
 「その病は僕もよく知っています。」

石井は、気の毒そうに返した。

A.L.Sは恐ろしい。石井は、信州の叔父さんが同様にこれを患い闘病中であるが、余命5年とみられている。ついこの間まで薫陶を受けた叔父だった。

「いのちのあるうちに、もういちどおまえにあえるといいね。」

と、震えた文字で来た手紙は、涙するものだった。あまりのいたわしさに、その後訪問することも石井の恐怖になっている。会えばそれが末期となるう。

石井は、もつとあとまで叔父と会うタイミングを延ばせば、叔父の生命の余韻も比例して延命するのではないかと、ギリギリのはかない思いをしているのであった。

思えば、人間の一生などはかないものである。石井のこれまでの生涯でも、すでに物故した友人は十指を数える。

敏子の夫の小林が、先に疑われた骨髄性白血病では、石井の友人の作家の桐山襲や、石井の高校の恩師や、身近な従兄弟（いとこ）がいた。死亡率百%といわれ例外なく数年で没していった。

33歳の敏子は、いまだそのような人間の宿命を悟る域には至っていないであろうし、敏子の前に大岩のように立ちちはだかる介護の壁も、臨場感なく茫茫とした視界に沈み、乗り切る困難さも分かっている。

半年後、小林は、車椅子の生活だった。税務署徴税課長の激務が祟（たた）ったとして、診断書に基づき長期休職が認められたが給料は半減した。

休職は、1年ごとの更新を経て最長3年までの休職が可能だが、再起不能ならば失職となる。

退職は「退職届け」という意思表示で職から排除される辞職の承認だが、「失職」とはいやおうなく一方的に職から排除される扱いである。

病の進行は、3年くらいで呼吸器に麻痺が生じ、生存まで脅かす病である。小林は、はじめに医師が説明したとおりのコースをたどり始めていた。

敏子の生活は、それまでとはまったく変貌していった。

長期の病人を抱えた勤労女性にとっては、時間も金も実に苦しいやりくり算段の才覚を要求され、人形のように動けない夫の介護は、重量挙げのバーベルを持ち上げるような苦痛を課せられるのだ。た。

日を追うごとに、敏子は介護にも慣れてはいったが、慣れると慣れから生じる余暇が、かえって余計な思いを湧出して心を乱すきつかけになりかえって苦痛だった。

夫の部下の公金横領事件からもう一年を超える季節になった。ふと見ると、金色の公孫樹（いちよう）が今年も葉を撒き散らしていた。

去年の晩秋のころ、夫の小林は、マスコミに迫られ、警察にせつつかれ、その結果体調に狂いを生じた。あの事件以来、ひとつも良いことはなかった。

敏子は、愛人の石井の顔を思い浮かべようと金色の落ち葉を歩いてみたが、以前のように燃え上がるものはなかった。

婚活の風景

石井は、敏子との逢瀬を遠慮していた。敏子には伏せているが、一年前石井は、敏子の夫の小林の訪問を受けていた。あの時は、敏子の部下の恵子が、小林に私的に面会を求めたその事情に、石井が絡んでいるとして、小林はひそかに石井に会いにきたのであった。

そのときの二人の間の会話は穏和にみえたが、小林は妻と石井の関係を言外に疑うそぶりがあった。

その後小林は、部下の公金横領事件で多忙になり、仕事に忙殺された。り病した難病が激務の公務に関連を持つかどうかは分からない。

小林さんが不治の病に倒れた翌年の春が来た。

年中行事の4月の入省式が、今年も行なわれ、官僚の卵や、ノンキャリアの新入職員が各職場へ回されてきた。

紅潮した顔で、新任の挨拶まわりがひとしきり職場をにぎわすのである。

同時期に女子大学生や世では無職だが、婚活中の娘たちの臨時雇用も行なわれ、職場は混雑する。

これらは、臨時職員と呼ぶアルバイトである。日に2度のお茶汲み、コピー、書類の回付、電話の受付、など雑用係である。

これらの女性は、仕事より婚活が目的で通産省のアルバイトに応募するのである。

まさに東大卒狙いで人脈を形成する。彼女らは、横のつながりも密で、石井も知らない属人的情報を持っている場合もある。

独身キャリアの出身地や、住居、家族、親の職など調べ上げて、色香を交えてアタックするのである。

しかし、キャリアもさるもので、こんな連中に引つかかるウブなのは少なく、政治家の閥閥（けいばつ）良家の娘婿）を狙うとか、もっと上向きが多い。見ている石井には、どうでもいいことで興味もないことであつた。

そんな折、アルバイトに来ていた律子という女から、職場の男性職員のことを聞かれた。

この娘も目的は他のアルバイトと変わらないが、一見魅力的な風貌があつた。石井は、

「オレを狙つてもだめだよ。妻帯者だよ。」

と、あらかじめ予防線を張つた。

「わかっています。独身と既婚の別は、みんな分かっているのですよ。」

と、恐ろしいことをこともなげの言うのだつた。

聞いてみると、中林製作所の東社長の一人娘の東律子と名乗つた。中林製作所は、世界に誇る日本の工業界のエースである。

「別に、役人を狙わなくても、お父さんの威光で、社内にはいくらでも候補者がいるだろうに。」

「父の主義は、自分で伴侶を探せというものです。社長の威光みたいなことは大嫌いな性分です。だって、お雇い社長なんですよ。通勤時の会社差し回しの社長車だつて、いらなさいといつていました。途中駅で車を帰して、自分は途中駅から電車に乗つて会社へ行くのです。」

「じゃあ、なぜ、君は役所でアルバイトなのですか。」
「社会勉強のつもりです。」

応えた律子は、学習院大学の卒業生だという。母に先立たれた社長の父は、律子の養育のために後添えを得た。

長じた律子は、後妻を嫌い、敷地内に別棟を建ててもらって別居もどきの生活をしているのだという。

はなしの端々で、極端に感情の強弱がみられるのは、この娘の神経に病むところがあるのかもしれないと感じる石井であった。

律子の家庭内の人間関係は、父親も頭が痛いだろうと容易に推察できるものだった。

律子が話す身の上はなしは、社長である実父に真心（まごころ）と慈愛を求める心情のようだった。

石井はすでに、愛人の敏子を失っていた。今日の律子との一時（いつとき）の話しのふれあいは、お互いの傷をなめあうものに転化していくのだった。

自然の移ろいは、人心によくも悪しくも安らぎをもたらすものである。桜のシーズンは過ぎ去ったが、いまは、いつせいに色とりどりのいろいろな花が咲くシーズンであった。

偶然ではあるが、律子の自宅は石井の宅と同一方向であった。なんとなく同伴で帰宅の途についたが、そのまま収まらなかった。律子は。

「もう少し、お話を聞いてくださいませんか。」

と、石井をさそった。石井の優柔不断では、きつぱり断れないのであった。

律子のその願いを聞きながら、漠として頭をよぎったのは、今の手持ちのお金と今宵の行動範囲のことであった。

この時間、素面（しらふ）で話はできない。なじみのボルガという珍しい名のビル建ての焼き鳥屋が舞台となった。

「お父さんのご出身は地方ですか。東京ですか。」

と、石井は尋ねた。

「加賀です。東大の工学部から、中林製作所へ入ったのです。」

律子は、早世した実母の面影を語った。後妻は、よく面倒を見てくれたが、いまだ心に受容できないものがある。それは自らの亡母への思慕が邪魔するのだという。

何ひとつ不足ない経済的にも恵まれた良家で育った律子であった。しかし、心には癒えない傷跡が残り、ときに応じてその傷口がひらいてしん吟するのである。

「帰りたくない。」

律子はつぶやいた。

律子は処女ではなかった。一旦、自分を開いてしまふととめどない流れとなるタイプであった。

そそり立った石井の棒にサイドから口つけし、そのまま石井を含みこむような手馴れた愛だった

が、敏子に備わっていたその巾着のようなわれ口の絞め回しはなく、平凡ですこし大味のもの足りなさがあった。それでも敏子と同様のワンコースを試行してみた。

「石井さんを堪能したわ。」

律子は歳にあわずそうだったが、陶酔に達した気配はなかった。

過去に、神に仕える神学生を家庭教師に迎えたが、神学生でありながら情を通じることとなり、ほぼ夫婦のように日々セツティングを続けたという。

石井は、多分それは実母を失った不幸な環境から由来する、律子の側からの発起によるものだろうと思った。このスケベな神学生は、これがバレた後、律子の親の追及で神学校を放校された。

律子は、その一連の事件のショックがトラウマとなつて、神経を病んだらしい。

律子の体は、すでに神学生によりいやおうなく開発されていた。律子は、ことさら男が好きというわけでもないが、強く迫られれば開くのにはやぶさかでないタイプである。

だからその後律子は、幾多の男とのふれあいには抵抗はなかったが、その感度については、病んだ精神が抑制したらしくいつも冷静だった。

今夜の石井からの愛が、私の体にどの程度の刻み込みとして残るのだろうか。

神経系の病の安定剤は、その副作用ともいえる効果で体がまるくなる。その影響だろうか律子は瘦身ではなかった。

また、ときどきあらぬ妄想に脅迫感を覚えることがあり、いつぞやのアルバイト先では、

「いつ私は昼に出られるのですか。」

とか、

「いつクスリをのんだらいいですか。」

など方向違いのあらぬことを上司に問うたので、気味悪がられて初日の始業から3時間で解雇された。そのシヨックもまた相乗的に重荷となつて記憶に刻みこまれ蓄積された。

今宵の二人の帰路の薄暗い公園には、連翹（れんぎょう）の黄色がいつばいに咲き香っている春の絵であつた。

律子その愛

律子は、愛を紛（まが）つて男を遍歴していたが、結婚の夢は持つていた。20代も後半となつていたが、親筋は、律子の精神面の不安定を熟知しているせいか、総じて説教や束縛は避けて、外から見守るポジションで対応していた。俗世では、

「がんばろう。がんばって。」

などの言葉が普通に使われるが、神経症の人には、これが一番カンにさわる言葉になる。だから親や身内は、ガンバコールにかえて、

「むりのないように。むりしないで。」

と、言うことにしている。

後妻の和子は、律子から排斥され、疎まれる立場だったが、言うべきことは言わねばと、めげないで果敢に警告したのだった。

「律子さん。妊娠には気をつけてね。」

律子は後妻の言うことにはすべて反発した。そして、後妻を、母とよばず、母とも思わず、呼ぶときも「和子さん」と名前によぶのだった。

自分の部屋には拡大した実母の巨大な肖像を掲げていた。それは半分は後妻へのいやがらせであった。

後妻の和子が、その環境に耐えられたのは、ひとえに夫の依頼と愛と励みだった。

大会社の社長職は、帰宅後も刻々容赦なく世界中から連絡が入り、即、判断が迫られる事案が多い。

社内の重役とのホットラインは頻繁に交わされる。このコミュニケーションを裁くのが秘書役の後妻の和子の才覚であった。

「山本君に電話しなさい。」

突然、社長である夫は命令するのである。

「山本副社長ですか。東でございます。緊急のご連絡です。お願いします。」
後妻の和子は、有能な秘書職を兼ねた妻であった。

しかし子の側の律子には、そのような存在や、やり取りはどうでもいいことで、自分の埒外の世界だと思っていた。

興味があるのは、その日その日でめまぐるしく変わるが、アルバイト先の男性や、身につけるものの調達などの自分の世界であったし、律子の生活は親の心子知らずの典型であった。

先日は、アルバイト先の石井さんにつかの間の愛を受けた。私は女としては大味（おおあじ）だとよく言われるから、石井さんにはもの足りなかったであろう。それでも石井さんにはほかの男性にはない甘さがあり、新しい男の味を教えてくれた。

力まかせででない愛のやさしさが、壊れた私の女の機能には好ましい。

あの人に素直に従えば、よいお婿さんを紹介してくれるかもしれない。律子は、その方面での石井から恩恵に期待した。

しかしすでに両親は娘の結婚をあきらめていた。だからこそ両親は、おなじ敷地に律子の独立家屋をつくって住ませたのだ。

翌日石井の職場で律子は、「かきもの（経歴書）」を石井に渡した。内容は、立派で非のうち所のないものであった。系は、超一流企業の社長令嬢であり、学歴は学習院大、職歴はなし。となっていた。

はじめてこれを見る人だったら、飛びつきそうな経歴書である。あとは、見合いの席で、どれだけ人物アピールができるかがキーである。

しかし、過去数年来この「かきもの」を数十回にわたってまわしても結果が出なかった事実は、人物に懸念があつたからであらう。石井もそう思った。

石井は、この「かきもの」を、そつと引き出しにおさめた

石井はこうなつた以上、律子を安定的に結婚させ、自分は後見するような形で穩便な身の引き方をするのが理想だと思つた。

そろそろ昼になるころであつた。職員が、一人、二人とランチに出かけていくのが見えた

数日後の夕食時、ふと律子を思い出した石井は、妻の節子に問うた。

「君の弟は、結婚話はどうだろうか。学習院出のアルバイトの娘がいるんだが。」

「弟は、偏屈ですよ。どんな人ですか。」

妻の節子は、あまり乗り気ではなかつた。

「このあいだのお見合いでは、二人になつたとたん、話もできないで黙つたまま。」

相手も、間がもたなくて気まずかつたみたいです。」

と、過保護で育ち見合いで一人では話ももたない、ただ高学歴が取りえといえれば取りえの男である弟を語つた。

「たしかに。あの性格ではなあ。」

節子の弟は、実母の育児の失敗でマザコンの気(け)がある。東大卒で一応は一流企業にいるが、

律子を男にしたようなバージョンのタイプであった。

義弟について、胸を張って紹介できる部分は、唯一学歴だけである。二人が一緒になっても実生活がうまくいくはずがない。三日ともたないであろう。

ハブニングと離職

今年も梅雨のシーズンとなった。その日は、朝から、そば降る雨が霞ヶ関に煙っていた。

律子が出勤できないとの連絡を聞いた。

「なにか事故らしいですよ。」

受付けた職員は、詳しくは分からないようだった。追って律子の母と名乗る女性から石井に直接電話があった。

「すみません。娘が車で人身事故を起こしまして、人をハネてしまいました。後処理で今日はお出勤できませんので。」

というものだった。律子は、3日後に出勤した。

「また、被害者が入院中でお見舞いとお詫びとで私が通院中です。」

律子の説明では、被害者は中年女性で、怪我の程度は打ち身だが、跳ね飛ばされたショックが大き。大家（たいけ）のわがままな奥様らしく、「跳ねられた。はねられた。」と病院中に大騒ぎをしているということであった。

律子をはじめ、母の和子も病院で謝罪し、相当の見舞品を現金も添えて持参したのであった。

おさめ話は収束する気配だったが、律子の失言があった。律子としては、精一杯のきもちだろう

が、世間の常識にアンバランスな律子らしいドジな発言であった。

「おいそがしい奥様に、神様がくれた休日と思つてゆっくり療養してください。」

と、言つたとたんに被害者の顔が凍りついた。怒号と何かが飛んできた。言つてはいけないセリフであつた。

「なにが、神のくれた休日だ。お前がくれたんだ。二度とくるな。」

と、示談は硬直した。律子の失点である。

父も怒つて、律子に運転を禁止した。これは至当な措置であつた。精神に少しでも弱い部分がある人は、自動車の運転を控えたほうが良い。

失点を重ねる自己嫌悪へのリベンジができない律子の心の傷が、今回の事故を通じてまたひとつ増えることとなつていった。

石井は、ある意味では律子は危険な女だと感じていた。倫理の抑制の欠如は実母の喪失をきつかけとする精神的なトラウマであろう。

失点を補うため、さらなる稚拙な誤りを重ね、身内や石井をも巻き込むと大きな失点を、自分では思わず知らずに犯してしまう危険がある。

律子は、仕事のやりもれやミスが多い一方、よかれと思つてする行為だろうが物事の軽重が分らず、的外れで程度を超えた石井が困惑することをやるし、石井の評価を得ようとするスタンダードプレーにみえる行為などもあつた。

石井は、律子のアルバイトも早くやめさせたほうが良いだろうと考えた。仕事の環境への慣れが律子をだめにしていった。

「君は、仕事をよくやってくれるんだが、おなじところで永いのは良くない、転職を考えたらどうかね。君ならこの官庁街のどこでもアルバイトで通用する。」

このころは、いろんなメディアで、転職ブームのキャンペーンが行なわれていた。リクルートなどの単語が飛び交ったところである。

ほぼ十年ごとに流行も思潮も変化し、社会的な価値観も変わっているのである。それまでは終身雇用を善としていて、安易に転職するのは、尻軽で軽薄な人格の象徴のような評価を受けたものであった。

律子も現今のこの波を知っていて、流行には聡い女性らしく律子も、「転職」という流行語に食指を動かした。

官庁間の内部情報では、厚生省の統計課や郵政省の出先でアルバイトを募集していた。石井は、厚生省の友人に律子を紹介し、翌月には律子は厚生省で雇用されることになった。

縛られた嫁

敏子は、石井とおなじ建物で勤務していたが、夫の小林の罹(り)病以来声をかける程度に控えて

いた。

敏子も、石井に寄ってくることはなく、もう過去の人に近かった。小林課長が戦列を離脱したのは、夏も近づくころだった。すでに3年を数えた。3年とは、春夏秋冬12回の季節の移り変わりである。

敏子の義務感は夫に向けられ、介護に励んだ。

ふと、冬枯れたこずえを眺めるとき、夫は回復するのではなく、徐々に去っていく実態にハッと、むなしさから無気力への絶望の道程を自身に見た。

この3年、敏子は、年々重くなる夫の介護に一喜一憂の年月だった。

3年経過した今年、ついに許容の休職期限も完了し、夫の小林は自然失職のやむなきに至った。

小林は、年金年齢の60歳に達してはいなかったが、すでに20年の勤務で年金の支給権はあったので、障害による年金の「若年停止解除」の認定を受け、46歳で来月から退職年金が支給されることになっていた。退職年金に代えて障害年金でも受給可能であろう。障害年金は無税である。

年金の若年停止というのは、誰でも20年勤めれば年金権が付与されるが、年齢が支給年齢の60歳に達するまでは、仮に退職しても年金は支給されない。

これを「年金の若年停止」と言う。ただ、退職時に障害者になっていたときは、指定医の診断で、この措置が解除され46歳でも年金が支給されることになっている。小林元徴収課長は、28年の勤務実績に応じた年金をもらえることになったのである。

部下の公金横領事件の責任をとらされ、またその後始末を余儀なくされ、身も心も打ちひしがれて、さらに病魔に冒されるという不幸中の不幸であった。この失職で役人生活に区切りがついたのである。

一方で、細君の敏子は36歳の女盛りではある。石井は、夫が病とは、不幸なことだと同情を禁じえなかった。

ALSの患者は、筋肉の麻痺が全身に及んで動けないが、その分、聴覚視覚などは鋭敏だという。常時声をかけながら介護しなければならぬ。

それでも敏子は、夫婦の義務感で誠心介護を続けたのであった。

敏子が相談したいことがあるので聞いてほしいと言ったのは、アルバイトの律子を厚生省へ「転職」という名で送り込んでホツとした後だった。

「石井さん、私、夫と離婚しようと思います。」

石井には、敏子の生活を投げ出したい気持ちがよく分かった。

「旦那さんを、どうするのですか。」

「小林の生家へ託します。」

敏子は、毅然として夫の遺棄を口にした。

「余命は、あと5年です。3年になるかもしれませんけど。でも、私にはもう限界なのです。」

敏子が、夫の失職を契機に、敏子自身の再出発を図ろうとしている気持ちは痛いほど分かった。小

林は不治の病だが、失職に当たって退職金が出ることになったし、年金も来月からもらえることになった。

つまり小林は、独自の生命維持のための経済的な最低要件が整ったのである。

言い換えると、敏子の離婚の環境は整った、ということであった。これらは誰にも責められない運命であった。

人道上も状況が許すなら、小林との夫婦関係をここで解消するのはやむを得ないのではと思う石井であった。

すでに小林夫妻の通常の関係は3年前の、小林の罹病をもって途絶えていた。もつとも、それを遡る数年は、敏子は石井の隠れた愛人だったので、夫とは同衾したがセックスはまばらだった。

夫婦のいづれかが病に倒れた場合、夫婦の絆の行方は多様である。

離婚の正当な理由のひとつに民法でうたう「婚姻を継続しがたい理由が生じたとき」との条文があるが、これは、小林夫妻のように不治の病のり病などが該当するのであろう。

「で、敏子さんとの離婚後は、小林さんを誰が介護するのですか。」

「小林には、兄、妹がいます。離婚すれば、いやおうなくそれらの身内の役割になるでしょう。」

「それなりの手段があるならば、敏子さんが今後一生涯泥をかぶることもないでしょう。あなたは、この3年間、身を粉にして介護したのですから。」

この3年間、兄、妹は、数回おざなりな見舞いに来ただけだという。兄弟は他人の始まり、と言う

が、嫁であることを理由にすべてを敏子にかぶせた身内は薄情だったのだろうか。それとも嫁のエリアを侵害せぬよう気を使ったということだろうか。

それぞれにそれぞれの理由があるだろう。夫婦のことは、夫婦で決めればよい。

確かに敏子は3年間、すべてをかなぐり捨てて介護に当たった。石井という愛人からも離れていたのだ。

それは、戸籍という一片の紙切れがなせるわざである。日本の家族は夫婦単位という「縛り」を制度化し、夫婦の自助、互助を強制し安上がりに人心の安定を図ってきたのである。

敏子は悩むことはない。そもそも夫婦は他人だったのだから、夫婦関係を戸籍上解消すれば、敏子の介護の苦痛は解放されるのである。

「明日、裁判所へ離婚を申し立てます。」

敏子は、毅然として石井に言った。石井は、敏子に愛人復活を迫られたような波動を感じながら、敏子のその宣告を複雑な気持ちで聞いていた。

恵子ふたたび

秋も深まったころ、殺風景な都心にもそこはかとなない秋の風情は見られた。秋を告知するのは、金色の公孫樹（いちじょう）の落葉である。

これを見ていると故郷の諏訪湖畔の片倉館の公孫樹を思い出してセンチになる。花もなく、歌もないこの霞ヶ関の丘は、逃げ出したいほどの殺風景な街である。

その日、不思議な訪れがあった。

「恵子です。石井さん。恵子ですよ。」

石井は、びつくりして椅子から落ちそうになった。あの日、秩父の夜祭で「私をまもって。」としがみついた18歳の女子職員である。情も通じたが、退職後3年半も見ることはなかった。

石井は、あの時と同じように優しく、自分の娘にするように語りかけた。

「そうか君か。かわりなくやつているか。」

「来年、卒業です」

「そうか。よくやつたねえ。立派だ。あのとき辞職してよかつたじゃないか。」

あの時とは、石井をめぐって敏子と恵子が対立し、結局恵子は職に見切りをつけて辞職し、学道に進んだときのことである。

恵子が去ったあと、敏子の夫が病に倒れ、敏子は石井から手を引かざるを得ない身になっていった。

少しでもそれらのタイミングがずれていたら、恵子の出番の目もあつたし、人と人の色模様も変わっていたに違いない。

「私も石井さんのことは忘れたことはありません。」

「あのとき君を援けてあげられなかった。わるかった。」

石井はわびた。

恵子は、一念発起して進んだ学の道で目標どおり達成に近づいている。

かつて石井が18歳のころ、同様に進学を夢見て青雲の志を持ったが、所与の家庭環境から不本意ながら挫折の道をたどった同方向の軌跡であった。

恵子は、就活中だが履歴書には数年前の通産省勤務が前歴に記載されていた。

内定寸前の会社もあり、興信所の調査も進んでいるようである。おそらく石井や敏子のところにも、興信所が恵子の人物調査に来るであろう。

恵子は、興信所が来たとき内定に不利な話をかつての同僚にしてほしくない。

「そのことをお願いに来たのです。」

恵子は率直に言った。

「君の事をそのような場で悪く言う人はいないから安心し給え。当然だよ。管理官の集まりでも言っておく。」

「あの、敏子さんは。」

「敏子さんは、君の直接の上司だった。会っていきなさい。率直に頼めばよい。旦那さんが不治の病で3年前に休職してね。先日失職したのだよ。敏子さんは身も心もやつれてしまった。」

恵子は、石井をめぐる関係で、敏子の夫にねじ込んだことだったが、その人が不治の病で失職し

たと聞いて驚いた。因果報応というが、みんなが無傷ではなかったのだ。

恵子は、仇敵だった敏子と会うのをためらったが、石井が先導して敏子の執務室へ同行した。

「敏子さん。恵子さんだよ。就職の興信所調査のことで来られた。」

敏子は、4年近く会わなかった恵子が懐かしくもあるようだった。よくも悪しくも敏子自身を過去にすべてさらした相手である。しかし、よくしたもので時間の流れは、それぞれの心の澱（おり）を洗い流してくれていた。

敏子と恵子は女の休憩室へ連れ立った。

数日後、恵子が依頼した例の興信所の人が出てきて、当時の恵子の人物調査をしていった。

勤務状況、態度、執務内容、評価、交友関係である。石井は最大限の評価で恵子をほめておいた。後で聞くと敏子も良いことだけを羅列したという。

石井は、恵子と再会できたが、それはこの一回だけであった。

恵子は、公共放送局のアナウンサーに採用され、翌年には、テレビの全国放送のあちこちに女子アナとして現れ、恵まれたプロポーションで活躍するタレントもどきに成長していった。

敏子の世界

そのころ敏子と、もの言わぬ小林との離婚審判はおわった。審議の中身は、小林の介護が中心の話

題となったようである。

しかし、もともと他人である嫁の敏子に、不治の病で不随の小林の介護を義務つけるためには、敏子の同意が前提になる。しかし、敏子の申し立ては、離婚と言う不同意である。

ならば小林の肉親への義務とならざるを得ない、と言うのが結論であった。

幸い小林は、退職金と、自分名義の預金、若年停止解除の退職年金、敏子と共有名義の土地家屋を持つていた。

介護に必要な通常の経費は賄えるものである。肉親は、それぞれの懐（ふところ）がいたむことなく、小林の介護が可能な経済的環境はあった。

施設でみてもらうことも、身内が雇った介護士にみてもらう体制も可能であろう。

このようなかたちで敏子が落ちついたのは、もと夫の小林が罹病してから4年目のことだった。そしてその後は何もなかったように敏子の生活は平準化していった。敏子は満身創痍だったが、30歳台の若さを武器にたち直っていったのである。

「いろいろありがとう。離婚劇は片つきました。」

敏子は、石井に礼を言った。

「無理はしないで、もう若くはない。」

「そうね。お互いにね。」

目と目を合わせて二人は笑うのだった。それは合意の合図だった。

その夜の愛は4年前とおなじ愛人同士のものだった。二人でいつか作られたコースメニューを繰り返した。

敏子は石井の果実を、もてあそぶように掌（たなごころ）にのせ、懐かしそうに眺め触れ握った。石井も敏子の水蜜桃のようなくぼみに絶えず指を挟んで応えた。

「あなたの奥さんは幸せね。私にも分けてね。」

石井は敏子の陶酔の横顔に自分の頬をあて、茂みをわけて三本指を交互に小さい敏子の奥の芽にあて、敏子のあえぎに合わせて吸い込まれるようなその動きを直視していた。

「変わらないね。同じだ。ここの色合いもいい。」

「ながく辛かったわ。」

敏子はいまや自分が遠慮する人は名実ともに誰もいなかった。

今敏子は、すでに小林と共有名義の自宅から出て、あらたに借り受けたマンションに住んでいた。

「今度うちへ来て。ビールも買っておきます。」

「自分の城は聖域にしたほうが良い。」

「いいわ、あなた好みに装飾するわ。まだ何も無いのよ。見て。」

敏子は苦界から開放され、今夜は再びの石井との逢瀬に心はしゃぎ、会話はおおらかな調子だった。

アウトのとき見ると、ホテルの小さい窓には造花のつる草をぶら下げてあり外の秋の月を邪魔して

いた。

「私を囲ったつもりでいて。」

石井にはすこし重荷のセリフだった。時々会うだけで十分だと思ふ石井だった。

今夜は、珍しく雲もなく澄んだ夜空に、煌々と秋の月がかかっている夜だった。星たちは月光に遠慮した風で、2、3の名も知らぬ星が、とまどうように光を放っていた。

駅に向かう通りは遊興店がもうネオンサインを消し、一般商店も閉める準備中の店が多かった。

「送ろうか。」

石井は、敏子の腕を取った。敏子の新しいマンションは、おなじ路線だが、逆方向の2駅都心よりにあった。

「駅からは近いから大丈夫よ。電車が逆だから、駅まで一緒にいきましよう。今日はスッキリしたわ。あなたもお疲れでしょう。」

お疲れと言うのは、家に帰宅を待っている石井の妻のことを言っているのである。

敏子は、

「待っているわ。」

と、いつて、じつと石井の目を見た。潤んだようなその瞳に石井が投影していた。

敏子は軽やかに上りホームへ階段を上がついていった。階段を上がった敏子は、サツと振り向き、見上げる石井に大きく手を振った。

敏子は、まるで大空へ旅立つ航空機の搭乗口で別れを告げるマドンナに見えた。そしてこれが敏子と石井の最後の逢瀬になろうとは、見送る石井は夢にも思わなかった。

いやがらせ

妻は、いつものように「お帰りなさい」と迎えた。子はすでに寝ていた。

「また、変な手紙が来ているのよ。気味が悪いわ。」

妻が持参した手紙は、ボールペンの震える字体で、あたかも手に力を入らない病人が、たどたどしく書いたような不思議な字だった。

内容はたわいのない嫌がらせであった。

以前、部落民の黒い血などという馬鹿げた内容の嫌がらせがあった。しかし、今日のこれはそのとぎとは違う犯人によるものではないかと感じた。

記載内容にポリシーがないのである。意味が不明だしシナリオがない。実に稚拙なものであった。

もとより用事があつて書く手紙ではないから、たとえば特殊で稀有な社会現象を下品に並べ、ターゲットの気分を悪くさせるのがこれら愉快犯の目的である。

記載内容に恐怖感をもすため、中にかみそりを入れてみたりする場合もある。

こちらが読まず無視すればよい話である。

「不思議とか怖いとか思わせるのがこいつの目的だから、今度きたら、開封しないことにしよう。こういう犯人は、必ず馬脚を現すものだよ。」

「そうね、そうするわ。」

「そういうえば、先日、まさかと思うことがあった。」

「戻りたいのですが。」

石井が事実上クビにして、厚生省へ送り込んだ律子から電話があったのだった。律子は、おずおずと話し始めた。仕事が面白くない。職場も暗い。などと言う愚痴であった。言っている背景はおのずから分かった。

相手にしてくれる人がいなくてさびしいということであろう。律子は、石井がもてあまして、厚生省のアルバイトを紹介してやったのである。

元の通産省には情まで通じた石井がいたが、普通ではそのようなことは絶対にはいはずである。

お茶汲みや、コピー、書類回しだけで、出面（ですら〓日当）をもらって帰るだけがアルバイトである。アルバイトに面白い仕事があるわけがないではないか。

律子の場合、たまたまここに石井という情にあつい職員がいただけの話である。

「いい仕事があつたら連絡します。」

と振り切ったが、律子は、納得いかない風であった。その屈折した思いがこのような嫌がらせの手紙にむすびついたのだろうか。

石井は釈然としない思いにとらわれた。

脅迫めいた嫌がらせの手紙を出して遠くからその反応を見ようとするとする人は、男女にかかわらず数多くみられる。愉快犯とかいわれるストーリーカーもどきであろう。

しかし手紙には、書き手の意に反して、どこかしら個性が出て隠しおおせるものではない。字体とか字の並び、筆つかいなど直接の証拠もさることながら、その犯行に及んだ動機は隠せない。犯人を捜そうと思ったら、自分が最近接触した人を一人ひとり疑ってみることであり、ターゲットが決まったら、その人だけに特殊情報を与えてみるとよい。次の手紙でにそれが反映していたらそれは犯人である証拠である。

それでだめなら無視して、こちらの反応を示さないことである。犯人にとって無視される以上の屈辱はない。

石井は、敏子と愛を交わした日は、妻ともディープな夜を過ごすことにしていた。石井のせめてもの償いである。妻はすでに二人の子もちだから、夢のような愛というわけにはいかない。

石井の感度で計れば敏子と妻とは、それほど違いはないが、別の人格を相手にするのだから、それぞれの愛に忠実であるべきだと思っていた。

以前、愛人の敏子は、亭主に抱かれながら目を閉じ、愛人に抱かれていると自らをまがい、エクスタシーを感じているといったが、その行為は、それぞれのおのの愛に真摯でない神への冒瀆に等し

い。

いまは、コスモスのシーズンであった。山へ入ればキキョウ、リンドウも秋空にはえるころである。

故郷の誼訪の山々が恋しい石井であった。今、出勤まえの庭では、露にぬれたコスモスがピンクと白に咲き分け、シオンの紫の古代色がそれを囲んでいる風情だった。

職場の激震

通産省官房に激震が走ったのは、それから3日後であった。課長が皆を集め、沈痛な面持ちでおしらせに及んだ。

「謹んでお知らせします。私たちのよき同僚であった、小林敏子さんが、昨夜何者かに殺害されたそうです。さきほど、警察から連絡があり、私が職権で遺体の確認をいたしました。」

居並ぶ職員は、啞然として言葉もなかった。石井も、まさかと呆然とするのだった。

「このあとは、司直の手によつて事実の解明が行なわれるでしょうが、皆さんはパニックに陥ることなく普段どおりの仕事を進めるようお願いします。」

マスコミも押し寄せるでしょうが、広報課で一括して扱います。個々にメディアとは接触しないように。

なお、警察は、皆さんに任意で事情を伺うことがあるということですが、その都度私も立会いをする条件を返しています。

ともかく今は皆さんとともに、小林敏子さんのご冥福をお祈りしたいと思います。」

課長は、そういつて頭をたれた。30人の職員もそれに従った。

石井は混乱していた。課員はうすうすでも認知してるように、敏子は数年来石井の愛人であったが、石井はあくまでもこの場では脇役である。

事件を要すれば、昨日、敏子がマンションに帰宅したところ、侵入していた何者かと鉢合わせした。強気な敏子はひるむことなく、その何者かを誰何（すいか〓名を問う）し、問い詰め警察へ通報すると警告した。

パニックに陥った何者かは、窮鼠猫を嚙むたとえどおり、逆に家主の敏子に襲いかかり敏子を死に至らしめた。

現場にふだん持ち歩くバッグがなかったことから、強盗殺人と断定した。犯行時刻はこの日の夕刻7時から10時のあいだと思われた。

第一発見者は3人である。

第一発見者が3人という奇態な事実は、次の事情による。

遺体発見当日の午前9時ごろ、放送局の集金人が訪れた。当然不在と思われた小林宅はドアが半開きであった。「これはもうけもの」と声をかけたがいくらかけても応答がない。

垣間見ると室内は点灯していた。こうした不審な場合の原則的な対応は、放置しておくことである。しかし状況によつては、隣人を伴つて室内を確認するのがマニュアルであった。

集金人は、放置して別のフロアーへ回つたのである。それから小（こ）1時間後に再度小林宅に回つてきた。

先ほどとおなじ行為を繰り返したが結果は同じだった。集金人は再び放置することにした。

そこへちようど郵便局の配達員が小林敏子あての書留郵便の配達に来、放送局の集金人とはち合わせとなつた。

郵便局の配達員は、やはり当然不在と思つて来ており、彼は不在配達証明をドアに投げ込んで帰ればそれでこと足りた。

しかし在室の兆候がみられるので、二人は協議し隣人を伴い入室確認することにした。二人ともそれほど多忙でない立場だったからである。

石井は、課長からの敏子の訃報を聞き、1日中茫然自失の態であつた。その日の終業過ぎ、石井は夕暮れの官庁街をあてもなく歩いた。このまま妻のところへは帰れないと思つた。

石井は多分自分がいま認知症で抜け殻のような顔だろうと思つた。そんな顔を無関係の通行人にならざ知らず、妻に見せたら恐ろしいことになりそうな気がした。

3日前の逢瀬のとき、新宿駅の登り階段の上で大きく手を振つた敏子の最後の笑顔が、今生の別れ

となつてしまつた。別れ際に敏子は、

「待つてゐるわ。」

と、いつて、じつと石井の目を見たのであつた。あの登り階段は敏子の天国への階段だつたのか。石井が次に愛人として敏子と対話できる日はいつなのか。今は生ナマしくて敏子の霊にさえ声をかけられない。とりとめのない幻影のような意識の流れが敏子を追い求めた。

その日の夕刊の記事には女性の殺害が報道され、もの盗りの居直り殺人らしいことと、警察が聞き込みに全力をあげていること程度の内容が書かれていた。

夕刻近くに、翌日の朝刊の続報のネタを求めて記者が通産省の建物内にもたむろしていたので、不要不急の業務は切りあげて即退省すべしとのお達しが回つた。職員はそろつて職場をあとにし、建物から離れた後にそれぞれの路線へ分かれて帰宅していった。

途中までは集団帰宅の様装だつた。

石井はその夜、妻に密着し敏子を抱いた。妻の隅々までなでまわし、敏子の感触を求めたのである。

絶望が癒えない石井は、仮寝の夢のなかで敏子のふくよかな茂みをまさぐつていた。

三本の指で敏子のその芽を包むと、そこから切れ下がる吸い口は指を引き込むほど強かつた。石井と妻は松葉くずしでつないだまま眠つていた。

冷気でふとさめ気がつくと石井の目の前にあつたのは、敏子のものではない豊満な乳であつた。

石井は身震いして静かにはずした。

めぐる因果（一）

敏子殺しの犯人の捜査は進展が見られなかった。都会のマンションの密室内の犯行は、周囲お互いに無関心な住民が多く、隣人の顔さえ見たことがない住民は、出入りする人の内外の別もまして知らない例が多かった。

ただ、監視カメラがあった。これには雑多な人が脈絡なく映っていた。警察はこれを手がかりに画像の人物をつぶしにかかっていた。

一方、敏子の同僚にも任意の事情聴取が行なわれていた。職員には敏子の同僚相互の公私の関係や特に業務上の外部の人との接点が尋問され、一律に、敏子が殺された日の夜のアリバイは容赦なく記録された。

石井はアリバイが完全だった。その時間、石井は課長を含む数人の宴席にあったからである。犯行時間との接点はなかった。

石井が、事情聴取で応えたのは、敏子が永く親しい同僚関係であったことであつた。他の職員も石井と敏子の関係を、ことさら刑事に告げるものはいなかった。

みんな大人である。傷をなめあつて業務に励んでいる公務員同士である。

警察官だつて公務員である。基礎には横につながるものがあつた。

刑事の聴取は、テレビの女子アナで活躍している恵子にまで及んだという。当時、石井をめぐる確執があつたことを、いずれかから耳にしたのであろう。

今は声も出ない元夫の小林さんのところにも、捜査の手がのびたが聴取は困難を極めたようである。

敏子の日常を一番知るもと夫だが、なにしろ人形もどきで、実用的な証言を好む警察とは正反対に
いる障害者である。

敏子殺しは、見ず知らずの通り魔による犯行で、その動機に周囲の人脈からの斟酌すべき事情はないと考えるのが常識であつた。

すでに敏子はこの世にいない。この事実は石井にとつても認めざるを得ないが、過酷な事実だつた。

嘆き悲しみつつ石井は、知りうる限りの敏子との数年間を日々振り返つた。それは二人のおかれた事情から一切記録にはとどめていないが、石井の脳裏には、隠された記憶として、そのときの敏子のよがり声さえ一つひとつ残っているのである。

石井は、敏子の夫の小林の訪問を受けたことがあつた。愠気がもとで恵子を排除しようとした敏子の画策を静めたい恵子が、イレギュラーな形で敏子の夫に必死に訴えた後のことである。

小林は、恵子の訴えを黙（もだ）しがたく、当人の敏子には内緒で事情を聞くため石井のもとに来

たのである。

石井はその訪問の裏に、小林が、石井と妻の間を疑うものがあつたとみている。

小林と石井が、瞬時でも会い意見を交換していた事実は、敏子は死ぬまで知らなかった。

小林も、更なる調査をするつもりであつたと思うが、そのとき思いがけず、小林の部下の公金横領事件が発生し、それどころではなくなつた。

省内で秘匿されていた内部調査中のこの公金横領が、いずれかからマスコミに漏れ、その時点で外部に隠しとおすことはできなくなり、公式に告発する必要に迫られた。

しかし部下の容疑者は、司直の手が回る直前に逃亡した。

その前後の心労で、小林は不治の病に倒れたのであつた。以来、3年の闘病を経て職を辞す事態となつた。

この間、敏子は石井との愛の交流も断（た）つて介護に当たり、内助の功を全うした。3年後敏子は、小林の失職を機会に離婚にふみきつた。

病中の小林に社会復帰の可能性がないことと、小林の失職で退職手当、年金受給の見通しがつき、身内の介護へ移行が可能な環境になつたこと、等の周辺の事情の変化が理由である。

それから数ヶ月、敏子は自らの生活の基礎も整い、久しぶりの石井との逢瀬も実現したのであつた。それからわずか3日目に、思いもよらず三十路（みそじ）半ばの命を断たれることになつたのである。

めぐる因果（2）

敏子殺人事件は、それから半年後大きく動いた。

警察は、監視カメラの画像を分析した。雑多人影が見えたが、その中に殺人のあった当日と、前日の同時刻におなじ人物が二回見えた。時刻が死亡予測時間にほぼ一致した事実は、有力な容疑者である意味付けがある。

さらに分析したところ、4年前おなじフィールドで展開された未解決の公金横領事件の容疑者のメソと酷似することが分かった。

その写真を療養中の小林に確認したところ、それは以前に小林の部下であった平田洋介と判明したのであった。

平田は、敏子を強殺したあと、敏子の愛用のバックを持ち出し、銀行カードでATMから200万円を現金を下ろした。

逮捕のきっかけは、このATMの場所と時間、そしてこのときの監視カメラの画像であった。

天網恢恢疎にして漏らさず（てんもうかいかいそにしてもらさず〓お天道様はおみとおしだ）と魏書にあるとおり、悪人は一時は逃れえても、天が悪事を許さないのである。

このようにして容疑者が逮捕された。それは4年前の公金横領事件にまつわるしがらみに由来した。

以下は、逮捕された平田洋介の供述である。

4年前、平田は、中央税務署で小林の部下として在職していた。心ならずも手を染めた、やってはいけない公金の寸借まがいの経理処理がバレ、累積した500万円が公金横領ということになった。

上司の小林は、「すぐに返済すれば公にしない。」と伝えてくれたが。しかし、誰かがマスコミに漏らしたらしく救いようがないことになった。

平田は、汚名にまみれ職場の針の筵にいたたまれず、すべてをかなぐり捨てて逃亡した。逃亡の先は沖縄であった。うまく労務者として米軍基地にもぐりこみ治外法権の基地内で生活したのだった。

4年たって、ほとぼりも冷めたと思われるころ東京へもどったが、逃亡時の上司の小林課長は病魔に倒れ、話もできない状態になっていた。しかも奥さんとは離婚し、小林元課長は施設で介護を受ける身の上であった。

私は当座の金がほしかった。病のため話にもこと欠く小林さんをあきらめ、病室のメモにあった小林元課長の奥さんに、当座の資金を借用しようと思った。私は以前は税務職員として、国家権力の行使に全力を尽し、成果も挙げてきた公務員である。しかし公金の横領という最低の失敗によりプライドも失って、貧すれば鈍するのであった。

追われる身の私を保障してくれる先は、ある意味では恩人である小林さん夫妻しかなかったのである。

私は、小林さんの奥さんの居所である四谷のマンションを尋ねた。

私が、「小林さんの部下だった平田です。」

と、名乗ったところ、奥さんは事情を承知していたらしく招き入れてくれた。

事情を話すと、

「用件は分かっていたが事情が複雑だから、いくらか用立てできるか元の夫と話してみる。明日もう一度来てくれ。」

ということだった。お言葉通り翌日うかがうと

「元夫は、情けは人のためならずと言ったといっていました。そして自首して、手持ちの財産を処分し返済せよ。とも言い、これ以上の逃亡は無駄だと自首を勧告するよう私に言っていました。」

と、小林課長のメッセージを語り、そしてこれは元夫ではなく私の気持ちですと、自首までの費用と言って30万円ほどを渡してくれた。

私は自首の決断もつかずにいたので、もつと金がほしかった。この奥さんは相当の金を持っていると思っただけです。

私は、2年前に女房とも別れていた。私の女房は、そこまでして夫と生死を共にする気は失せてしまっていた。

私は思わずしらず奥さんに、情交を迫った。情を媒介にさらにお金を調達できると思っただけ、昨日からの奥さんのたち居ふる舞いが魅力的に感じ、むらむらと情欲を覚えたからです。

今となっては金は要らない。放置していった住宅や土地は差し押さえが入っているだろうがそれで

加害額の半分でも充当できればと思っています。

以下は省略するが、この後に敏子の生命にかかわる修羅場が展開されたのである。

これが敏子殺害にいたる状況と動機であった。

元夫の小林は、もうこれ以上の逃亡は無理と判断したが、小林から警察へ通報することはしなかった。

また依頼された金も貸すことは、「情けは人のためならず。」と言い、平田に自首を勧告した。それはまさに至大な諫言であった。

小林の付き添いの介護員は、訪れた平田が逃亡犯であることに動揺したが、患者の小林の目の動きは警察への通報を禁じていた。

そして、元小林妻の敏子は、小林の意向をうけて平田に逃亡のタイムアップを告げたのである。

しかし、これらの元夫妻の思いやりは、平田に通じることなく、結局平田は、こともあろうに恩人の敏子まで殺害することになったのである。

この日夕刊では半年前の、通産省女子職員殺害事件解決の記事が三面に掲載された。

平田容疑者の顔写真もだされ、この殺人犯が4年前の中央税務署の公金横領事件で逃亡中だった平田であること、などが解説されていた。

石井は、一連の事件が3年前の小林の罹病に直結している因果に驚いた。敏子もその一翼に絡んだ立場であったのだ。めぐる因果の末という奇異な現象と結末だった。

翌年、療養中の小林は没した。生前、敏子は元夫の小林は、余命5年と言っていたが敏子より永く生きたことになった。

新宿駅の階段をフェアウエルのサインで手を振って登っていった敏子の姿は、クッキリと鮮明に石井の脳裏に焼きついていた。

あのとき敏子は天国への階段をのぼっていったのだ。

しかし今思えば、石井に向かって「待っているわ。」と投げかけたあのときの敏子のメッセージは、本来は、夫の小林に向けられるものであったのではないか。

元夫の小林の死去は、敏子の死の翌年だった。このことを小林夫妻の運命に重ねてみれば、タイミングとしてもそれは至当であり、絵になる自然のシナリオにみえた。

「敏子さん。ぼくを待つことはない。待たずに元夫の小林さんとなかよく天国で結ばれてくれ。」

石井は、敏子が惨殺されたマンション方向へ向き祈ったのである。そして、天を仰ぎ、「敏子さん、ありがとう。」

と、つぶやくのだった。

それは、糟糠の心の妻に送る石井の感謝の気持ちであった。

今日もいつもの離れ雲が青空にたむろし、すべての時間を飲み込むような午後の日だった。

エピソード

敏子もその元夫の小林も、石井の周囲に現実に存在したそれなりに重い人々だったが、片や事件にまきこまれ、片や病気で思いがけずも人生半ばで世をはなれ遠くへ去ってしまった。

その後石井は、自分だけが生存中の人または生き残った人として、人生無常を感じながらも日々の生活に紛れ、節子と子供との生活を平和に送っていた。

石井には、平和すぎて物足りない日常であった。

それとは裏腹に、日本を揺るがすような事件がいくつか起こっていた。浅間山荘のたてこもりは、銃砲で武装し革命を標榜するいわゆる過激派が起こした事件だった、脈絡は不明だが、日航機をハイジャックして北朝鮮へ乗り込んだ集団もあり、またテルアビブ空港で勇ましく突撃し爆死した単独行動の男もいた。

このような破壊行為は、かつて学園紛争を指導したあたりから流行したセクトのテロもどきであった。

警察白書によれば、革マル派、中核派、革労協主流派、革労協反主流派など多数のセクトが、仁義なき分派を重ねた主導権争いも絡んでおり、やぐさの勢力抗争とおなじパターンもみられた。

革命には内部規律が重要と、仲間を次々に処刑した赤軍派は、その罪状に日本中が驚いた。

その後裁判で何人かが死刑などに処せられたが、その稚拙な独善の思想らしき祝詞（のりと）をみると「民衆はついてくる」と本気で思い込んでいたようである。

某日、石井は、民間会社の経営指導のため、省から離れた丸の内の三菱通りを歩行していた。

そこで遭遇したのが過激派の爆弾事件である。それは三菱重工の本社前で起こった。

黒煙がたなびく凄惨な現場には、何人かの人が倒れ、すざましいサイレンの音が近づいていた。

石井は危険を感じて現場を離れようと反対側の歩道へ上がった。

そこには思いがけずも、同僚の亜矢子が呆然と立ち尽くしていた。

「どうした。怪我でもしたか。」

石井が声をかけると、亜矢子は破顔したが茫然自失の面持ちだった。

「よく、聞こえないの。」

爆風か、爆発音で耳がジンジンしているというのだった。すでに重傷者の搬送は終わった救急隊が、「怪我をしている方はいませんか。こちらへおいでください。」と叫んでいた。

石井は、亜矢子の手を引つ張つて救急車に乗り、鼓膜の検査を依頼した。

「だいじょうぶか。」

との問いは亜矢子に聞こえたかどうか分からなかった。

検査が済んで、無事だった亜矢子は、気が抜けたように石井に寄りかかり、目を閉じるのだった。

どこに災難があるか分からない。無辜（むこ）の人が卑劣なテロに遇うか遇わないかは、ちよつとしたタイミングで、それが生死を分けることになるのだ。

その宵、二人は偶然の無事を得たその杯をかわした。妻の節子と正式に結婚するまでは、この亜矢子と契りを交わしていた仲であった。石井が、

「永かったね。」

というと、

「久しぶり。と言って。」

と、すねるしぐさで酒を注いだ。確かに、「永かったね。」は、生々しい情交を主眼においた機微を感じる言葉である。人と人の澱（おり）は、時間が解決してくれる。いまさら過去を思い出す手間は必要だった。

二人が今日の事件で偶然無事だった、そこから改めてスタートすれば事足りるものであった。古い二人のしがらみは、時間が流し去った澱のなかで同様に流れ去った。

石井には、あのときの亜矢子の処女の戸惑いだけが強く印象に残っていた。

あの日は、鎌倉のあじさい寺を訪れたのだった。

「いやよ。さいごまでやつちやいやよ。」

宿の寝乱れた枕辺から、あえぎながら訴えた処女の亜矢子は、今はすでに数年の経験で立派に大人になっていた。

今夜の亜矢子は、石井の動きに腰を浮かせてあわせ、自らも夢見心地のようだった。

あの日狭隘と感じた亜矢子の芽先の間口は、大女のせいもあるだろうか、今は開脚にしたがつてむりなく広げていた。省の男の同僚が卑猥に語る「十分に使い込んだ」広めのそれであった。

「私、女人高野へ行きたい。」

一休みの枕辺で、亜矢子は石井の目を見ていった。女人高野は女の寺である。

「君はそんなに罪深い女か。？」

と聞くと、

「そうよ、私はあなたの言うことを聞かなかった。」

それは、石井が再婚前、唯一亜矢子と結婚可能なチャンスがあったことを言っている。

亜矢子は、石井の性格の不定形をみて、到底私の相手ではないと受け入れなかった。

そして、二人の関係を整理することなく、現在までただ親しそうな隣人として伏目と横目で見合ってきたのだった。

女人高野とは、室生寺である。奈良の真言宗の寺で、高野山が女人の入山を禁じた律に対して、女人の入山が許されたことから「女人高野」と呼ばれた。これは室生寺の代名詞にもなっている。

この石井と亜矢子の室生寺を尋ねる旅は、いつぞやの石井の再婚劇のとき、心ならずも途中でやり残した二人の、やらねばやまない心の整理の旅だった。

亜矢子は、自分の好きな古寺巡礼で過去と現在の隙間を埋めたかったのであろう。

亜矢子と石井の関係にはそれ以上の復活はなかった。しかし乗る新幹線やロマンスカー、そして宿でも二人は夫婦として扱われた。

「楽しかったわ。」

亜矢子は笑った。

「またあなたと行きたい。」

と、それは本音であった。

「いつでも、つないでくれ。」

しかし、二人の「夫婦」旅行は、その後二度となかった。公序良俗を思ったからでもなく、やけどッくいのが消えたわけでもなかった。

すでに二人の心の絆は完璧に結ばれた大人の恋である。さらなる絆を結ぶ必要はなかった。そして二人が生存する限りはそれは継続するであろう。

東京へ向かう新幹線の窓の夢に石井は、自身のまぶたに浮かぶ原風景である故郷信州の山々をみていた。春の霧ヶ峰の雪に溶けている湿原に、まだら点在する池塘（ちとう）であった。

そしてそこに互いに袖をふれ合い苦楽をともに見た、めぐる女性の一人ひとりが石井に声をかけてくるほろにがい夢であった。

諏訪のはじめの乙女たちの姿や、聖子のおもかげや通り過ぎた恵子や律子、さらには今は亡い敏子も登場するのだった。

雪まだらの湿原の池塘の汀（みぎわ）に立った石井の思いは、池塘春草（ちとうしゅんそう）の夢という青春のはかない夢であり、それはいまアルプスの透きとおる芙蓉の峰々へ、光るかぜにのって散華していくのだった。了

諏わっ子散華



八ヶ岳

雨のそば降る深夜だった、国道20号線岡谷市長地（おさち）付近、左手に日々彼が通勤する見なれた工場社屋をかわした数分後のこと、何を勘違いしたか彼の車は、右折の合図中の先行の大型貨物車に追い越しをかけてしまった。

そして彼の車は、右折をはじめた大型貨物車の側面へ、そのまま突っ込んで大破することになった。

彼は即死であった。

君は、あの日うすくれないの石楠花（しゃくなげ）から生まれ、今宵、石楠花の花びらへかえっていった。

1

彼は、祖先から十代続く旧小飼村に始まる、旧安国寺門前村以来の旧家に生を受け、この地に深く根ついた生粋の諏訪っ子であった。

長じてのち、彼がでた学校は名門ではなかったが、蚕糸学校が前身の歴史ある工業高校である。

それはこの地域の面積の三分の一を占める湖の対岸にあった。

彼は、卒業するとすぐに同地にあるカメラ工場に就職した。それは都会を志向していた彼としては

不本意な選択だったが、長男を手元から放したくない親の気持ちを尊重して諏訪で生きることにした一応の決断である。

上級学校へ進学した場合、多くはそのまま都会の魅力にひかれて地元へは戻ってこない。それはお向こうの飯田の息子も、隣の小海の息子もそうだった。

父母はそれを横目で見てきたし、それぞれの家の親の愚痴をいやと言うほど聞いていたのである。

地元へ就職した彼は、この地で会社勤めをしながら余暇に、北アルプスなどへの山のぼりを楽しむ趣味をもって地域に定着しようとした。

それは諏訪に残って暮らすメリットの最たるもので地の利である。東京あたりから夜行列車で一晩かかって来るような無駄がない。

数年後、彼は、地域の山岳会に入会し、中堅のリーダーに成長していった。

四方を秀嶺に囲まれたこの地方では、山好きも多く、山岳会も外国の山もターゲットにするほどの高度な活動をしていた。

その後きびしく体験した山の理念は、彼の社会生活にも、妥協を許さない信念と心構えを形成していった。

この地方の精密工業を主とする内陸工業地帯は、戦前に、その時代の興国産業であった蚕糸工業が、化繊におされて左前になったのと入れ替えに勃興したものである。

人々は、紫色のベールに包まれた四方の嶺々を仰ぎながら、時代の推移を実感していた。

時代の流れは、保守的な田舎びとにとつて、好まざる試練であつた。そして、多くの人々は、ある人は浮き、一方では沈み、いずれも生き残りを賭けて試行錯誤を強要されてきた。

今の彼は、自分に生命力がほしいと思つた。惰性になつた通勤と、工場でのレンズ磨きには、もう飽き飽きであつたのだ。

工場の底辺でこのような誰でもできそうなレンズ磨きは、俺の仕事ではない。とも思う日々だつた。

山登りは、そんな彼の心を癒してはくれなかつた。彼は、山へ思いをぶつつけたのだが、登れば登るほど自分がとり残された空虚な心に陥るのであつた。

それは、彼の、登山への姿勢が、社会性に欠ける、のめり込み登山であつたことによる。むしろハイキング程度の軽い大衆的な範囲のものだつたらよかつた。

登山への孤高の思い入れは、彼の社会性を阻害したといつてもよい。会社や仲間との接点がずれるなどの齟齬は、彼自身に帰する問題だつたのだ。

カメラ製造の工程は、精密さを要求される。下請けが製造するネジ一本たりとも、厳しく検査された。レンズは終日磨かれ、商品試験室からは不良の指摘が次々とおろされてくるのである。東京の本社からは、新製品やリニューアル企画の報告を、期限を切つて迫ってくるのであつた。

彼は、迷いながらも山へ登り続けていた。睡眠不足のだるい体を抑えて歩くと、黒い針葉樹が懐中電灯の光も拒否し山の空間はしづかだつた。雪解けの水は山の音になり、透明な世界をつくつた。そ

して人の意識は、天の川へながれてゆくのである。

彼は、生命のある限りその生命を有効に活用しようと、今暮れるアルペンローズの空を見上げるのだった。

カメラの生産工程の部分品になってしまった自分を、人間としての全知をかたむけ、せめて山をとおして、自己の価値の発見と認識により、質的に発展させたいと考えていたのである。

夜明けの風は底から冷え、むかう山は黒かった。しずかな谷の路は、背後の遠い山々の端から白い反射をうけ、山の朝は西のほうから明けていた。はく息は白く凍った山路は、朝の残雪を蹴る靴の音だけが静かな針葉樹の山にしみとおっていった。

そのとき今日という日は始まった。

石楠花（しゃくなげ）からうまれた彼は、夏にむかつて咲く石楠花だった。彼は、将来より現在の自分について、着実に立場を認識する必要があることを、自分なりに認識してはいたが、まだ迷いは尽きなかった。

2

戦後小作人が、耕作権を持ち所有権まで獲得するという成果を得たが、それも今では時流を変えつつあった。

米あまりと生産調整の減反である。戦後20年の流れはすべてを変化させた。ただ四方の秀嶺と湖の青さだけは、時代を超えて今日も紫雲をたなびいていた。

人々は考えていた。時勢とはいえ農業を打ち切つて、賃労生活をするには不安があつたのだ。周囲は忙しくなつていった。

彼が、これらの不安のなかで、支えとした生活は、山岳会長としてメンバーの安全で、高度な山行の遂行の保証と責任を果たすことであり、それは一方彼にとつても、工場のレンズみがきという部分的存在の空なしい空間を埋める、大切な生活上のポイントとして有効にみえた。

生命の原動力は人間にとつて何よりも大切なものであり、それは自分でしか解決できない崇高な資産でもある。

経済活動に組み込まれ、カメラを生産する企業の社員であることが、そのまま生きがいになることはありえなかつた。カメラ製造は、一国の経済成長には寄与するだろうが、企業活動の目的は、ベネフィット（利潤）による再生産のサイクル維持である。

その企業活動への参加が、間接的にも彼の生命力となるような納得は自身では得られなかつた。

彼にとつては、それはむしろ毎月の給料に帰することであり、彼はそれを山の費用にまわしているところに価値を見出せた。

しかし、やがてこの個人的実利だけでは会社勤めを続ける原動力に欠ける物足りなさも感じるようになっていった。

完成品の精巧なカメラを操作するとき、またそのカメラを眺めるとき、彼はその美しさを改めて再認識することができたのは、その中心で輝くレンズに映った自分の顔を見たときだった。

「生産」は、歴史的に崇高な人間の使命であり、「労働は、人間の本性」であることをそれとなく身をもって感じたときだった。

さらに、全体は部分の集合であり、部分を担当する彼は、それについて一定の使命を果たさねばならない義務もあることはなんとなく分かつてはきていた。

一方で、会社が利益を得ようとするフィールドでは、その生産過程で何かやらねばならない工程をカットしたり、下請けへのダンピングを強要する営業施策があるようだった。

もし、下請を含む社員への労働強化となったり、公害をたれ流して社会から非難をうけるようなことになれば、当然、労働組合の団体交渉で指弾されたり、役所の公害課を窓口とする改善の指導をうけたりすることになる。

そして、企活動のからくりと、一方の正義の理念が身についたとき、彼にとつて、会社生活も山での私生活も徐々に充実していくのだった。

彼の日曜日ごとに山に入る生活は定着し、今週もまたその日があった。

以前、偵察しておいた、八ヶ岳大同心正面岸壁が、今回の目標だった。青黒い3kmの空に、赤い岸壁がそそりたっていた。このルートは、従来登攀不可能とされていた、かぶり岩（オーバーハン

グ)をもつ500mの岸壁である。

ピン(ハーケン)を順次目上の岩の割れ目に打ち込み、ザイルをそのハーケンにひっかけ、もう一人がジッヘル(安全確保)しながら、先行者は手足を岩角にのせ踏ん張って登る、バランスの登攀が普通である。

しかしこの岸壁は、上へ行くほど、反り返っているので、手を岩角にかけられたとしても、足のほうは宙吊りになる。つまり登れない岩なのである。

そこで、ピンはハーケンではなく、ボルトをドリルで岩に穴をあけて打ちこむのである。

まさに建築工事であり、バランスクライミングを旨とする一派からは批判もある。

このボルトに縄ばしごを次々に引っ掛け、空中にぶら下がった状態で、もう一人が、下からザイルを操り、先行者も空中で、このいくつかの縄ばしごで、位置をずらしながら、出っ張った岩を乗り越えて登っていくという困難な登攀である。

手順を間違えると、墜落して宙吊りになってしまう。

かつて、谷川岳の、衝立(ついたて)岩で、登山者が登攀中にスリップで転落し、ザイルの両端につながれた二人の登山者は、ザイルの半ばを支点に途中の岩に引っかかり、二人とも、滑車にかかった釣井戸の両端の水桶のような状態で宙つりになってしまった遭難があった。

通報があつて、医師が双眼鏡で見たところ、二人の転落者は、すでに力尽きて遺体となつてい

いう見立てであった

場所も直接行って救助できる状況になく、宙にぶら下がった遺体をいかに下ろすかという「救助」だった。

自衛隊の出動となったが、ヘリも接近は危険なので、隊員が、できるだけ現場に接近して、機銃でザイルを撃つて遭難者を岩から落とすという荒っぽい作業になった。

弾丸はザイルに数発命中しているはずだが、不思議なもので宙にあるザイルは、ゆるるだけで切れなかった。弾丸が命中しても、ザイルがシナって逃げてしまうのである。

作戦を変えて、今度は、岩に接して固定されている部分のザイルの一点を狙った。

やっとザイルは切れたが、その瞬間、その体は、あたかも生きてるように、のけぞって、手を振るようなポーズをみせながら、宙を舞い落下して視界から消えた。

本人たちは、自らこのような末路をたどるとは、昨日まで夢にも思わなかったであろう。

あえて危険の多い山へ行くのだから、事故もありうることは当事者は覚悟の上かもしれないが、その覚悟はたぶん希薄なものだ。だれが責任を取るとかの問題ではない。結局、自分が加害者で、同時に被害者なのである。

今日、彼が挑んだ八ヶ岳大同心正面フェースは、谷川岳の、衝立（ついたて）岩に比べれば規模は

ちいさいものの、谷川岳の火山によらない硬い岩ではなく、八ヶ岳特有のもろい岩であるのが特徴であった。

この困難な岩壁で彼は、2度ほど宙にぶら下がった。ザイルで確保しているので転落はないのだが、はっとする瞬間である。手がかりの岩が裂けて、頭をかすめて崩落していった。

思いがけずも転落寸前の体験をすると、瞬時に気持ちいが萎縮し、やめたくなるが、こんなところで退くもならず、更なる重荷を感じながら前進するしかないのである。

足が地から離れ、宙にういてもがくとき、脳裏に浮かぶのは、後悔と、現状からの逃亡の本能のほか何もない。突然、脈絡もなく、なぜか幼時、母に抱かれた子守唄がかすめるのであった。

登る前には、生きる原動力を得るためにあえて危険な登攀をするのだ。などとカッコつけたものだが、危機に陥ると、そんな哲学はどこかに吹き飛んで、わらにもすがりたくなるような、神頼みになってしまふのであった。

登攀が終わると、一時的には開放感で満たされる。当事者にしかわからない過剰な幸福感である。同時に、もう二度と危険な目に会いたくない、という気持ちもおこるし、利害得失のはかりでは、バカバカしいとも思う自虐も湧き、複雑な気持ちの整理におわれるのである。

頂上に立つと、今日も、見慣れた木曾駒ヶ岳の向こうに、赤い雲居が見えた。やがて、帰路を尾根歩きでくんだり、針葉樹林に入っていくと、先ほどのうちひしがれた気持ちは回

復し、徐々に充実感があふれてくるのである。

この人間の不思議な感情の起伏は、繰り返されるたびに、優（すぐ）れて個人的な独善だなど思ったりするのであった。

とりあえず、今日の行動が終わった尾根筋には、西の空の五色の雲と、今日の落日がアルペンローズといわれる、うす赤い空間をかもしだしていた。

諏訪湖の岸边に、カメラなどの精密工業の工場街が並んだのは、戦後のことである。それまで片倉財閥が羽振りを利用させた国策の絹製糸は、今は化繊におされて没落した。

女工哀史で、鬼か蛇かといわれ、嫌われた当地の人々は、その悪い評判をそそぐ暇もなく、時計や光学機器に生業に転じたのである。

当地の人々の、臆面もないこのような変わり身の速さは諏訪地方の未来を開いた。

1963年は、日本中、高度成長政策の中でおどっていた。

地域内でも、早くから労使の対立はあり、政党の指導も入り繰っていた。田舎の人は、比較的心持が単純だから、感化されやすいこともあり、労のほうは、林百郎議員や、原茂議員の影響が強かった。

使のほうでは、後の宮沢喜一総理の叔父の、小川平次議員が君臨した。鉄道疑獄で排除されたそ

の父の、小川平吉の悪評はもうなかった。使 では、もうひとり、宮沢胤男議員が票を分け合った。労働組合側に立った彼を、会社は容赦なくレンズ磨きの単純作業の部署へ左遷し、賃金と昇進に露骨な差別をかけてきたのであった。

これら会社の仕打ちに、彼は正義感からの闘争意識を持った。それは戦士の理念であった。

3

時計、光学製品のメッキ工程では、その廃液の不完全な処理が公害につながり世の非難を浴びていた。

この時期全国の企業は、これら公害に無頓着で、利潤追求に現（うつ）つを抜かしていた。水俣病を起こした「窒素」という会社などは、企業悪の最たるものであった。

彼の会社の工場内の労使の対立は、社員への労働強化、労働組合への弾圧に反映し、険悪な空気があった。た。だ。よ。つ。た。

彼は、自らを総括した。この道しかないかと決意した。ひとの浮世の見栄を捨てて超然とするような、山を中心とした今の生活から脱却して、正義を通すべきだと考えたのである。

企業は、愛社心をあおり、労働の生産性を伸ばすことに主眼を置いていたし、公害対策に要する経費は、できるだけ節約しようともくろんでいた。

その地ならしのため、殊に労組役員への差別と、優良社員への褒章による差別化を図り、アメとムチを駆使して社員の分断を図るのだった。

また、透明に澄んだ、太古から天竜の住む、湖の水は汚染されていた。お決まりの産業による自然破壊の進行である。

公害を、経済学として学際的に位置つけると、「外部不経済」というファクターで、マイナス成長を加味することになる。

会社簿記の、損益計算書では、公害損で計上するのであるが、企業がもつとも嫌うものであり、できれば無視したいところである。

2013年現在、中国国内で、有毒ガススモッグが頻発し、生活もままならない事態に陥ったのは、公害を放置して国民を生産に駆り立てた、国家と企業の責任である。

「公害損」の費用をバランスシートに計上すれば、収益にマイナスを加えなくてはならないから、収益幅がその分小さくなる。それよりは、国民に公害を我慢させたほうが得策という国家の論理であろう。

大工業地帯では、海の汚染が問題になった。漁業に多大な悪影響があり、食物連鎖の摂理から、人体にも公害病の発生が頻発していた。

それは、この地方でも同様である。下請けのメッキ工場は、廃液をそのまま川へ垂れ流しているのである。

これら水路は、水田の用水路であり下水道ではない。公害を発生企業の責任で発生源からカットするのは、当然の義務である。

彼は、企業のあらゆる面での欺瞞を見た。

全国各地の公害撲滅運動が佳境にいたるところ、この地方でも、すこし遅れて住民の話題に上つてきていたのである。

これらを運動のレベルまで持ち上げる主役は、政党や地域労組、市民団体の意識改革から始まるのである。

彼は、企業が、金のかかる公害防止の設備の設置はできないとか、設置を先送りしたいとか、言を左右に逃げ回る状況を見て、企業に一撃を加える必要を感じていた。

それにはまず政治の力で、一般の意識を変えていかなければならない。

この時期は、ちょうど衆議院選挙が告示されていた。春闘をまえにして、革新側はこの選挙にぜひとも勝ちたかった。

彼は、忙しかった。企業との団体交渉が終わると、選挙事務所へ駆け込んで打ち合わせを行い、さらに、今度は、山岳会事務所へ飛び込む日々であった。

このめまぐるしい一日一日は、彼の心を充実させた。今、彼は彼にとつても価値ある人間に思えた。

一方、この多忙の中で、山岳会の会長役は、だれかに譲りたいとも考えるのだった。

その夜は、雨が降っていた。すでに夜半の12時をまわっていたが、選挙に休みはない。後援者の娘を送っていく約束があった。

彼はといえば、もう二ヶ月も山には入れないで入るのだった。湖畔をとばす車のフロントガラスは、雨とライトとでギラギラ光っていた。彼は忙しかった。フロントガラスはさらにギラギラ光っていた。

いま、山は、石楠花（しゃくなげ）が咲いているころであろう。選挙が終わるころ、彼は23歳になるのである。

やっと自分の生き方に自信が持てた彼であった。山に対しても、今は正しい理念にたって冷静にみることができた。

人間は、自然とは融合しない。それが正解である。山もそうだが、自然が、具体的に人間に安らぎをくれる、ということはない。それは錯覚である。

人間は、自然に属するのではなく、あくまでも人間社会の側のものである。山を愛し、山にうずもれたいというのは幻想である。

山は、スポーツでよい。それ以上を求めてはならないのだ。彼は、尾根筋の石楠花を見たいと思った。

それは、空のブルーと対比してピンクに生えていた。石楠花はきれいだ、美しい。「美しい」だけでよい。それ以上でも以下でもないのである。

はやくすべてを片付けて、石楠花の山に登りたいと思った。しかし、とても片つかないだろうとも思うのだった。

石楠花から生まれた彼は、22年後の今宵、石楠花の花びらに帰っていく定めに殉じた。

国道20号線はフロントガラスのライトの幕に、そば降る雨の水滴が揺らめくように、流れ落ちる夜の絵が彩っていた。

ここは岡谷市長地（おさち）、左手に日々通う見なれた工場社屋をかわした数分後のこと、彼の車は、右折の合図中の先行の大型貨物車に、何を勘違いしたか追い越しをかけてしまった。

そして彼の運転する車は、右折を開始した大型貨物車の側面へ、ノーブレーキで突っ込んで大破した。彼は即死であった。了

●
著者プロフィール



伊藤正房 いとう まさふさ

信州諏訪郷宮川村に生まれる。岡谷工業高校中退。諏訪清陵高校卒業、法政大学ほかに学ぶ。東京都庁勤務後著作活動。インドネシアバリ島在住。

誦訪っ子散華
2014年5月1日 初版発行

発行人 伊藤フミヒロ
発行所 パウダーガイド社
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-13
Fax 03-5741-1418
powderguide@pguide.jp
<http://www.pguide.jp>

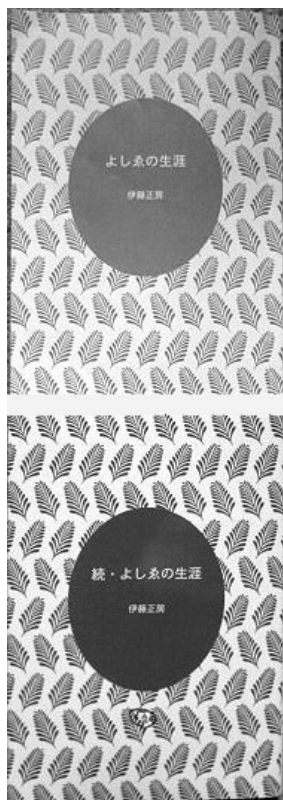
ISBN978-4-903275-33 c0093

伊藤正房の本 1



大陸ぼたんの里 (B6判 100ページ) 昭和の夕映え (B6判 360ページ)
栄光の南十字星 (B6判 188ページ) 流れの果て (B6判 206ページ)

伊藤正房の本 2



よし糸の生涯 (B6判 220ページ パウダーガイド社刊)
続・よし糸の生涯 (B6判 228ページ パウダーガイド社刊)

パウダーガイド社の本



ワカコさんのアメリカンキルトワールド 田村和嘉子著
富士山を知る見るハイキングガイド 伊藤フミヒロ著
バックカントリースキー&スノーボード 伊藤フミヒロ著

誼わっ子散華

著 者：伊藤正房

発行日：2014年09月16日

発 行：MyBooks.jp (www.mybooks.jp)

運 営：欧文印刷株式会社

〒113-8484

東京都文京区本郷1丁目17番2号

電話：03-3817-5910

<http://www.obun.jp>

組版・印刷・製本：欧文印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが下記のアドレスにご連絡ください。

support@mybooks.jp

108459-20140916121513-CPK



108459-20140916121513-CPK